伊能忠敬研究

史料と伊能図

二〇一八年　第八十四号

伊能忠敬研究会

史料と伊能図「伊能忠敬研究」第八十四号

伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.84 2018

表紙解説

国立国会図書館蔵 伊能大図58号銚子部分 89号船橋部分

表紙の図は九十九里から銚子半島に至るまでの忠敬の足跡である。

二次測量は享和元（1801）年4月2日江戸を出発し、三浦半島、伊豆半島を測量し一旦江戸に戻り、改めて6月19日江戸を出発し、江戸湾東縁から房総半島を廻り九十九里を経て銚子に着いた。

忠敬の出生地は旧**小関村**（現九十九里町）である。少年時代砂浜に寝ころんで星を仰ぎ、大志を抱いたであろう海岸をどんな思いで測量したのであろうか。旧暦7月16日**屋形村**に着くと父の実家であり少年期を過ごした小堤村（おんずみ）の神保家に立ち寄った。17日**井戸野村**（旭市）では、他の隊員とは別に忠敬の二女篠の嫁ぎ先である太田村（旭市）の加瀬佐兵衛家に宿泊している。

九十九里の集落は海岸線に沿って平行にあり、内陸側から岡集落、新田集落、海岸に近い納屋集落となっている。九十九里の海岸がかつて沖へ沖へと太っていった証拠である。今その九十九里浜に異変が起きていると云われる。

銚子から旭市**刑部岬**にかけての断崖絶壁が海食崖の**屏風ヶ浦**である。ここは江戸時代からの観光名所で赤松宗旦の利根川図志に銚子濱磯巡りの終点として紹介されている。

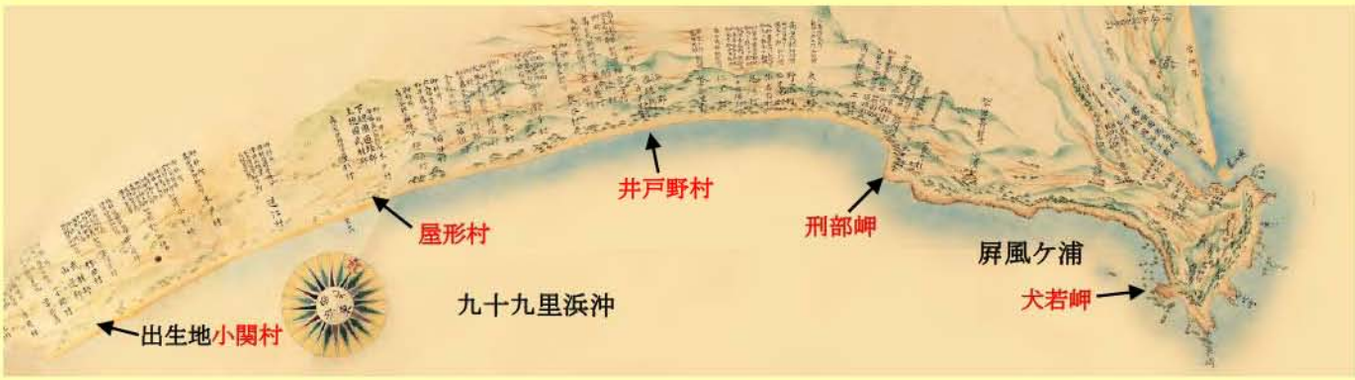
この海食崖はかつて1年に1m～50㎝も後退していたという。今は消波ブロックが置かれ後退速度はかなり抑えられている。そのため断崖の一部がなだらかになり植物が生え始めている。素晴らしい景観はどうなってしまうのか。

屏風ヶ浦を削った土砂は沿岸流に乗って九十九里方面に運ばれている。現在、九十九里浜は砂の供給が減り痩せてきており、侵食対策のためか多くのヘッドランド（人工岬）が造られている。

屏風ヶ浦は水郷筑波国定公園の南端に当たる。国の名勝、天然記念物にも指定され、5年前には銚子市全域が銚子ジオパークに認定された。ジオツアーの客も増えている。国土保全と景観保全など環境問題の難しさが垣間見える。

当時の地図作りでは広範囲の補正に高い山の方位測量が欠かせない。富士山の方位測量は特に重要で館山市の洲崎で4日、銚子で9日待って成功している。測量日記に「**犬若岬に慶介富士山を測る**（中略）**その悦知るべし**」と記している。忠敬は銚子での富士山の方位角を計算値として得ていて、その値に近い実測値を得たので「悦」と表現したのではないだろうか。確証は何もないが忠敬らの測量方法で日本列島の地図作成ができるという、自信さえ感じさせる「悦」である。　宮内　敏

（表紙題字は伊能忠敬の筆跡）



目次　84号

表紙解説
伊能忠敬測量経路（第2次の部分）享和元年（九十九里～銚子半島）　宮内　敏
研究と話題
●天文暦学来歴の書付　前田　幸子　1
●柏木家に残された忠敬資料（七）　柏木　隆雄　11
資　料
●「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第十九回　監修　渡辺　一郎　編著　井上　辰男　15
忠敬談話室
●古墳の中まで実測した　日田街道における足跡を辿る　小坪　隆　30
●伊能探訪 ― 肥前・筑前の旅 ―　玉造　功　36
●伊能測量隊の食事を再現　伊部宿（滋賀県長浜市）　編集部　40
●奥宮正樹「測量日記」の紹介　戸村　茂昭　42
●「但馬国養父市場村文書」について　稲葉　末明　60
ニュース・会員便り・お知らせ
石川県支部ニュース　伊能忠敬の見た風景を歩こう！　寺口　学　68
金沢城下の宿泊地に案内板を設置　河崎　倫代　69
会員だより　室山　孝
「御用測量熊本県資料集」を出版　平田　稔　70
新入会員自己紹介　72
お知らせ　72

『天文暦学来歴の書付』を読む

前田幸子

はじめに

伊能忠敬『測量日記』の第一次測量編の末尾に『天文暦学来歴の書付』と題する小文が掲載されている。これは第一次測量の途次、蝦夷地取締役御用掛・三橋藤右衛門の要請により、忠敬が天文暦学の歴史と我が国への伝来について執筆したものである。忠敬が測量旅行中にこのような文書を執筆していたことはあまり知られていないが、この分野における忠敬の知識を伺い知ることができ、また幕府に対して今後の暦作りや地図作りへの提言をも行っているなど、注目に値する内容である。忠敬は旅行中に下案を書き、それを師の高橋至時に送って添削をうけた。『測量日記』には忠敬の下案と至時の加筆訂正による完成文と両方の文章が掲載されている。下案は旅行中であまり資料もない状況のもと、忠敬が持ち合わせていた知識を披露したものであり、完成文のほうは当時の暦学の第一人者・至時が蘊蓄を傾けたものである。本稿では至時が添削した「完成文」と忠敬の「下案」の両方について現代語訳を掲載し、最後に原文の画像と読み下し文を掲載した。師弟合作の完成文と忠敬の下案を比較して読んでみるのも興味深いのではないかと思う。

三橋藤右衛門

忠敬に「天文暦学の来歴」の執筆を要請した三橋藤右衛門（一七五一―一八三八）は四百石の旗本・三橋成方（みつはし　なりみち）である。三橋は勘定吟味役だった寛政十年（一七九八）四月に渡辺胤らとともに一八〇余名の巡見隊の責任者として蝦夷地に派遣されたのを最初として、翌寛政十一年には松平信濃守忠明、遠山金四郎景晋らと二回目の、寛政十二年（一八〇〇）四月から九月には三回目の蝦夷地勤務をした。伊能隊の蝦夷地測量はこの三回目の時で、三橋は数え年五十歳だった。享和二年（一八〇二）には蝦夷地勤務により褒賞を受け、文化五年（一八〇八）日光奉行のときを最後として蝦夷地勤務を終了した。以後は京都町奉行、小普請支配頭などを勤めた。有能な人物だったらしく、たびたび褒賞を受けている。文人的才能もあり、『蝦夷紀行』と題する和歌交じりの紀行文を残している。また『柏崎物語』の編著でも知られる。なお榎本武揚とともに函館五稜郭で戦った伊庭八郎は次男・銅四郎の子である。

亀田村での面談

伊能隊は寛政十二年閏四月十九日に江戸を出立し、五月十九日に蝦夷地に渡った。五月二十二日、函館に到着して御役所に着届を提出、同時に亀田村の御役所にいた三橋藤右衛門へも着届を出した。当日、三橋の用人ら三名が忠敬の宿所に見舞いに来ている。（『測量日記』）

同日、忠敬が息子の景敬にあてて書いた手紙には、「三橋藤右衛門様は函館より一里脇においでで、こちらにも着届を出したので二、三日中に参上すれば対顔できると仰っている」（『伊能忠敬書状―千葉県史料』一（1―1））とあり、忠敬と三橋は対面する予定であった。しかし函館で下僕の長助が病気を申し立て、また大方位盤部品紛失の発覚等々で二十八日まで逗留することになり、函館出立が予定より遅くなってしまった。亀田村通過の当日の日記には「朝五ツ後函館を出立、亀田御役所へ相届五里大野村へ七ツ後に着」とあり、届だけで面談はなかった模様である。三橋は面談のかわりに書面での天文談義を所望したと考えられる。

執筆の要請

九月四日、忠敬が東蝦夷地の測量を終え、帰途についたエトモ（現・室蘭市）において三橋藤右衛門から次のような書状を受け取った。

○三橋氏殿御用人中より書状（『測量日記』）

一筆啓上候、弥御堅固可被成御旅行、珍重存候、然者天文開け候年歴並唐土紅毛伝来の趣等十分に御書取御見世候の様、自拙者共可申入の旨、藤右衛門被申付候、御帰府迄の内に御認候て御差出可被成候、此段申入度如此候、以上

八月十九日　　三橋藤右衛門　内
大塚一郎　武藤貫三
伊能勘解由様

この書状は「天文学の歴史および中国やオランダから我が国に伝来した趣旨について、よくわかるように解説した書面を忠敬が帰府するまでの間に差し出してほしい」という内容である。三橋の用人名義での申し入れあることから、幕府とは関係なく三橋の個人的な興味から発した私的な要請だと考えられる。興味の源は明らかではないが、背景のひとつとして寛政十年

に寛政暦が施行されたことが挙げられる。寛政暦は西洋の暦法を取り入れた我が国初の暦であることから、三橋がこれまでの天文学史や天文学の伝来について興味を持ったことが考えられる。測量途上の忠敬に執筆を要請するほど強い興味だったようである。

なお、司馬遼太郎の小説『菜の花の沖』では三橋藤右衛門を高橋三平とともに本多利明の学派だとしている。本多利明は周知のように経世家として著名で江戸音羽に算学塾を開き、かたわら蘭学を修めて欧州事情にも通じ、天文暦学・地理測量・航海学、蝦夷地や北方問題にも詳しかった。本多利明の学派だったとすると、三橋が蝦夷地御用掛に抜擢された理由や、忠敬に天文暦学の来歴を尋ねた理由が納得できるが、司馬遼太郎がどのような資料に基づいたのかは不明である。

執筆と呈上の経過

忠敬がこの書状を受け取ったその後の経過を『測量日記』で追ってみると、次のようになる。

◇十月一日、盛岡城下で「三橋氏へ新暦の伝来書上の草稿」を執筆。象限儀の磨き立てを兼ねて逗留し、執筆したとある。

◇十月八日、仙台城下で高橋先生へ書状を出す際に書付の下案を添付して添削を依頼。このときの高橋至時への書状（後掲）で三橋氏はこの時点ですでに帰府したことがわかる。それならば、この書付は江戸に帰ってから提出すればよろしいということになり、時間的余裕ができたので至時に添削を依頼したと考えられる。

◇十月二十一日、伊能隊、江戸帰着。翌二十二日蝦夷御掛へ帰府届。

◇十月二十五日、三橋藤右衛門へ『天文暦学来歴の書付』を呈上。

◇十月二十八日、忠敬、領主の津田山城守に蝦夷地の報告。『天文暦学来歴の書付』を松平信濃守に見せるよう依頼。（後掲）

◇翌年正月六日　三橋藤右衛門へ年礼

◇三月四日　三橋藤右衛門へ測量御用御礼

◇三月八日　三橋藤右衛門より「日本暦法伝来の儀」お尋ねあり、至時と共に参上。

寛政十二年九月四日に要請をうけた「新暦の伝来書上」は、『天文暦学来歴の書付』として十月二十五日に呈上、翌寛政十三年三月八日に解説に参上し、半年がかりで一件落着した。

盛り込まれた提言

忠敬は書付に「精密な測量による正確な地図作り、蝦夷地用の暦作り」という独自の提言も盛り込んでいる。しかもこの提言を書付に盛り込んだのは、三橋から幕府に働きかけてもらう意図があった。至時に添削を依頼した書簡（後掲）で「蝦夷地用の新暦の件は三橋様から若年寄へ進言するのがよろしいと思う」と述べているからである。しかもこの書付を松平信濃守にも見せるよう津田氏にお願いしている。

同二十八日、かねて御領主様（佐原の領主・旗本の津田山城守）蝦夷地の儀も御聞被遊度旨、…今日参上御目見数刻蝦夷地の儀を申上候。序に三橋様へ差上候書付松平信濃守様へ御覧に御入被下候様に御願申上げ候。尤右書付殿様へ御願、信州様へ差上候儀は御内意も有之事に候。

松平信濃守忠明（一五八三―一六四四）は三橋と同時期に派遣された蝦夷地取締御用掛。忠敬が幕府への交渉の段階で松平信濃守宅に呼び出されて種々お尋ねがあったことは周知の通りである。忠敬が人脈を縦横に使ってこの書付を活用していたことを示していて興味深い。

○忠敬が高橋至時に添削を依頼した書簡

（関係部分のみ抜粋）

○仙台国分町より差出候高橋先生への書状

（十月八日付）

「一、蝦夷旅行中、三橋藤右衛門様より天文開け候年歴、並びに唐土紅毛伝来の趣等十分に相認、江戸着迄に差出候様、御用人中より御文通にて三橋様は御帰府にて御座候。仍而、帰路測量中、右差出候書付、前後混札に書記奉入高覧候。御面倒の儀と恐入候得共、無拠儀に御座候間、何卒御筆削損益被成下候様、偏に奉願上。蝦夷地場所御詰合の御方より被仰候は蝦夷人に魚猟時候指図被成候に新暦延着難渋に候間、前秋中に略暦なり共、相渡候様致度ものよし、一同被仰候間、その儀は三橋様より若年寄様方へ被仰上候儀、可宜哉に申上候。それを御含の上にも御座候哉、御書面には左様の筋も無之候。乍然、彼是を相含書付相認申候。即、三橋様御用人中よりの御状も、右書付の前文に書添入高覧候可相成儀に御座候はば、御筆削の上に直に本紙外様候御頼御認め被下置候様、仕度奉願上候。

訳文　『天文暦学来歴の書付』（完成版）

○天文暦学来歴の書付、本稿は高橋至時の添削に係るものである。

天文暦学については、中国の大昔の事は伝わっておりません。黄帝（中国古代伝説上の帝王）及び顓頊帝（中国古代伝説上の帝王。黄帝の孫）が暦を作られたということが、『史記』や『漢書』等にも見えております。帝堯（中国古代伝説上の聖王。理想的君主とされる）の代に羲氏、和氏に命じられ四方を分測したということが『書経』にありますので、このころにかなり開化したと思われますが、黄帝、堯、舜の時代から夏、殷、周の時代を経て、秦の初期まで用いられた暦法はすべて秦朝末の戦火で失われてしまったのでしょうか、現在に伝わっておりません。前漢の武帝の時、「太初暦」を作ってから秦朝以降は、その時代々々の暦法が歴史書に記載されております。しかしながら大昔は暦術が至って粗雑で日食や月食を推算する方法などはありませんでしたが、漢、魏から六朝時代を経て、唐の時代に至ってしだいにい諸法則が整ってきましたが、それも現在からみればまだまだ不十分なものでした。元の時代に「授時暦」が出来まして、昔と比較しますと大いに精しくなってかなり天体の運行に合致するようになりました。中国ではこの暦を古今にならびない立派な暦だと言い伝えております。明の代にもこの「授時暦」に基づいて「大統暦」が作られました。その後、西域のイスラム国の暦法が伝わり「大統暦」と併用されていましたが、諸数値が整わず、かつ暦法の理論を書いた書物もなかったので、そのイスラム暦が専ら使用されることもなかったところ、崇禎（明の崇禎帝の年号 一六二八―一六四四）初年、西洋人の湯若望（アダム・シャール）、羅雅谷（ジャコブス・ロー）が中国に渡るや彼らにお命じになられて西洋暦書、「禎暦書」というものをつくりました。これは西洋の暦学者、弟谷（ティコ・ブラーエ）という優れた学者の暦法で、きわめて精密なものです。この暦法が施行される前に明が亡びて清になり、清朝はこの暦法を採用して天下に頒行しました。これは西洋の暦法が中国で専ら行われた最初です。右の西洋暦書によって康熙帝が「暦象考成　上・下編」を撰せられ、雍正帝の頃、同書の後編が出来ました。すなわち現在、清朝で施行されている「時憲暦法」です。中国代々の暦法は勿論、元の「授時暦」等に比べてもその精密なことはすぐれており、古暦の及ぶ所ではありません。

西洋国（ヨーロッパ州のことを中国では西洋とよびます。紅毛＝オランダもその中の一国です）では、大昔から暦学が開けていたとみえて西　洋暦書の中に我が国の神武帝元年から六十二年以前、（中国では周の平王から五十年）に月食を測量した記事があります。精密な測定数値です。　これらのことから見ますと、これ以前から開けていたと思われます。その　後、成務天皇の頃（中国では後漢の順帝の時）、多禄某（トレミー）という暦学者がおりましたが、この人は天文暦学において前人未踏の事柄を多くやってのけた人で、しばしば天体観測を行い、日月、五星交食等の諸法則も非常によく具備していて、西洋の暦学者のなかでも四大家の筆頭と　称されていると西洋暦書にも記してあります。それ以降、引き続いてますます精しくなり、我が国の寛正（一四六〇―一四六六）、明応（一四九二―一五〇一）年間の頃、中国では明代の天順（一四五七―一四六四）弘治（一四八八―一五〇五）年間の頃、歌白泥（コペルニクス）という優れた学者が出てますます理論が精緻になりました。引き続き天正（一五七三―一五九二）の頃、明では万暦年中（一五七三―一六一三）になりますが、弟谷（ティコ・ブラーエ）という傑出した人が出まして多禄某（トレミー）以来、諸名家がまだやっていない事をたくさん発見し、四十年間、昼夜丹誠を尽くして観測したそうですが、その測定値及び構築した法則を見ますと、まことに傑出した大学者であると思います。以上の三人の外、亜而封所（アルフォンソ）という人を併せて「暦学の四大家」と称すると、暦書に書いてあります。その四大家の中でも弟谷（ティコ）が最も偉大な第一者と思われます。明代に作りました西洋暦書、及び清の「暦象考成上下編」とも、この弟谷（ティコ）の暦法を翻訳したものです。弟谷（ティコ）に引き続き、刻白爾（ケプラー）、噶西尼（カッシーニ）、奈端（ニュートン）等の名家がしだいに出て弟谷（ティコ）の体系の不備を補い、ますます精密になりました。これらの著書が清朝に渡り翻訳された書物が、すなわち雍正年中（一七二二―一七三五）に出来た「暦象考成後編」でありまして、その内容の精巧で天象に合致していることは、古今を通じましてもこれに類するものはございません。実に古今の傑作ともいうべきものです。

我が国の往古は何の暦法が施行されていたか、その法は伝わっておりませんのでわかりませんが、「日本書紀」等の諸書から推考しますと、異国の暦法を用いていたようには見えません。自ら日本の暦法があったと思われますが、今に伝わっていないのが残念です。地統帝（持統天皇、在位六九〇―六九七）の御代には中国の劉宋の時代（四二〇―四二九）に造られた「元嘉暦」を頒行し、その後唐の「儀鳳暦」、「大衍暦」、「五紀暦」等が頒行され、清和帝の御代に「宣明暦」を用いられて以来、貞享元年まで八百余年の間、この暦がずっと行われましたので、二十四気の時刻が天象とのずれが二日余という大差になりました。このため、安井算哲が台命を蒙り、元の「授時暦」にもとづいて「貞享暦」を編纂し、貞享二年から頒行されました。すなわち、日本で暦が作られた最初でございます。これより暦学がしだいに進歩したようです。この「貞享暦」は宝暦年間（一七五一―一七六四）の初めまで施行されましたが、「宝暦甲戌元暦（宝暦暦）」に改暦されまして、これまで行われていたところ、寛政九年、またまた新暦にお改めがありました。すなわち、現在頒行されている「寛政暦」でございます。この暦法は清朝に用いられた「暦象考成後編」に拠り、また補正もして出来たと聞き及んでおります。そのことは「寛政暦」にも記してあります。日、月の食分時刻、その外七曜運行の度数など、私もしばしば測量いたしておりますが、実際の天行と確認してみますと厳密に合致しており、精密極まりないすぐれた暦法でありまして古暦の及びがたいことでございます。これは全く近来、暦学が大いに進歩して天体測量や天文計算の方法が非常に精密になり、測定機器の製作等も非常に精細になって申し分なくなったからだと存じます。しかしながら、この頒行されている暦は京都の緯度経度を記しておりますもので、江戸や奥羽、あるいは九州、長崎等の地においては日食の食分の数値も必然的に少なかったり多かったりいたします。そのほかにも節気、月食、五星凌犯等の時刻、昼夜の時間の長短まで、ことごとく多かったり少なかったりします。ただ京都においてのみ、数字が符合いたしますことは、少々惜しいことだと存じます。願わくは、現在施行中の寛政暦法を以て諸国の食分の時刻、昼夜の長短、気候（二十四節気）の実気等をこの暦の上に書き添えたならば、「寛政暦法」の精密至極なることが我国はもちろん、長崎から自然に中国、オランダまでにも伝わり、我が国の暦術が精密であることも明らかになって異国人もおのずと感心することと思います。蝦夷御用地の間も北緯、大凡四十二度くらいから四十四度に近いので、平均四十四度を以て日月の食分、時刻、節気、昼夜長短について、この暦に諸国と同じく加入したいものだと思います。このことにつきましても、諸国ならびに蝦夷地迄も現在における精密測定機器、測定法をもって、北緯の度数、ならびに方位をそれぞれの場所その土地その土地で精密に測量して国の地図をも作製すれば、右等の見合にもなり、御府内から蝦夷地の各地の海と陸地（の地形、海岸線）、正しい方位、正しい距離、その外、安房、上総、下総、常陸等の海辺から蝦夷地各地までの海路までも悉く明らかになり、万一の場合の用意にもなるかと存じます。かつまた蝦夷地についてもこれまで通り冬に新暦が出来たのでは新年に間に合わず、蝦夷地掛で越年される方々や、蝦夷人に農漁業の時機をお教えになるのに支障があるよし、聞き及んでおりますので、略暦なりとも別刷りでこしらえて、秋のうちに蝦夷地へ回送するようにしたいものです。蝦夷地は緯度も高いので、昼夜の長短も京都とはかなり違いますので、同様に蝦夷の昼夜の長短を増加するように致したく、そうすれば蝦夷地詰合所の自鳴鐘（鐘が鳴る仕掛けの機械時計）の時刻御割合（文字盤に表示する不定時法の時刻割）にもなるかと存じます。

以上

申十月（寛政十二年十月）

伊能勘解由

【註Ⅰ】※次頁**【註Ⅱ】**も参照のこと

アダム・シャール（一五九一―一六六六）
　ドイツ人、イエズス会士

ジャコブス・ロー（ジャコモ・ロー）
　イタリア人、イエズス会士

ティコ・ブラーエ（一五四六―一六〇一）
　デンマーク人、天文学者

トレミー（プトレマイオス）
　二世紀前半アレキサンドリアの天文学者

カッシーニ（一六二五―一七一二）
　イタリア人「土星の四衛星」発見

アルフォンソ十世（一二二一―一二八四）
スペイン人、カスティリア王、天文学振興
　天体位置表「アルフォンソ表」発行

ニュートン（一六四二―一七二七）
　英国人、「万有引力」発見

訳文　『天文暦学来歴の書付』（下案）

天文暦学については、中国では帝堯（中国古代伝説上の聖王。理想的君主とされる）の代に始まったことは『書経』に見えております。その後、漢の時代に「三統暦」が行われ、それから代々暦書が著述されましたが、大昔は暦術が至って粗雑でありまして、唐の時代からよほど詳しくなってきましたが、まだ精密という段階には至っておりませんでした。元の時代に「授時暦」が出来まして、昔と比較しますと大いに精しくなってかなり天体の運行に合致するようになりました。明の代にもこの「授時暦」に基づいて「大統暦」が作られました。明の末期、崇禎（明の崇禎帝の年号で一六二八―一六四四）年中に、西洋人の湯若望（アダム・シャール）、羅雅谷（ジャコブス・ロー）にお命じになられて西洋暦法、いわゆる「禎暦書」をつくりました。これは西洋の暦法が中国で施行された最初です。清朝になって康熙帝が「暦象考成上・下編」を撰せられ、雍正帝の頃、「暦象考成後編」が出来ました。すなわち現在、清朝で施行されている「時憲暦法」です。中国代々の暦法は勿論、元の「授時暦」に比べても、現在のところ日月、五星、恒星、推歩（天文計算）が天体の運行に合致する精密な理論で優れておりまして古暦の及ぶ所ではありません。それゆえ五星、凌犯、食分時刻も、東西南北の各地に位置する国によって食分の多少、時刻の遅速、すべてぴったり一致します。我が国は持統天皇の時代に中国の劉宋の時代に作った「元嘉暦」を用いられ、清和帝の御代に「宣明暦」を用いられ以来、貞享元年まで八百余年の間、この暦がずっと行われてましたので、二十四気の時刻が天の運行と違うこと二日余りの大差になりました。このことにより、安井算哲が台命を蒙り、元の授時暦により貞享暦を著述致し、貞享二年から施行されました。すなわち、日本において暦法が作られた最初でございます。この暦は宝暦の初めまで使われましたが、また宝暦四年（一七五四）に改暦されて使われておりましたが、寛政九年、またまた新しい暦にお改めがありました。この暦法は、清朝で用いられた『暦象考成　後編』に拠り、また補正もして出来たと聞き及んでおります。出来上がったとか聞いております。この暦法により、日月、九星、食分凌犯時刻まで、測量して確認してみましたが、厳密に合致していました。しかしながら、この施行されている暦は京都の諸数字を記し、計算されたものですので、江戸や奥羽、九州、長崎の地においては、日食の食分月食、五星凌犯等の時刻、昼夜長短まで、悉く差異があ ります。ただ京都においてのみ、数字が符合いたしますことは、少々惜しいことだと存じます。願わくは、現在施行中の寛政暦法を以て諸国の食分の時刻、昼夜の長短、気候（二十四節気）の実気等をこの暦の上に書き添えたならば、「寛政暦法」の精密なことが我が国はもちろん、長崎から自然に中国、オランダまでにも伝わり、我が国の暦術が精密であること、また我が国が大きな国であることも明確になり、異国人もおのずと感心することと思います。蝦夷御用地の間も北緯およそ四十二度くらいから四十四度近くですので、平均四十三度を基準として計算した食分時刻、節気、昼夜の長短をこの暦の上へ諸国と同じく書入れたいものでございます。蝦夷地についてもこれまで通り冬に新暦が出来たのでは新年に間に合わず、蝦夷地掛として越年される方々や、蝦夷人に農漁業の時機をお教えになるのに支障が　あるよし、聞き及んでおりますので、略暦なりとも別刷りでこしらえて、秋のうちに蝦夷地へ回送するようにしたいものです。蝦夷地は緯度も高いので、昼夜の長短も京都とはかなり違いますので、同様に蝦夷の昼夜の長短を増加するように致したく、そうすれば蝦夷地詰合所の自鳴鐘（鐘が鳴る仕掛けの機械時計）の時刻御割合（文字盤に表示する不定時法の時刻割）にもなります。また、現在の暦法を以て、諸国ならびに蝦夷地までも緯度並びに方位を各地で精密に測量して国図を作製すれば、この国からあの国、あの国からその国の真の方位、真の里数もわかり、万一の場合の用意にもなり、なおまた日月、五星の大小、距離、同高低の里数に至るまで、悉く明らかになり、現在の御代の御徳が天文地理までにも及んでいることを後世に伝えるようにしたいものだと存じます。以上

寛政十二年十月　　伊能勘解由

【註Ⅱ】

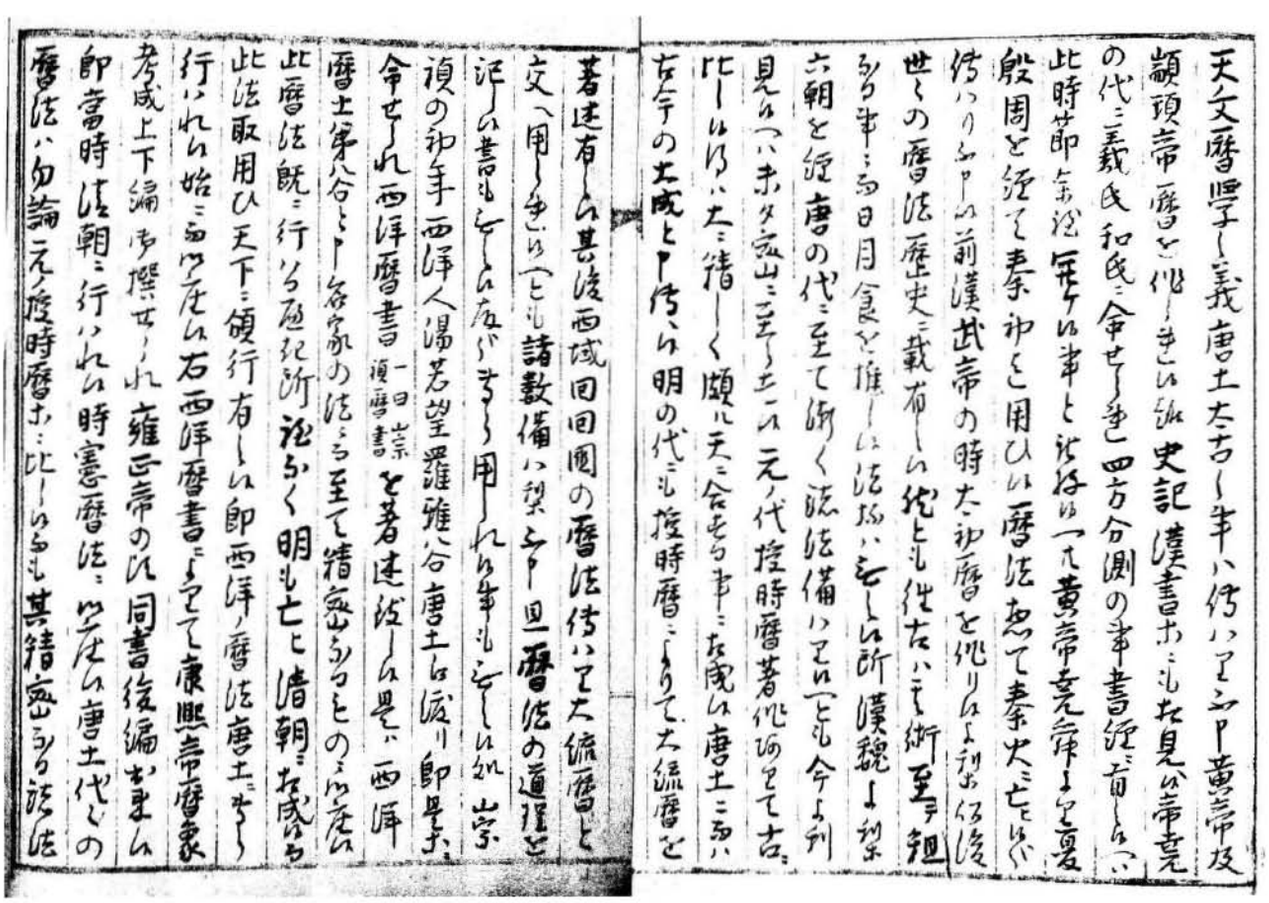
本来、「刻白爾」はコペルニクス、「歌白尼」はケプラーの漢訳であるが、混同された。本稿では前後の文から推測して「歌白尼」をコペルニクス、「刻白爾」をケプラーと訳した。

○コペルニクス（一四七三―一五四三）
　ポーランドの天文学者「地動説」
○ティコ・ブラーエ（一五四六―一六〇一）
　デンマーク人、天文学者
○ケプラー（一五七一―一六三〇）
　ドイツ人「ケプラーの法則」

書き下し文と原文

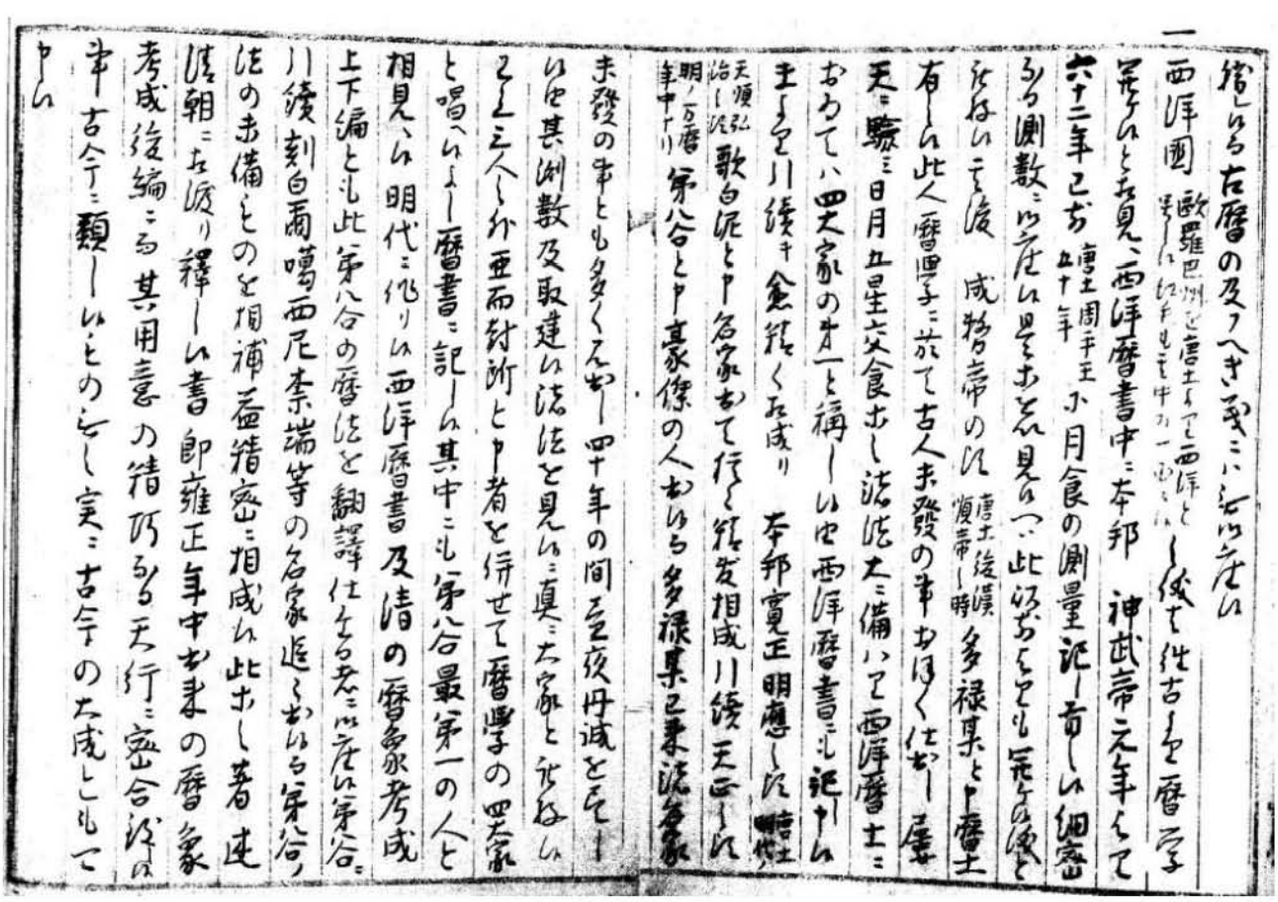
天文暦学の義、唐土太古の事は伝わり不申、黄帝及顓頊帝暦を作られ候趣、史記漢書等にも相見え候、帝堯の代に羲氏、和氏に命ぜられ四方分測の事書経に有之候えば、此時節余程開け候事と被存候えども、黄帝堯舜より夏殷周を経て秦初迄用い候暦法、惣て秦火に亡び候哉、伝わり不申候、前漢武帝の時、太初暦を作り候より以後世々の暦法歴史に載有之候、然ども往古はその術至て粗なる事にて、日月食を推し候法抔は無之候所、漢魏より六朝を経、唐の代に至て漸く諸法備わり候へども、今より見候へば未だ密に至らず候、元の代授時暦著作ありて古に比し候得ば大に精しく頗る天に合する事に相成り候、唐土にては古今の大成と申伝え候、明の代にも授時暦によりて大統暦を

著述有之候、その後西域回回国の暦法伝わり大統暦と交へ用られ候へども諸数備わり不申、且暦法の道理を記し候書も無之候故哉、専ら用られ候事も無之候処、崇禎の初年、西洋人湯若望、羅雅谷、唐土へ渡り、即、是等に命ぜられ西洋暦書（一に曰く崇禎暦書）を著述致し候、是は西洋暦士弟谷と申名家の法にて、至て精密なるものに御座候、此暦法既に行わるべき所程なく明も亡び清朝に相成候て、此法取用い天下に頒行有之候、即西洋の暦法唐土に専ら行われ候始にて御座候、右西洋暦書によりて康熙帝暦象考成上下編御撰せられ、雍正帝の頃、同書後編出来候、即、当時清朝に行われ候時憲暦法に御座候、唐土代々の暦法は勿論、元の授時暦等に比し候ても、その精密なる諸法



勝れ候て古暦の及ぶべきき義には無御座候、

西洋国（欧羅巴州を唐土より西洋と号し候、紅毛もその中の一国に候）の儀は往古より暦学開け候と相見え、西洋暦書中に本邦神武帝元年より六十二年已前、（唐土周平王五十年）に月食の測量記し有之候、細密なる測数に御座候、是等を以て見候えば、此以前よりも開け候儀と被存候、その後成務帝の頃（唐土後漢順帝の時）、多禄某と申暦士有之候、此の人暦学に於て古人未発の事多く仕出し、しばしば天に験み、日月五星交食等の諸法大いに備わり、西洋暦士においては四大家の第一と称し候由、西洋暦書にも記し申候、それより引き続き愈精く相成り、本邦寛正明応の頃（唐土明代天順弘治の頃）歌白泥と申す名家出て猶々精敷相成、引き続き天正の頃、（明の万暦年中なり）弟谷と申す豪傑の人出候て多禄某已来諸名家未発の事ども多く見出し、四十年の間昼夜丹誠を尽し候由、その測数及取建候諸法を見候に、真に大家と被存候、已上、三人の外亜而封所と申者を併せて暦学の四大家と唱え候よし暦書に記し候、その中にも弟谷最第一人の人と相見え候、明代に作り候西洋暦書、及、清の暦象考成上下編とも此弟谷の暦法を翻訳仕たる者に御座候、弟谷に引き続き、刻白爾、噶西尼、奈端等の名家追々出候て弟谷の法の未備ものを相補、益々精密に相成候、此等の著述清朝に相渡り釈し候書、即、雍正年中出来の暦象考成後編にて、その用意の精巧なる天行に密合致し候事、古今に類し候もの無之、実に古今の大成」とも可申候、



本邦の往古は何の暦法を以頒行はれ候哉、その法伝わり不申候ゆえ相知れ不申候え共、日本紀等の諸書を以推考候えば異邦の暦法を用いられ候とも相見え不申、自から日本の暦法有之哉に被存候、相伝わり不申候は惜き義に御座候、地統帝の御代には唐土劉宋の代に造り候元嘉暦を頒行はれ、その後唐の儀鳳暦、大衍暦、五紀暦等行われ、清和帝の御代に宣明暦を用いられ候より貞享元年迄八百余年の間一暦にて行われ候故、二十四気の時刻、天に差い候事二日余の大差に相成候、ここに因りて安井算哲、蒙台命、元の授時暦にもとづき貞享暦述作有之、貞享二年より行われ候、即、日本にて暦法を作り候初にて御座候、此より暦学追々開け候趣に御座候、此暦宝暦の初まで

行われ候所、又宝暦甲戌元暦に改暦ありて是まで行われ候処、寛政巳年又々新暦に御改有之候、即、当時御頒行の寛政暦に御座候、此暦法の儀、清朝に用い候暦象考成後編によられ、猶又補正も有之候て御出来の由に承及申候、右暦面に記し候、日月の食分時刻、その外七曜運行の度数など、私しばしば測量仕、天に験み候所、厳敷密合仕、誠に至密之良法にて古暦の難及候義に有之候、是全く近来暦学大に開け測量推歩の諸法至て精密に相成り、測器製作等も甚精細にて遺憾無之様に相成候故の儀と奉存候、乍然、右頒行の暦面の義は帝都の諸数を記し候もの故、東都及奥羽、或いは九州、長崎等の地にては日食の分数も必浅深に相成、その外節気、月食、五星凌犯等の

時刻、昼夜長短迄悉く多少に相成、惟帝都にのみ符合仕候は少し惜しき義に奉存候、願くは当時の寛政暦法を以て諸国の食分時刻、昼夜の長短、気候の実気等、当暦面に書添候はば寛政暦法の至密なる、我国は勿論、長崎より自然と唐土紅毛までも相伝わり、我国の暦術に細密なるも相顕れ、異国人も自から感心可仕と奉存候、蝦夷御用地の間も北極出地度、大凡四十二度ばかりより四十四度に近く候得ば、平均四十三度を以、日月食分、時刻、節気、昼夜長短、当暦へ諸国と同く加入仕度ものに御座候、右に付候ても、諸国並蝦夷地までも当時精密の測器、測法を以、北極出地度、並、方位、その所々にて細密に測量仕、国図をも製し候はば、右等の御見合にも相成、御府内より蝦夷地所々の海陸、真の方位、真の里数、その外安房、上総、下総、常陸等の海辺より蝦夷地所々の海路迄も悉く相分り、万一の御用意にも相成、可然御儀に奉存候、且、蝦夷地も此迄の通、冬に新暦出候ては新春の間に合兼、蝦夷御掛越年の御方、蝦夷人産業に時を御授け被成候に御差支の由、承及申候、略暦成とも別板に御仕立、秋中蝦夷地へ相回候様に仕度候、蝦夷地は北極も高く、昼夜長短も余程違候えば、同じくは蝦夷の昼夜長短は増加御座候様には仕度、左候ば蝦夷御詰合の自鳴鐘の時刻御割合にも相成、可然御儀に奉存候、已上

申十月　　伊能勘解由

【参考文献】

『伊能忠敬 測量日記』　佐久間達夫　大空社

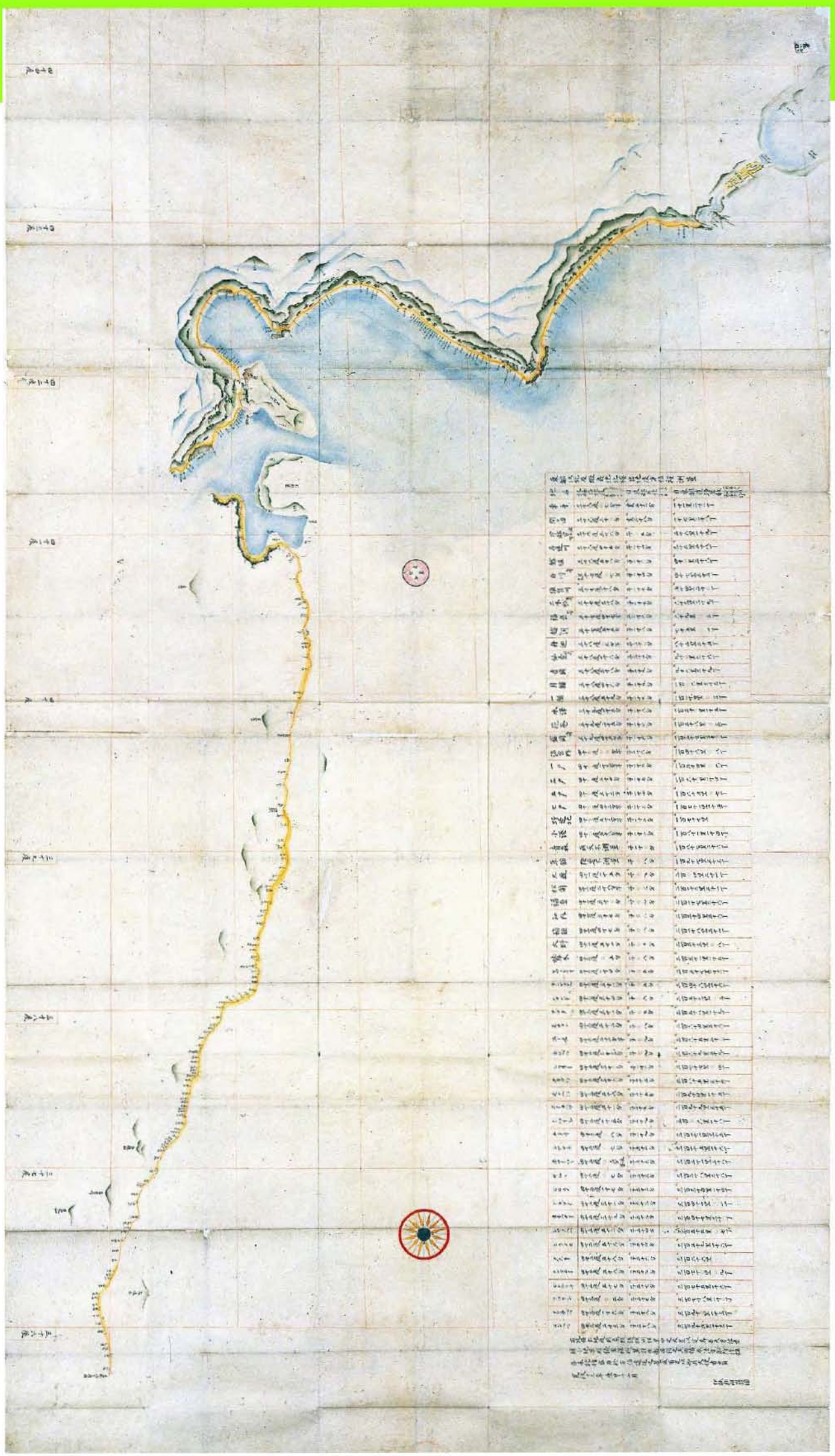
『国宝 伊能忠敬測量日記 原文』　伊能忠敬と伊能図の大辞典をつくる会

『続徳川実記』　黒板勝美 国史大系編集会　吉川弘文館

『新訂 寛政重修諸家譜』　続群書類従完成会

『伊能忠敬書状 千葉県史料 近世篇』　千葉県

※本稿の現代語訳、書き下し文は筆者による。



参考

寛政十二年測量小図

第一次測量で作製した小図

千葉県香取市　伊能忠敬記念館所蔵

柏木家に残された忠敬資料（七）

柏木　隆雄

本誌の表紙と掲載写真や画像がカラー化されたのは二〇一一年の第六十二号からで、六十四号からは誌の体裁も改められ、紙版の大きさがB５版からＡ４版に拡大された。

私のこのシリーズの寄稿が始ったのは第五十五号から。その頃はまだ単色刷りだったので写真や画像が不鮮明で、地図や絵図の美しさが紙面からは伝わらず忸怩たる思いであった。例えば第五十六号での法隆寺の絵図のときも、東西の伽藍と背景となる矢田丘陵の峰々、法輪寺、法起寺の塔屋、今に残る美しい松並木などの描写に色彩感を盛りこもうと工夫をしたように記憶する。

第五十五号掲載の長崎之図では、港湾内に停泊している横三色旗の阿蘭陀船と、赤旗を掲げた二雙の中国船と書いているが、赤と青の色別がつかず、白を挟んだ二色旗に。また中国船の赤旗の赤がまったく感じとれていない。

そんなことから、今号では、貴重な紙面をお借りして、これまでの掲載資料の内から何点かを若干の説明を加えて再度掲載させていただくことにした。旧号と比べて見れば、資料の価値観が一層高まるものと期待している。

（一）近藤重蔵の長崎絵図

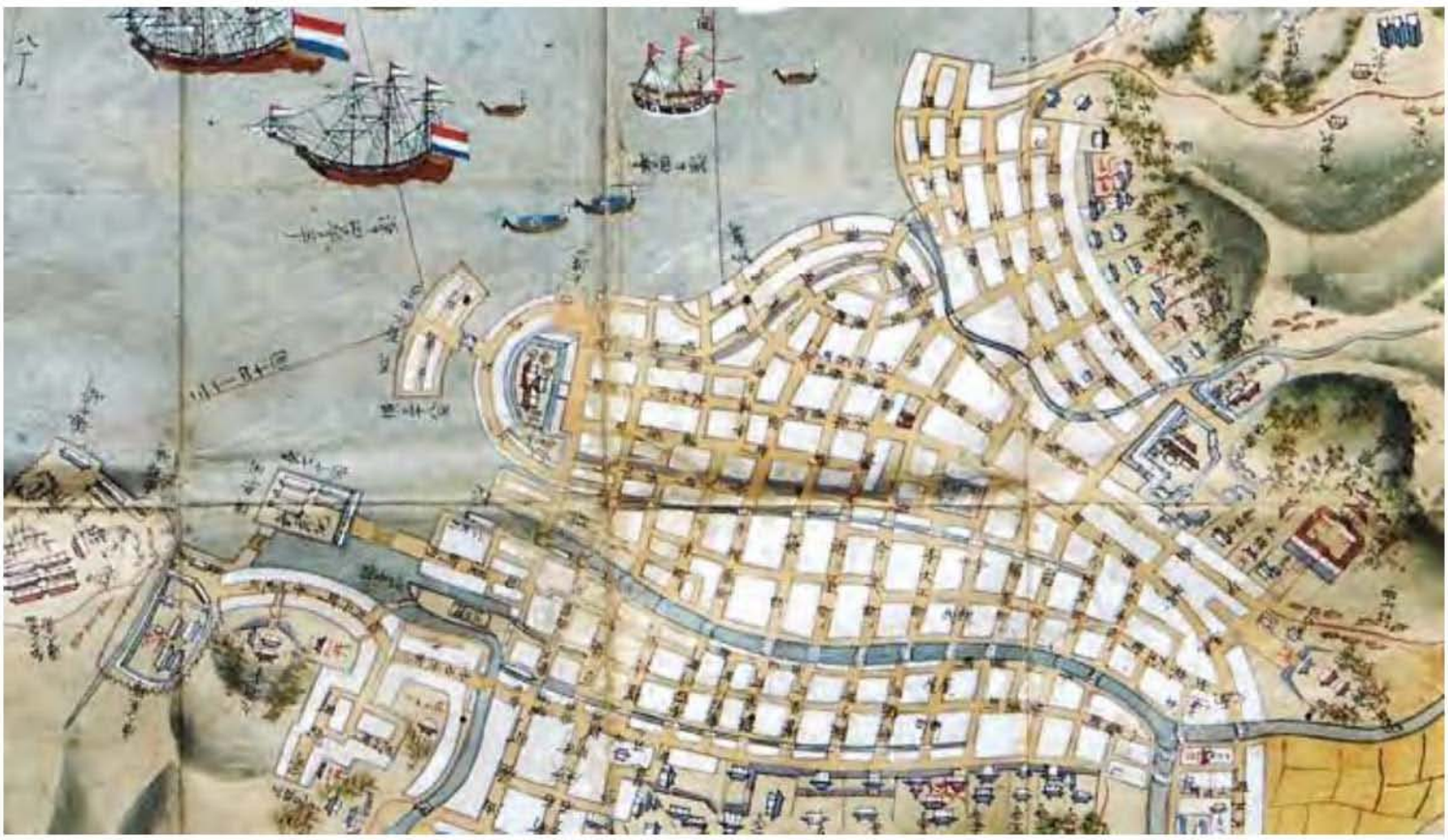
近藤重蔵が描いたものではなく、重蔵が所蔵していたものを忠敬が借受けて返戻しなかったのか、あるいは譲り受けたものなのかが判然としない色彩図である。第五十五号では絵図全容を掲載しなかったので、ここに初めて掲載した。

① 長崎図

資料①は長崎図、資料②は、重蔵の雅号の「正斎」の朱印が押されている表紙と、奥付に近藤重蔵の署名。名前の下に記された珍蔵の文字とは明らかに筆跡が異っている。署名は、忠敬に宛た書翰などの資料から重蔵の自筆と判別できる。“珍蔵”の二文字は忠敬が記入したものと思われる。

資料③は、オランダ船と中国船が入港し停泊している長崎の港湾風景である。こうして拡大して見ると、対岸や目標物に直線が引かれていて、その間の距離や水深の数値が書きこまれている。また下図に続く長崎の町割や出島の描写も精密で、道路には各々町名が記されている。距離や水深の数値は、測量隊が後日に記入したのかも知れない。

② 表紙と、近藤重蔵の署名



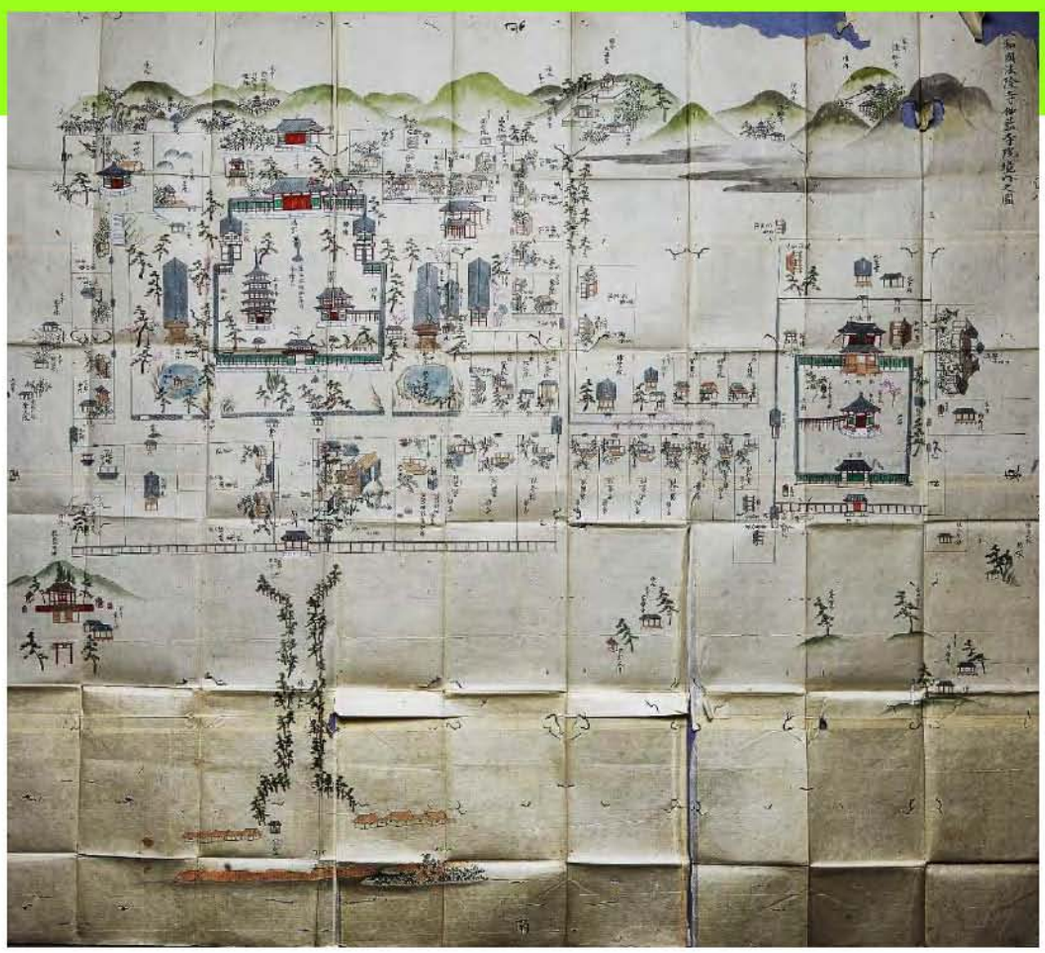
③ オランダ船と中国船が入港し停泊している長崎の港湾風景。

（二）法隆寺絵図

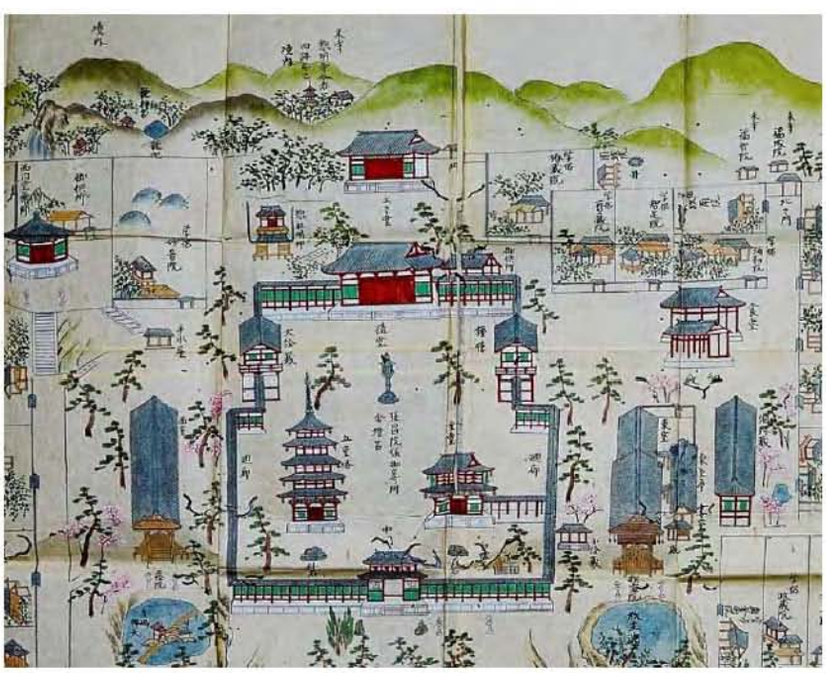
第五十六号の連載第二回に掲載した法隆寺の絵図である。　資料④⑤

忠敬は文化五年（一八〇八）の第六次測量で大和路を巡り、十二月朔日に法隆寺に立寄った。測量を早目に切り上げて法隆寺を訪問。「諸堂拝覧、霊宝一見」と日記に記している。また「伽藍霊宝別紙にあり」と特別に付記しているが、その伽藍図がこれである。

先年、法隆寺に出向いてこの絵図の検証を行った。いつ頃、誰によって描かれたものか、法隆寺にもこの絵図の同類のものがあって、その絵図の書き込みから、当初、安政から明治にかけてのものと回答を寄せられたが、法隆寺訪問の際の忠敬の測量日記の部分と絵図の拡大写真等を持参し再度検証をしていただいた結果、忠敬訪問時以前のものと改められた。法隆寺の古文書の中に文化五年十二月朔日、測量隊来訪の事実が認められたとのこと。誰が描いたかは判明しなかった。



④ 法隆寺の絵図



⑤ 法隆寺絵図の部分拡大図

資料⑥は、第六次測量で畿内から大和路を測量した時に参考にされたと思われる各国の絵図、細見図の表紙である。“大和”“近江”のほかに但馬、河内、山城、和泉とあるが同類なのでそれらは割愛した。

⑥ 参考にされたと思われる各国の絵図

(三) 江戸城御曲輪内図

本誌第五十七号の五〇頁に掲載した資料の御曲輪内図は、私が写真撮りした絵図の部分々を張り合せたもので、紙面では輪郭だけの見苦しいものとなってしまった。そこで、先の歴博での調査の際に、プロカメラマンが撮影した全体図を掲載する。　資料⑦

この御曲輪内図は、東洋文庫にも同じものが収蔵されているが、書きこみが多く、この絵図の方が見易い。「慶長十三年江戸図」と題されているが、江戸城の本丸、西丸に近く広大な屋敷を構える大名の名前に、羽柴、蜂須賀、黒田等の豊臣方が多く見られ、大坂の陣の戦い直前の力関係を物語っていることも興味深い。この御曲輪内図の探索の私考は本誌第五十七号で記述している。（了）

【参考資料】
・掲載資料は、全て国立歴史民俗博物館に柏木家から寄託されたもの。
・寄託者　柏木俊一
・写真撮影　斉藤芳弘・佐藤勲

⑦ 御曲輪内図

資料

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第十九回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

【第八次測量】（九州第一次）　鹿児島屋久島～小倉城下　自　文化9年4月1日　至　文化9年7月15日

宿泊日 旧暦	（西暦	宿泊地	現 市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
文化9年4月	（1812）					
1	（5．11）	○屋久島 安房村	鹿児島県屋久島町	善蔵 善治郎 幸八	雨天逗留	二一四
2 *	（12）	同	同	同	安房村測所より安房川端を歴て船行村まで測	二一四
3 *	（13）	小瀬田村	同 屋久島町	日蓮宗本明山光正寺	船行村より小瀬田村迄測	二一四
4 *	（14）	同	同	同	雨天逗留 恒星測定	
5 *	午食	楠川村	同 屋久島町	百姓仲助	小瀬田村より楠川村を歴て宮ノ浦村迄測 恒星測定	二一四
	（15）	宮ノ浦村	同 屋久島町	万蔵 浜助		二一四
6 *	（16）	同	同	同	逗留測 宮ノ浦川口より志戸子村石浜迄測	二一四
7 *	（17）	一湊村	同 屋久島町	万助 新助	石浜より一湊村川口迄測	二一四
8 *	（18）	長田村	同 屋久島町	久八 要助 千治郎	一湊村川口より吉田村迄測	二一四
9 *	（19）	同	同	同	長田村川口より吉田村迄測	二一四
10 *	（20）	同	同	同	長田村川口より字岬前迄測 恒星測定	二一四
11 *	（21）	同	同	同	字岬前より字ユルンデ岬にて別手と合測 恒星測定	二一四

【支隊】屋久島手分測

4月2日	（5．12）	麦生村	同 屋久島町	日蓮宗本慶寺 善治郎	安房村字長江より麦生村迄測	二一四
3	（13）	尾ノ間村	同 屋久島町	日蓮宗本経寺 喜蔵	麦生村より原村を歴て尾ノ間村迄測	二一四
4	（14）	同	同	同	雨天逗留	
5	（15）	湯泊村	同 屋久島町	金助 平蔵 孫四郎	尾ノ間村より小島村浦崎岬 当島の極南 を歴て湯泊村迄測	二一四

宿泊日 旧暦	（西暦	宿泊地	現 市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
文化9年4月（1812）						
6	（16）	栗生村	同 屋久島町	治右衛門 助左衛門 市蔵	湯泊村より中間村を歴て栗生村迄測	二一四
7	（17）	同	同	同	逗留 測 栗生村より長田村地内迄測	二一四
8	（18）	同	同	同	雨天逗留	
9	（19）	同	同	同	波高測量不相成 逗留	
10	（20）	同	同	同	長田村地内より岩印迄測	二一四
11	（21）	同	同	同	岩印より長田村字ユルンテ岬にて別手と合測	二一四
12	（22）	宮ノ浦村	同 屋久島町	万助 浜助 孫兵衛	一同乗船 長田村より宮ノ浦村着	二一四
13	（23）	同	同		雨天逗留	
14	（24）	安房村	同 屋久島町	善蔵 善治郎 幸八	宮ノ浦村より安房村、本隊は船行 支隊は陸行	二一四
15	（25）	同	同	同	種子島渡船仕立に付逗留	
16	（26）	同	同	同	順風を待 逗留	
17	（27）	同	同	同	順風を待 逗留 恒星測定	
18	（28）	同	同	同	順風を待 逗留	
19	（29）	同	同	同	順風を待 逗留	
20	（30）	同	同	同	順風を待 逗留	
21	（31）	同	同	同	順風を待 逗留 恒星測定	
22	（6.1）	同	同	同	順風を待 逗留	
23	（2）	安房村	同 屋久島町	同	逗留 順風を待	
24	（3）	同	同	同	順風を待 逗留	二一四
25	（4）	同	同	船中泊	荷物積立 乗船 順風ならず船中止宿	
26	（5）	○種子島 島間村	同 南種子町	本陣市郎右衛門 嘉兵衛 金作	種子島内に至て逆風 島間村へ上る	二一三
27	（6）	同	同	同	逗留	
28	（7）	同	同	同	逗留	
29	（8）	島間村	同	同	逗留 恒星測定	二一三

宿泊日 旧暦	（西暦	宿泊地	現 市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
文化9年5月	（1812）					
1	（6. 9）	○種子島 島間村	鹿児島県南種子町	本陣市郎右衛門 嘉兵衛 金作	逗留測 島間村より油久村を歴て油久村 野間村界迄測 島間村より島間岬を歴て中野村字大川迄測 恒星測定	二一三
2 *	（10）	浜津脇浦	同 中種子町	清右衛門 嘉兵衛	油久村 野間村界より納官村字あけ尻野を歴て津脇浜迄測	二一三
3 *	（11）	住吉村	同 西之表市	新太郎 甚右衛門	浜津脇浦より住吉村を歴て熊野内浜迄測	二一三
4 *	（12）	西面村赤尾木	同 西之表市	日蓮宗華蔵山慈遠寺	字熊野内浜より西面村赤尾木止宿下浜を歴て字花里迄測	二一三
5 *	（13）	同	同	同	逗留測 西面村赤尾木止宿下浜より現和村迄測	二一三
6 *	（14）	国上村浦田浦	同 西之表市	喜太郎 喜三治	西面村字花里より国上村浦田浦を歴て内浜迄測 岬一周を繋ぐ。恒星測定	二一三
7 *	（15）	井関村	同 西之表市	庵一軒 市田一軒	内浜より国上村浜脇塩屋浜迄測 恒星測定	二一三
8 *	（16）	赤尾木村	同 西之表市	日蓮宗華蔵山慈遠寺	浜脇塩屋浜より現和村田ノ脇海辺を歴て現和村迄測 恒星測定	二一三
【支隊】	種子島手分測					
5月2日	（6. 10）	中野村西目	鹿児島県南種子町	法花宗本仁寺	中野村字大川より中野村枝西目 門倉岬迄測	二一三
3	（11）	茎永村	同 南種子町	客館 郷士岩坪甚蔵	門倉岬より茎永村小佐鼻字竹崎迄測	二一三
4	（12）	茎永村浜田	同 南種子町	旅館 家番羽生八百右衛門	茎永村字竹崎より字浜田迄測	二一三
5	（13）	同	同	同	雨天逗留	

宿泊日 旧暦	（西暦	宿泊地	現 市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
文化9年5月（1812）						
6	（14）	油久村	同 南種子町	旅館 家番下村四郎兵衛	茎長村字浜田より由久村、阿岳川 熊野川を渡り字女洲迄測	二一三
7	（15）	納官村	同 南種子町	旅館 家番脇瀬権左衛門	由久村字女洲より、納官村枝益田を歴て字大塩屋迄測	二一三
8	（16）	住吉村安城	同 西之表市	旅館 家番永野半右衛門	納官村字大塩屋より字川脇枝安城迄測	二一三
9	（17）	赤尾木村	同 西之表市	日蓮宗華蔵山慈遠寺	安城より田ノ腕、繋測	二一三
10	（18）	同	同	同	雨天逗留	二一三
11	（19）	同	同	同	雨天逗留	
12	（20）	同	同	同	雨天逗留	
13	（21）	同	同	同	雨天逗留	
14	（22）	同	同	同	雨天逗留	
15	（23）	同	同	同	逗留、恒星測定	
16	（24）	同	同	同	雨天逗留	
17	（25）	同	同	同	雨天逗留、江戸書状届	
18	（26）	同	同	同	逗留、恒星測定	
19	（27）	同	同	同	南西風逗留、恒星測定	
20	（28）	同	同	同	南西風逗留、恒星測定	
21	（29）	同	同	同	南西風逗留	
22	（30）	山川湊	同 指宿市	船中泊	南東風になり荷物積入、赤尾木出帆、山川湊着	二一一
23	（7.1）	鹿児島城下 下町呉服町	同 鹿児島市	会所	山川湊出船、鹿児島城下着	二〇九
24	（2）	同	同	同		
25	（3）	同	同	同	薩州候御料理、並国産銘々御贈被下。	
26	（4）	鹿児島城下 下町呉服町	同	同	江戸書状を出す。	二〇九

宿泊日 旧暦	（西暦	宿泊地	現 市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
文化9年5月	（1812）					
27	（5）	浜市村	同　霧島市	本陣喜太郎 五郎兵衛　定右衛門	鹿児島城下乗船　浜市村　着　着 前より白雨あり。恒星測定	二〇九
28	中食 （6）	姫木村 松永村	同　霧島市 同　霧島市	忠右衛門 本陣郷士津出伝之助 郷士岩﨑伝兵衛 郷士前田嘉左衛門 郷士吉永鉄蔵	浜市村より内村字辻を歴て国分 八幡宮迄測　参詣　内村字辻より 広瀬川土橋を渡り、姫木村を歴 て松永村止宿迄測	二〇九
29	午食 （7）	田口村字梅北 霧島山	同　霧島市 同　霧島市	郷士椎原八郎治 郷士馬場忠右衛門 真言新義花林寺 山下坊　林泉坊 集福坊　仙蔵坊 谷口坊　花蔵院	松永村より田口村字梅北　霧島 山　紙屋道追分を歴て霧島川土橋 を渡り霧島山山下坊測所迄測	一九七
30	（8）	蒲牟田村枝狭野	宮崎県高原町	霧島山仏花林寺 神徳院 百姓平兵衛	田口村字梅北紙屋街道追分より 安永村字戸ノ口を歴て字三池　御 池　を通り蒲牟田村枝狭野　神徳 院入口迄測　恒星測定	一九七
文化9年6月	（1812）					
1	中食 （7．9）	高原村 麓村枝野尻	宮崎県高原町 同　野尻町	郷士斉藤平治郎 郷士満田主右衛門 郷士大谷平内 郷士大保佐吉	狭野神徳院より同門前まで測 り、それより高原村を通り字鹿 児ノ山を歴て麓村字猿瀬加久藤 追分　それより枝野尻まで測	一九七
2 *	中食 （10）	紙屋村 紙屋村字今別府	同　野尻町 同　野尻町	藤左衛門 百姓稲右衛門 伝右衛門	大手分　紙屋街道佐土原城下に 向。野尻より紙屋村止宿まで測。 此所薩州口留番所あり。	一九七
3 *	（11）	同	同	同	雨天逗留。恒星測定	一九七

宿泊日 旧暦	（西暦	宿泊地	現 市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
文化9年6月	1812					
4 *	（12）	南方村字綾	同 綾町	百姓十左衛門 平右衛門	紙屋村より漆野村を歴て綾川を渡り南方村字綾まで測 薩州平田治郎八 薩州候より御贈被下候紗綾三反 江戸 届候儀を相頼 此度御贈物芭蕉布三端 外の袴地 取替江戸届の儀 別に上布弐端整呉候様 金弐両相渡す。恒星測定	一八五
5 *	小休	森永村	同 国富町	庄屋庄太夫	南方村字綾より薩州領界御料所を歴て北綾川を渡り森永村 本庄村枝神ノ原を歴て八幡宮迄測 枝神ノ原より六日町止宿を歴て御料地高鍋領界まで仕越 高鍋候より贈り物 干鯛一箱 椎茸一箱 持参 恒星測定	一八五
5 *	（13）	本庄村六日町	同 国富町	庄屋彦兵衛 正之助	領界三ノ名村枝六ノ野より荒武村 鹿野田内都於郡町を歴て佐土原城下大小路町二丁目米良繋を残 本陣まで測 島津候より御口上並に国産御贈被下。恒星測定 延岡候使者国産御持参	一八五
6 *	中食	都於郡町	同 宮崎市	浄土宗欣浄寺		一八五
6 *	（14）	佐土原城下大小路町 納屋町	同 宮崎市	本陣平原友吉 伊締屋利右衛門	大小路町より一ツ瀬川を渡り三納代村を歴て高鍋城下十日町午年止宿前に繋 八日市上町蚊口通四辻止宿角迄測 高鍋候より国産御贈 恒星測定	一八五
7 *	（15）	高鍋城下八日市上町	同 高鍋町	本陣那須屋岩吉 新屋新兵衛	逗留測 止宿前より坂本村蚊口川を渡り垂門村まで測 恒星測定 江戸 用状を出	一八五
8 *	（16）	同	同	同	垂門村より猪窪村枝塩付を歴て名貫川を渡り都農町止宿前まで測 恒星測定	一八五
9 *	（17）	都濃町	同 都農町	客館 亭主分諸県文五郎 油屋五郎兵衛	都農町より都農神社を歴て岩山村心見川を渡り、上別府村石並川を渡り美々津町入口石並町を歴て止宿前まで測 恒星測定	一八五
10 *	（18）	美々津町	同 日向市	客館 亭主役矢野庄兵衛		一八四

宿泊日 旧暦	（西暦	宿泊地	現 市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
文化９年６月（１８１２）						
１１ ＊	（１９）	冨高村新町	同　日向市	本陣豊前屋彦右衛門 須本屋儀右衛門	美々津町より美々津川 測遠術を渡り幸脇村川端を歴て財光寺村塩見川を渡り冨高村新町止宿を歴て細島 延岡街道追分まで測 恒星測定	一八四
１２ ＊	（２０）	門川村枝尾末浦	同　門川町	本陣黒木庄蔵 木屋要蔵	日知屋村細島湊午年止宿より細島 延岡街道追分を歴て門川村枝古川門古川船渡し、枝仮屋里を歴て枝尾末浦止宿まで測 恒星測定	一八四
１３ ＊	中食（２１）	井福形村 延岡城下南町	同　延岡市	庄屋工藤次三郎 客館	門川村字仮屋原より井福形村を歴て恒冨村新小路家中町大瀬橋仮橋を渡り延岡城下南町まで測 郡奉行使者口上並国産を贈恒星測定	一八四
１４ ＊	（２２）	北方村枝曽木門	同　延岡市	大庄屋甲斐波右衛門	延岡城下南町より五ケ瀬川板田橋仮橋を渡り元町豊後 肥後街道追分及び南方村を歴て北方村枝曽木門まで測 恒星測定	一八四
１５ ＊	（２３）	北方村枝三ケ村 字八峡川	同　延岡市	坂見屋伊三郎 袈裟松	北方村曽木門より杉峠を歴て三ケ村八狭川止宿まで測 忠敬病不快につき服薬の為七折村枝船尾門新町、越 江戸御用状一封並肥後川崎林助 池部長十郎より忠敬と坂部、書簡到る。恒星測定	一八四
１６ ＊	（２４）	七折村枝船尾門新町	同　日之影町	本陣甲斐久八 甲斐太左衛門	三ケ村字八峡川より綱ノ瀬川土橋を渡り七折村枝船尾門新町まで測 坂部より都農町認の書状到来。恒星測定	一八四

宿泊日 旧暦	（西暦	宿泊地	現 市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
文化9年6月（1812）						
17 *	（25）	七折村宮水門	同 日之影町	客館	七折村枝船尾門新町より日ノ影川日野影橋土橋を渡り同村宮水門まで測 恒星測定	一八四
18 *	（26）	岩戸村	同 高千穂町	庄屋佐藤冨弥	宮水門より七折峠を越し岩戸村（この村に天照太神宮の岩戸あり）を歴て街道と岩戸本村追分まで測	一九四
19 *	（27）	下野村上組門	同 高千穂町	本陣佐藤新四郎 相模屋重吉	岩戸村追分より五ケ村門を歴て下野村上組門測所まで測る 恒星測定	一九四
20 *	（28）	河内村	同 高千穂町	庄屋河内栄蔵	下野村上組門より田原村字妙見森を歴て河内村止宿まで測 江戸行書状を出す。恒星測定	一九四
中食		永野原村	熊本県高森町	庄屋甲斐宇兵衛	河内村制札より日向国延岡領肥後国熊本領界越し永野原村を歴て馬場村まで測 肥後候より御贈物あり。坂部 書状を出す。恒星測定	一九四
21 *	（29）	馬場村	熊本県高森町	本陣 徒士段後藤利兵衛 一向宗西派 白竜山永秀寺		一九四
22 *	（30）	高森町	同 高森町	本陣萬屋儀七 地役人佐竹嘗助	馬場村より川走川土橋を渡り柳村を歴て高森町まで測 久留島候より肴代を贈 恒星測定	一八二
23 *	（31）	上色見村字前野原	同 高森町	地士荒牧改助 一領一疋 後藤厨左衛門	高森町熊本街道三ツ辻より村山村を歴て上色見村字前野原迄測 恒星測定	一八二
24 *	（8 1）	坂梨町	同 阿蘇市	客館	字前野原より根子岳間 阿蘇岳裾の肥ノ尾峠を越 坂梨村を歴て坂梨町御用杭に繋 恒星測定	一八二
25 *	（ 2	内牧町上町	同 阿蘇市	客館	坂梨町より内牧町まで無測。内牧町制札より上町本陣前を歴て湯浦村枝宮原 長倉坂峠迄測 熊本士佐藤忠右衛門暦学熱心にて来る	一九三

宿泊日 旧暦	（西暦	宿泊地	現 市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
文化9年6月（1812）						
26 *	（3）	市原村	同　南小国町	一領一疋佐藤貞太 一領一疋 佐藤平右衛門	長倉坂峠より馬場村馬場川土橋を渡り馬場村市原村界迄測、恒星測定	一八〇
27 *	（4）	宮原町	同　小国町	町別当高野総兵衛	市原村より関田村馬場川、関田川土橋を渡り宮原町を歴て下ノ城村宇土川、二俣川、竹野田川萩原村界迄測恒星測定	一八〇
28 *	（5）	出口村	大分県日田市	庄屋七郎右衛門	竹野田川端村界より肥後国萩原村、豊後国出口村国界を歴て出口村庄屋前まで測、恒星測定	一八〇
29 *	中食	五馬市村	同　日田市	玉来明神社前	出口村より芋作村、五馬市村を歴て続木村まで測、恒星測定	一八〇
	（6）	続木村	同　日田市	一向宗西派 三光山伝光寺		
文化9年7月（1812）						
1 *	中食	上井手村	大分県日田市	庄屋専助	続木村より女子畑村を歴て玖珠川舟渡し上井手村に至る。此所にて玖珠川、大山川落合筑後川に出る。此処にて隈川と号す。	一八〇
	（8、7）	庄手村堀田町	同　日田市	庄屋三十郎	神井手村より竹田村、隈町を歴て庄手村堀田町まで測る。恒星測定その後鵜飼を一見	一八〇
	（8）	庄手村堀田町	同　日田市	庄屋三十郎	忠敬は薮村止宿差支に付残て再宿	一八〇
2 *	中食	求来里村	同　日田市	庄屋常右衛門	庄手村堀田町より森印、豆田町を歴て小野川土橋を渡り豊前筑前筑後道三辻歴て郡代御陣屋まで測る。森印より城内村、田島村、求来里村を歴て月出山村枝薮村まで測る。	一八〇
	（8）	月出山村枝薮村	同　日田市	庄屋佐藤八郎平		

宿泊日 旧暦	（西暦	宿泊地	現 市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
文化9年7月	1812					
3 *	（ 9）	戸畑村	同 玖珠町	庄屋甚助	月出山村枝薮村より馬原村薬研坂 釜割石あり。代太郎村を歴て戸畑村字平川、名所魚返滝 戸畑村止宿まで 測る。	一八〇
4	（ 10）	森町本町	同 玖珠町	本陣 年寄山上伝左衛門 年寄加藤市郎助	戸畑村より四日市村を歴て森町本町まで 測る。久留島候より国産を贈 支隊も当所着。	一八〇

【支隊】 佐土原 人吉街道追分より肥後人吉 日向佐土原街道測量

6月2日	（7. 10）	細野村宇野町 小林	宮崎県小林市	貞八 重吉 利右衛門	麓村追分より岩瀬川土橋を渡り細野村宇野町まで測る。	一九七
3	（ 11）	同	同	同	細野村宇野町より西方村石氷川前まで測る。この川大水にて橋流れ渡ず引返し再宿	一九七
4	小休	原田村字大平	同 えびの市	平右衛門	西方村石氷川手前より仮橋を渡り原田村字大平、駅名飯野町を歴て久留孫川、川内川の上流をわたり中福良村枝加久藤の印に繋ぐ。	二〇八
	（ 12）	加久藤宿	同 えびの市	禅曹洞宗 瑞喜山徳泉寺		二〇八
5	昼休	大畑村	熊本県人吉市	酒造家与右衛門	無測 人吉候より贈物あり。	二〇〇
	13	人吉城下	同 人吉市	客館 家番又兵衛		二〇〇
6	（ 14）	免田村	同 あさぎり町	曹洞宗普門山長徳寺	球磨郡七地村字赤池原四ツ辻、鹿児島道 米良道 人吉道追分より西ノ村鳩胸川土橋を渡り、二子川河原迄測る。	一九七
7	昼休	多良木村字青井手	同 多良木町	永昌寺 領主客屋 家番高野瀬伴助	免田村字二子川より多良木村を歴て湯ノ前村字植木迄測る。	一九七
	（ 15）	湯前村	同 湯前町			一九七
	昼休	津留谷村字横谷	宮崎県西米良村	勘女来和名七	湯前村より字猪鹿倉 津留谷村字横谷を歴て一里山越峠を越し、津留谷村枝板屋谷まで測る。	一九七
8	（ 16）	津留谷村枝板屋谷	同 西米良村	勘女来猶吉		一九七

宿泊日 旧暦	（西暦	宿泊地	現 市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
文化9年6月（1812）						
9	午休	津留谷村本村	同 西米良村	黒木喜六	津留谷村枝板屋谷より字曲り淵 板屋谷川竹橋を渡り高橋滝あり、字平瀬 板屋谷川 米良川落合 板橋をわたり、字米良谷村 米良川米良谷橋 割木橋 を渡り津留谷村本村を歴て天包越峠を越し小河谷村まで測る。米良君贈物あり。	一九七
10	（17）	小河谷村	同 西米良村	河野佐渡右衛門		
11	昼休	小河谷村字別府谷	同 西米良村	河野藤左衛門	小河谷村より字別府谷を歴て米良川越野尾橋 丸木橋 を渡り字道口まで測る。	一八五
12	（18）	小河谷村字小原	同 西米良村	小原稲荷 神主甲斐右近		
13	（19）	尾泊村	同 西都市	山伏延寿院	小河谷村字道口より杉本越峠国界を越し尾泊村まで測る。	一八五
14	昼休	三宅村字笹ノ本	同 西都市	久太郎	尾泊村より三宅村字笹ノ本を歴て南方村まで測る。	一八五
15	（20）	南方村	同 西都市	庄屋増五郎		
16	（21）	佐土原城下 大小路町四丁目	同 佐土原町	油屋友吉	南方村より妻万町下妻方 岡富村字船蔵を歴て現王島村 三納川船渡し佐土原城下大小路町二丁目に繋ぎ終る	一八五
17	昼休	高鍋城下	同 高鍋町	那須屋岩吉	無測	一八五
18	（22）	都濃町	同 都農町	客館		
19	（23）	山陰村枝小野田	同 日向市	庄屋和右衛門	才脇村より美々津川縁椎葉山向け測量 美々津川中央郡界 左臼杵郡才脇村 右児湯郡上別府村たびたび川を渡り山陰村字中ノ原枝出口まで測る。	一八四
20	（24）	坪屋村	同 日向市	百姓長治郎	昨日の打止より枝小野田を歴て字又猪野の渡場を渡り、美々津川を離れ谷合を通る。枝羽坂を歴て枝仲瀬門字野々崎 魚登川を渡り坪屋本村まで測る。	一八四

宿泊日 旧暦	（西暦	宿泊地	現 市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
文化9年6月（1812）						
17	（25）	神門村	同 美郷町	庄屋若杉武左衛門	坪屋村より字蒲江谷を歴て蒲江越峠を越し下三ケ村 水清谷村を歴て神門村字名木まで測る	一八四
18	（26）	鬼神野村	同 美郷町	百姓友治	神門村字名木より鬼神野村字折立を歴て字赤豆野まで測る	一九四
19	（27）	椎葉山下松尾村	同 椎葉村	庄屋松岡久左衛門	鬼神野村字赤豆野より鬼神野村 椎葉山上松尾村界 笹尾峠を越し上松尾村を歴て下松尾村まで測る	一九四
20	（28）	椎葉山十根川村	同 椎葉村	庄屋那須利兵衛	下松尾村より岩屋戸村 大窪村を歴て十根川村まで測る	一九四
21	（29）	椎葉山胡麻村	同 椎葉村	庄屋黒木孫左衛門	十根川村より中塔村 宇原村を歴て胡麻村まで測る	一九四
22	（30）	鞍岡村枝日向門字木合屋	同 五ケ瀬町	百姓藤治郎	胡麻村より椎葉山延岡領界 胡桃峠を越し鞍岡村枝日向門字木合屋まで測る	一九四
23	（31）	大野村枝馬見原町	熊本県山都町	本陣藤井平右衛門 藤垣宇作	字木合屋より字清水寺村 字道ノ上を歴て萩原五ケ瀬川土橋中央国界 臼杵郡鞍岡村 阿蘇郡大野村まで測る	一九四
24	（8.1）	大野村枝小嶺	同 山都町	庄屋大塚宇助	五ケ瀬川土橋中央国界より大野村枝馬見原町を歴て枝小嶺まで測る	一九四
25	（2）	浜村枝浜町	同 山都町	酒造屋高谷徳平	大野村枝枝小嶺より上河井野村 小野尻村を歴て浜村枝浜町まで測る	一九四
26	（3）	原村	同 山都町	原住桂七	浜村枝浜町より長田村 原村を歴て金内村字下村 金内川土橋迄測る	一九五
27	（4）	南田代村字八勢	同 御船町	医師宮部春斎	金内村字下村土橋より中島村 南田代村字八勢を歴て西上野村迄測る	一九五

宿泊日 旧暦	（西暦	宿泊地	現 市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
文化9年6月（1812）						
28	（5）	重富村	同　御船町	鯰手永大庄屋 間部忠右衛門	西上野村より南木倉村字西木倉 牛ケ瀬村 上島村を歴て鯰村 加勢川土橋重富村界迄測る。	一九五
29	午休	熊本城下川尻口	同　熊本市南区	益城屋甚十郎	重富村より田迎村字冷水 熊本市中御船口を歴て川尻口木戸繋迄測る。	一九三
	（6）	田迎村	同　御船町	手永大庄屋大賀仙助	無測	一九三
7月1日	昼休	大津町	同　大津町	大津瀬兵衛	無測	一九三
	（8.7）	内牧宿	同　阿蘇市	手永大庄屋内牧嘉八	無測	一九三
2	昼休	市ノ原町	同　小国町	佐藤勇助	無測	一八〇
	（8）	宮原村	同　小国町	奴留湯省吾	無測	一八〇
3	昼休	出口村	大分県日田市	庄屋七郎右衛門	無測	一八〇
	（9）	庄手村	同　日田市	庄屋三十郎	無測	一八〇
	昼休	戸畑村	同　玖珠町	庄屋甚助	無測	一八〇
4	（10）	森町	同　玖珠町	本陣 年寄山上伝左衛門 年寄加藤市郎助	無測　両手出会	一八〇
文化9年7月（1812）						
5	（11）	森町	同　玖珠町	本陣 年寄山上伝左衛門 年寄加藤市郎助	忠敬外5名は逗留 恒星測定	一八〇
		太田村	同　玖珠町	一向宗鳥屋山養専寺	永井外3名 森町本町より字代九郎原、太田村枝内匠を歴て枝鳥屋まで測る。	一八〇
	中食	山移村枝上ノ畑	同　中津市	庄屋泰蔵	永井外3名 枝鳥屋より豊前国界ならび山移村枝上ノ畑を歴て西谷村まで測る。忠敬外5名は無測 恒星測定	一七九
6	（12）	西谷村	同　中津市	本陣庄屋義八 組頭又四郎 百姓又三郎		一七九
7	後手昼休	曽木村字青	同　中津市	庄屋新治	西谷村より折元村字長野を歴て跡田村森街道日田羅漢寺道追分まで測り、羅漢寺立寄。	一七九

宿泊日 旧暦	（西暦	宿泊地	現 市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
文化9年7月（1812）						
8 *	本隊昼休	嶋村字鶴	同 中津市	酒屋治右衛門	平田村より戸原村枝口ノ林、柿坂村字御屋敷、嶋村字鶴を歴て宮園村まで測る。恒星測定	一八〇
	（14）	宮園村	同 中津市	庄屋治左衛門 百姓伊助		
9 *	小休	中摩村字神谷	同 中津市	百姓酒造孫兵衛	宮園村より街道岩石切抜き岩穴二箇所、中摩村字神谷を歴て宇曽村字掛地、彦山日田街道追分まで測る。恒星測定	一八〇
	（15）	守実村	同 中津市	庄屋民右衛門 星蔵		
10 *	昼休	草本村枝竜ヶ鼻	同 中津市	庄屋安右衛門	宇曽村彦山日田街道追分より草本村枝竜ヶ鼻、槻木村を歴て字轟川まで測る。領主より国産の贈物あり。	一八〇
	（16）	槻木村	同 中津市	庄屋儀作 年寄小左衛門		
11 *	（17）	英彦山	福岡県添田町	会所	槻木村字轟川より薬師峠を越し、宮印を残し豊前坊社寛、打上る。宮印より英彦山字町浪を歴て、会所前まで測る。	一八〇
12 *	小休	上落合村枝祓川	同 添田町	玉屋川緑茶屋 半右衛門離座敷	英彦山字町浪より字桜馬場下宮浮殿、唐銅大華表を歴て字唐ケ谷、添田小石原追分まで測り上落合村枝祓川を歴て枝小中尾にて順逆両手合測、一同彦山客屋にて中食。会所前より英彦山本社上宮、女体岳本社まで測る。小笠原候より国産贈物あり。	一八〇
	中食	英彦山	同 添田町	客屋		
	（18）	英彦山	同 添田町	会所		
13 *	中食	添田村	同 添田町	庄屋勘三郎	忠敬外1名、月食測量用意に直に小倉に行く。	一七八
	（19）	香春宿	同 香春町	年寄米屋源右衛門		
14 *	中食	呼野	福岡県 北九州市小倉南区	庄屋勘左衛門		一七八
	（20）	小倉城下	同北九州市小倉北区	宮崎良助		

宿泊日 旧暦	（西暦	宿泊地	現 市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
文化9年7月（1812）						
15	支隊昼休（21）	徳力宿	福岡県北九州市小倉南区	庄屋勘左衛門	無測	
	（21）	小倉城下	同北九州市小倉北区	宮崎良助	本隊は小倉逗留して月食測量の支度 恒星測定	一七八
【支隊】						
8	（14）	守実村	大分県中津市	庄屋民右衛門 星蔵	平田村より無測	一八〇
9	（15）	財津村	同 日田市	庄屋俊平 組頭弥文治	宇曽村彦山日田街道追分より守実村及び豊前国豊後国界 伏木村 秋原村を歴て財津村まで測る	一八〇
10	（16）	鶴河内村	同 日田市	庄屋百助 組頭三右衛門	財津村より羽野村を歴て河原町小野川端に繋ぐ 小野川端より渡里村を歴て鶴河内村 中村界まで測る	一八〇
11	中食（17）	鼓村	福岡県東峰村	庄屋初助	鶴河内村 中村界より中嶋村 筑前国界 福井村 宝珠山村字大行事 鼓村を歴て小石原村字南原 福岡彦山追分まで測る	一八〇
	（17）	小石原宿	同 東峰村	筑後屋茂兵衛 綿屋喜助		
12	（18）	彦山	同 添田町	会所	福岡彦山追分より豊前国界を歴て上落合村枝小中尾にて順逆両手合測	一八〇
13	小休（18）	上落合村字猿掛	同 添田町	妙見宮拝殿	英彦山字唐ケ谷 添田小石原追分より上落合村字猿掛 下落合村枝柳原を歴て添田町まで測る	
	昼休（19）	下落合村枝柳原	同 添田町	庄屋善吉		
	（19）	添田町	同 添田町	大庄屋添田保助 勘三郎		
14	小休（20）	下今任村	同 香春町	十輪院	添田町より上今任村枝道原 下今任村を歴て香春町字山下 筑前豊前街道追分碑に繋ぐ	一七八
	（20）	香春町	同 香春町	米屋源右衛門 博田屋勘助		

古墳の中まで実測した
日田街道における足跡を辿る

小坪　隆

はじめに

筆者は自分の在所である福岡県久留米市善導寺町近辺における伊能忠敬測量隊の足跡が網の目のようになっていることを「完全復元伊能図全国巡回フロア展」で知りました。また、在所の地名が記載されており、こんなところにも測量隊が来たのだと驚くと共に調べてみようと思いました。そこで、近辺の測量ルートの現状を実地調査によって確認し、その結果をこれまで三冊の私家本小冊子（本郷～金島編、大城～善導寺編、田主丸～御井編）に纏めました。

今回、これまで未調査であった田主丸から浮羽（福岡県と大分県の県境）までの日田街道に於ける足跡も辿ってこれもまた私家本小冊子として纏めました。その測量ルートの確認はこれまでと同じ手法、即ち、文献調査等をとおして必要な基本的情報を収集するとともに、フロア展で得られた情報を含めた伊能大図などの地図情報、測量隊の測量日記、明治期の地図等々を基に現行の地図上で伊能忠敬測量隊一行が歩いた測量ルートを検討し、次に、現地を歩いて照合、再検討を行い、また必要に応じて近くの古老の話を聞いたりしながら行いました。そのような調査行の過程で、測量日記に記述の事物がそっくりそのまま眼前に見え、つぶさに確認できたときには何とも言いようもなく気持ちがたかぶり、その感激は忘れられないものになりました。その測量日記の記述とは次のとおりです。

> 十月七日　曇天、午後小雨。朝六ッ後、生葉郡久留米領北山村側所より初、隈上村、隈上川飛石渡（二十一間）。右に地蔵堂あり、左に一向宗光教寺、右に此村鎮守八幡宮あり、石華表前に〇八印を残（一十二町四十五間）。〇八印より初、塚穴（測。左　隈上村、右　朝田村、左右上宮田村飛地、字重定名、塚穴口まで一町三十三間。穴の口より奥迄七間五寸、奥、横、高八尺、長二間、シキリ厚石四尺。中の間、横九尺、高五尺、長九尺、シキリ厚二尺。それより出口迄、長二間半、横四尺五寸、高三尺。塚上に八幡宮小社あり　古事不知。

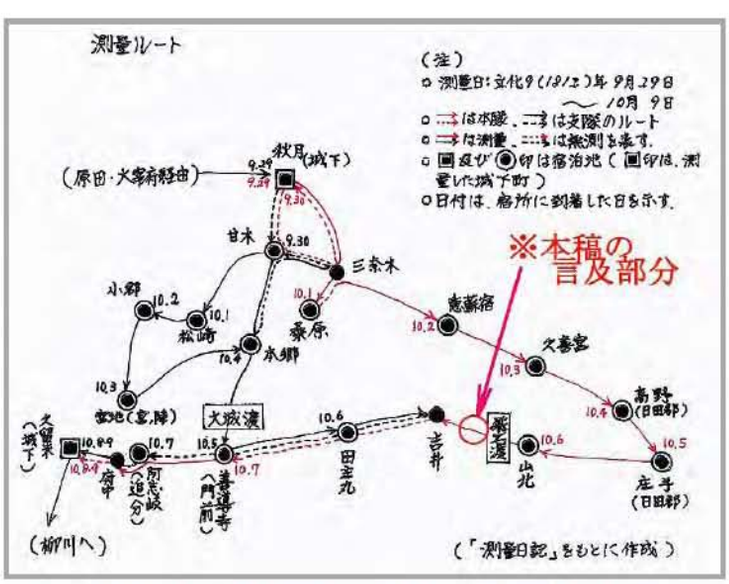
この測量日記の記述どおり、現地でも隈ノ上正八幡宮の鳥居に「石華表」なる刻印が確認でき、“忠敬さんはこの場所に立って「石華表」を確かめたのだ”、“忠敬さんはここに〇八印の杭を打ったのだ”、そして、“忠敬さんはここから古墳に向かって測り始めたのだ”と、私自身を“忠敬さん”に重ねて見ていたことを思い出します。また若宮八幡宮の広い境内を宮司さんに案内されて歩いていると、あの富岡八幡宮の伊能忠敬像そのままの姿の忠敬さんが歩いているのを見たような気さえしたものです。そのことから今回の日田街道浮羽路の調査は、いわば伊能忠敬との同行二人の測量行のようで感激の連続でした。

本稿は重定古墳測量の部分に特化して、伊能測量隊が見た光景を再現してみたものです。

一、本稿の対象である伊能測量の概要

第八次（九州第二次測量）

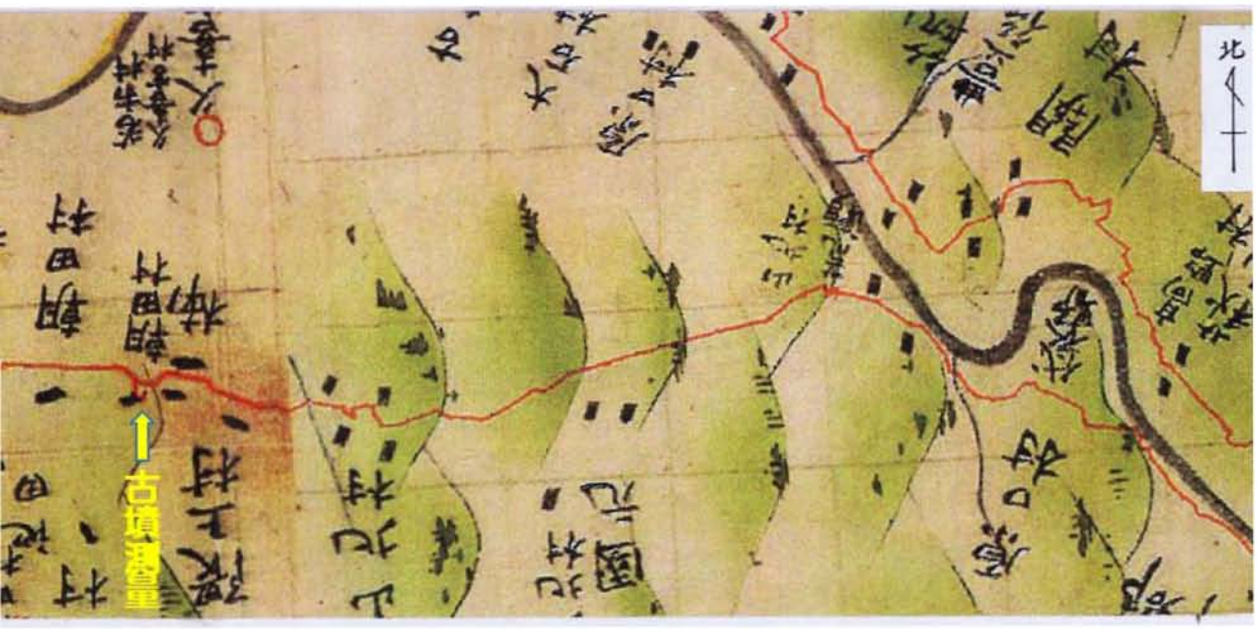
文化九年正月二五日、山陽道を経て小倉へ、その後、屋久島・種子島に直行した後、九州内陸部の街道筋を測りながら北上し、九州西北部の沿岸・島々・街道筋を測量。そして文化十年十月十四日、小倉を経て下関へ。

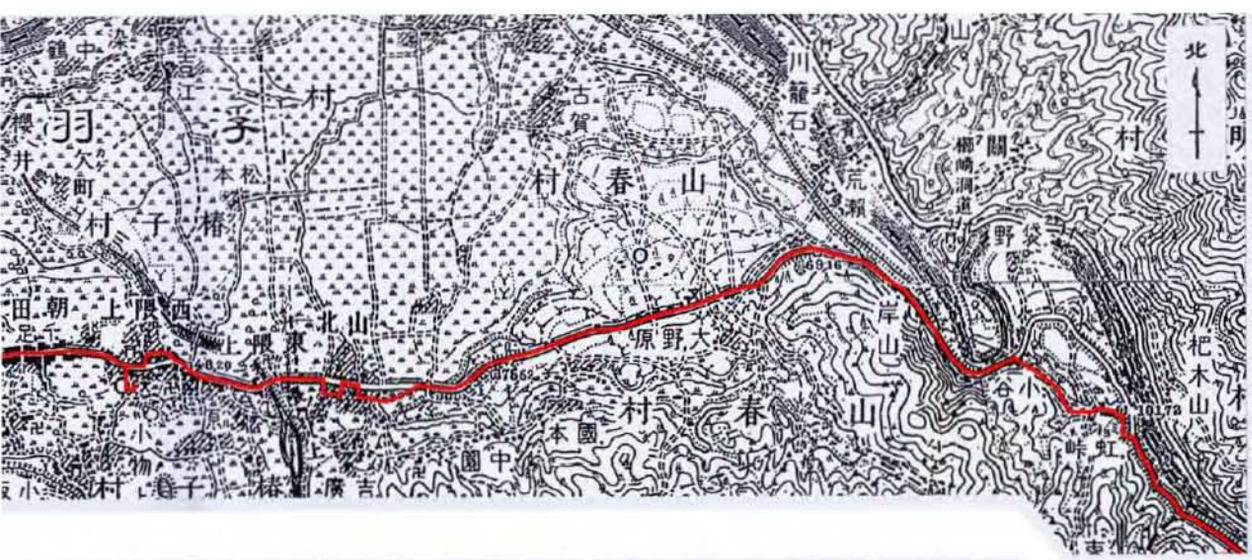


福岡県久留米市善導寺町近辺における伊能忠敬測量隊の足跡

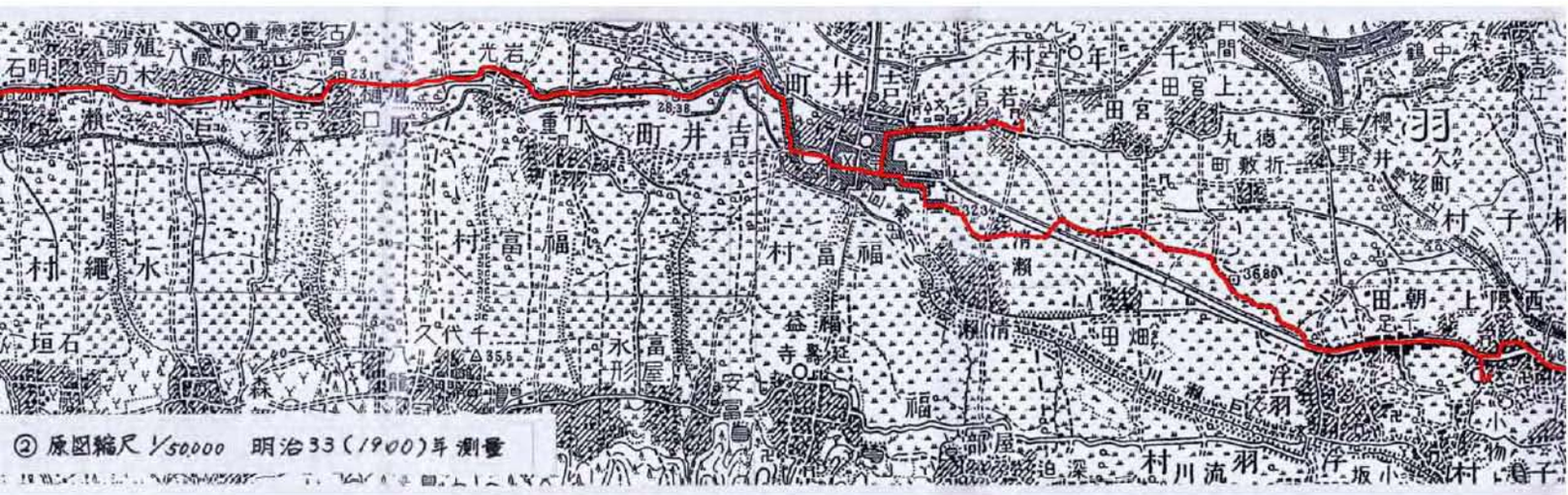
二、日田街道の測量ルート図

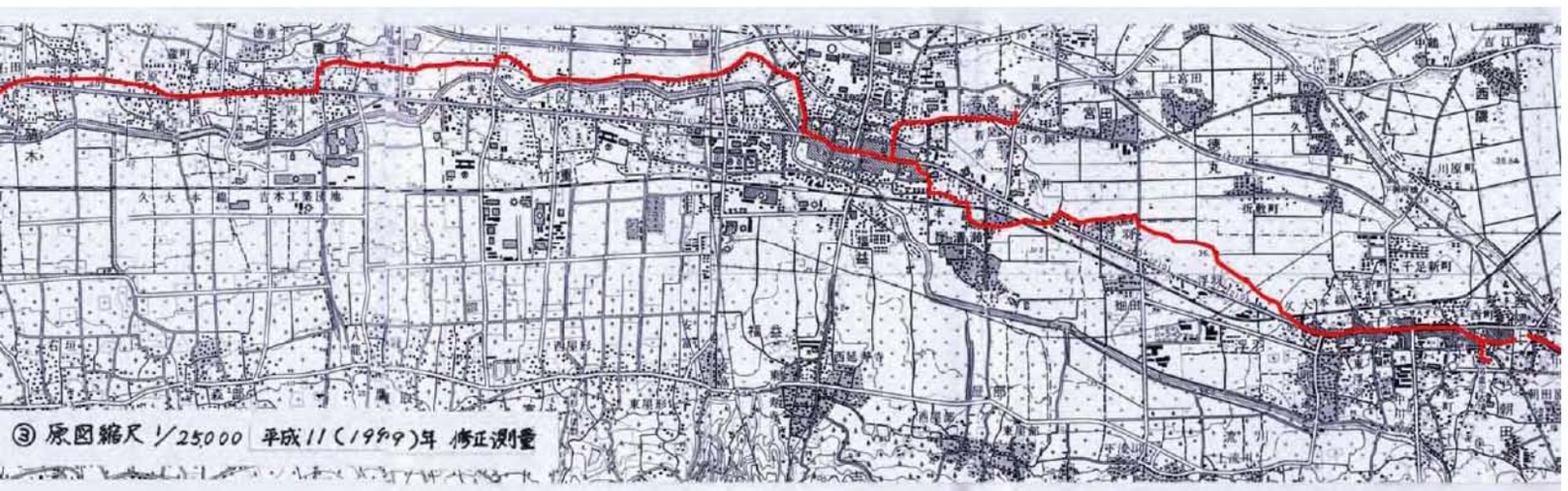
伊能忠敬測量隊の測量ルートを測量後に完成した「大日本沿海輿地全図」（部分）をもとにして、明治期の地図及び現代の地図で今回の調査で得た結果から比較・確認したのが左図である。明治期の地図では殆ど伊能図の測線は残っているが、現代の地図になると、道筋が拡幅されたり、一部は消滅していたり、遺ってはいても畦道ほどに狭くなっていたり、測量当時のままと思われる道筋は、ところどころに一部が残っている程度である。





① 伊能大図（部分） 原図縮尺 1/36,000 文化9（1812）年測量
福岡県久留米市善導寺町
古賀測量


② 原図縮尺 1/50000 明治33（1900）年測量


③ 原図縮尺 1/25000 平成11（1999）年 修正測量

三、古墳への測線

文化九年一〇月七日、曇り空の中、午前六時過ぎに山北村の宿所を出た測量隊は測量を続けながら、隈ノ上川を渡り西進して現浮羽町の市街地に入る。

以下、測量日記の記述に沿って順次図解する。

・㉕左に一向宗光教寺（山門は㉖）

・ここから測線は分岐している右側を進み、㉗→㉘→㉙・

・㉚右に此村鎮守八幡宮あり。石華表前に前に㊀印を残す。

㉖測量日記に「左に一向宗光教寺」とあり、測量隊がこの街道を左手から右手（西方）に向かって進行したことが分かる。なお、光教寺は文明３（1471）年の創建になるものであり、奥に見える山門は約 250 年前の建築である由。とすれば、伊能忠敬も目にしたということになる。

㉕現浮羽町の中心市街地への東からの入り口に当たる地点から西方を望む景観である。測量日記に記載の光教寺は分岐点の左（南）側に立っている案内板の奥に在る（㉖参照）。当時の街道は分岐点から右側の細い道である。測量隊はこの街道に梵天を立て、間縄を張って距離を、杖先羅針で方位を測りながら直進を続けて正八幡宮を目指した。

㉘　㉗の水路沿いの道を進むと街道はこの写真の右手に出てくる。ここで右（西）に曲がり直進すると正八幡宮の社前に至る。写真中央奥に見える大木は楠で正八幡宮のご神木である。

㉗光教寺の前の分岐点から細い街道を進んでくると、ここで街道は左（写真の奥）へ曲がる。水路沿いに少しカーブしながら約３９間（７０m）ほど進んだ突き当り（㉘参照）で測量隊は右折する。

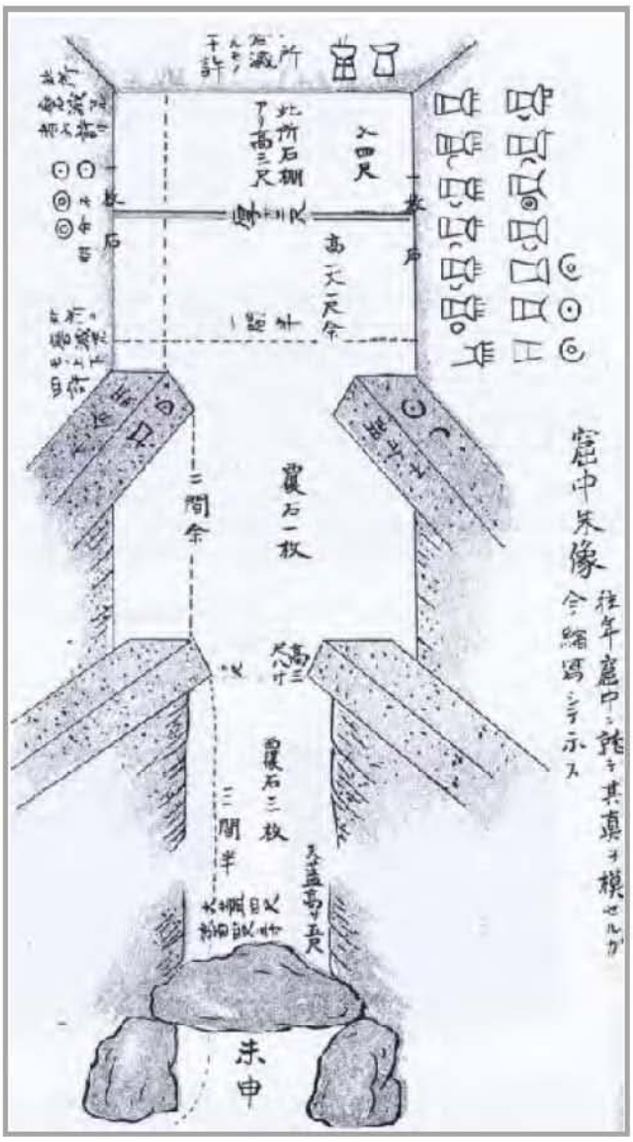
㉚正八幡宮。測量日記に「右に此村鎮守八幡宮あり。石華表前に○ハ印を残す」とある。街道を右から進んできた測量隊は鳥居前に○ハ印をつけた棒杭を掛け矢で打ち込み測量の目印とした。測量隊はここ々から楠名重定古墳に向かう。なお、現社殿は享保２（1717）年再建の由。つまり、伊能忠敬の見た社殿の姿そのものである。

㉙　写真㉘の曲がり角から１６間程（大凡 30m）進んだ地点である。更に３３間程（大凡 60m）進むとご神木の楠のある正八幡宮である。手前を左（南）に曲がる道路は県道 106 号（朝田ー日田線）で、すぐ南に広がる朝田原や一の瀬（伝一の瀬館跡：測量日記に在る「旧跡問注所」の所在地）に至る。

・塚穴口まで一町三十三間（㉛→㉜→㉝）

㉜重定古墳をほぼ真南から望む。正八幡宮前から星野道を進んでくると中央の家屋とその左側の家屋の間を通って電柱のすぐ左側を左手に向かって抜けている。測量隊は中央の電柱の所で左（東：写真右方）に曲がり、中央の家屋の屋敷に沿って進みビニールハウスの後ろの屋敷との間を北に曲がると古墳入り口に至る。

㉛正八幡宮の鳥居前から南方向を望む。写真中央の細い道を進むとほぼ真南に直進し星野道と呼ぶ道の東傍にある重定古墳に至る。塚穴口まで一町三十三間。



重定古墳内部の構造

㉝古墳入り口は南面しているが、写真奥に見えるように現在は入り口を覆う建物の壁となっている（入り口は西）。その壁面の左側にかっては古墳標石が建っていた由。また、カメラの後方の道路の右傍にはかって旗立台があったとも

㉞重定古墳の墳丘後円部頂上にある八幡宮小社。左側の灯籠には「八幡宮御寶前寶暦十一辛巳正月吉祥日」の銘文がある。（寶暦十一年は 1761 年）
墳丘頂上に登る階段

穴の口より奥迄七間五寸。
奥、横、高八尺、長二間、シキリ厚石四尺。
中の間、横九尺、高五尺、長九尺、シキリ厚二尺。
それより出口迄、長二間半、横四尺五寸、高三尺。

・塚上に八幡宮小社あり　古事不知（㉞）。

※上段左図は「筑後将士軍談」（矢野一貞、嘉永六年刊）に付図として掲載されているものである。著者の年譜から文政八年の実測と考えられる。であるとすれば、伊能忠敬の実測の方が十三年早いということになる。

四、終わりに

今回の伊能忠敬測量隊の測量ルート確認の調査対象である田主丸～浮羽間の旧街道は、様々な形に変化しながらも殆ど遺っていた。拡幅舗装され交通量も多い国道210号や県道、市道になったり、田畑の中の幅二米弱の農道や畦道になったりしているが、消滅している所はごく一部であった。そのような調査行の過程で、図らずも伊能忠敬翁の息吹を間近に感じることが出来た。古墳内部の測量という極めて珍しいといわれる場面に遭遇し、興奮覚めやらぬ状態が未だに続いているので、このまま無測にて宿舎に向かうこととしたい。

本稿の会報への投稿に際しては、戸村茂昭氏から多くのお力添えをいただきました。厚く御礼申し上げます。（了）

伊能探訪
― 若狭・北近江の旅 ―

玉造　功

一「伊能測量隊全宿泊地 Google マップ」の威力

昨年一一月上旬に若狭・北近江の古い町並みを旅行した。今回の旅行では伊能忠敬 e史料館の伊能測量隊全宿泊地 Google マップを使って旅先のリサーチをしてみた。その威力が福井県高浜町で発揮された。伊能隊の宿泊した場所に「潮富荘」とあるので、「潮富荘」のＨＰを調べてみると伊能忠敬が宿泊したと記載されている。

舞鶴・小浜間は高速道路で直行する予定であったが、急遽高浜町日引に立寄ることにした。舞鶴から府道七七二号と県道二一号線で大浦半島を横切り、日引地区に到着した。

眼下には内浦湾が広がり、対岸には高浜原子力発電所も確認できる。しかし、県道から日引の集落に降りていく道路はあまりに狭く急傾斜である。日本の棚田百選にも選ばれたという日引棚田と漁村、海が織りなす景観を楽しむ余裕はない。

潮富荘に着くとタヌキの置物が出迎えてくれた。おなかには「伊能忠敬ゆかりの宿」とある。幸いにも、女将のご厚意で、宿泊客でもないのに、お話を伺い館内を見学することが出来た。お話では、明治時代に庄屋屋敷を購入して宿を始めたということで測量日記の「止宿庄屋三郎兵衛」とは直接の関係は無いようである。玄関脇には立派な大広間があり、二〇〇年の歴史を感じさせる。伊能忠敬写真展のスペースが廊下の一角にあった。知り合いの協力を得ながら充実をはかっているとのことであった。潮富荘は若狭湾の海の幸、特にふぐ・カニ料理の宿とのことである。再訪を期して別れを告げた。

さて測量日記の文化三年九月一七日の該当個所には「同十七日　朝曇天。我等、下河辺、尾形、稲生乗船、直に若狭国大飯郡小浜領日引村に至る」とある。測量は坂部貞兵衛らの一番と、高橋善助らの二番

に手分けしておこない、午后五時前には日引村の庄屋三郎兵衛に到着し、船で直行していた忠敬らと合流している。

この日は丹後田辺藩領の測量が終わる日でもあった。丹後田辺藩家中の内海杢と古河半弥という者が「暦学並地理を行々学ばん事を願う」という出来事があった。

山本四郎著『新宮涼庭傳』（ミネルヴァ書房）によると、文化七年に新宮涼庭（丹後出身の蘭方医）の長崎遊学を支援した英哲の聞こえの高い人物として、丹後田辺藩の家老の内海杢の名前が登場する。同一人物であろうか。

五年後の文化八年一一月一五日の江戸日記に、牧野豊前守の家臣の合田祐唯と高橋幸助が入門したという記事が登場する。牧野豊前守とは丹後田辺藩第七代藩主の牧野以成のことである。学問を奨励していた丹後田辺藩の願いはかなえられたようである。

日引周辺の大図を見ていて気になったのが音海の大断崖である。高さ二七〇ｍの日本一の断崖絶壁が続く海岸線の測量は困難を極めたのではないだろうか。測量日記の九月一八日を見ると「三番坂部、稲生、吉平、大飯郡音海村より初、海辺通り下小黒村の内谷口迄測る」とあるだけで「大難所」の文字もない。第五次測量も終盤に入り、ベテラン隊員は事も無げに測量を続けている。岬の付け根部分では横切り法の測線が見られる。

二　木之本宿

小浜市の小浜西組と若狭町の熊川地区は重要伝統的建造物群保存地区として、滋賀県長浜市の菅浦地区の湖岸集落は国の重要文化的景観として、また「菅浦文書」を伝えてきた隠れ里として、それぞれ印象深い地であったが、伊能探訪としての収穫はなかった。

木之本宿は北国街道の宿場町として賑わった町並みが良く残っており、古い町並み好きには見逃せない場所である。念のため伊能測量隊全宿泊地Google マップを見てみた。「つるやパン」よりも向かい側の「本陣薬局」が該当しそうである。

「本陣薬局」ＨＰを見ると、「北国街道木之本宿の本陣職を拝する。幕末、薬舗を兼ねるようになる」とあり間違いなさそうである。測量日記の第四次測量の享和三年五月二四日には、「止宿本陣竹内五左衛門」とある。また、第五次の文化三年十月一四日にも宿泊している。

木之本宿を歩くと見所が一杯である。山内一豊ゆかりの馬宿平四郎、元庄屋、高札を掲げた札の辻、木之本地蔵院、二つの酒蔵に醤油屋が一軒、うだつと紅殻格子の家並みが続くその中に本陣薬

局があった。写真の様に軒下の古い木製の薬の看板が掛っており店の歴史を物語っている。

本陣薬局は明治二六年に薬剤師名簿に第一号として登録された老舗の薬局とのことである。同時に第二号として登録されたのは香取市佐原の小川薬局である。漢方医初代の小川玄喜は『伊能忠敬書状』一一〇にもその名が登場する。薬剤師名簿第一号と第二号の薬局が共に現存し、共に忠敬に縁があるのも興味深いことである。残念ながら休業日のようでお話を聞きけなかった。

三　北国街道で市助飴を探す

上の大図で北国街道を北上して、木之本宿から二つ目の村が坂口村である。享和三年五月二三日の測量日記には「此所に名物市助飴あり」とある。測量日記に土地の名物が記載されているのは珍しい。市助飴の消息を求めて坂口に向った。手掛りはGoogleマップにある菊水飴本舗である。

国道三六五号を北上し、坂口の手前で北国街道の旧道に入る。細い旧道をすすむと趣のある民家があり、それが菊水飴本舗であった。見逃してしまうところであった。

御主人の話では、江戸時代には、代々「市助」を名乗っていたので「市助飴」と呼ばれたり、地名から「坂口飴」と呼ばれていたとのことである。容器の蓋にも「御飴屋市助製造」とある。測量日記の「名物市助飴」に間違いない。

京都の醍醐寺三宝院門跡がこの飴の風味を愛でて、菊の御紋の暖簾とともに、

つきせしな　千代の　久寿利（くすり）に　栄えける
黄金のいろの　きくすいのあめ

という和歌を賜ったことから、明治時代になって「菊水飴」を商標にしたとのことである。

忠敬一行も滋養に富んだ水飴で旅の疲れを癒やしたのだろう。御主人は忠敬の測量日記に「市助飴」が載っていることについて、「初めて聞きました」と驚いておられた。

四　伊部宿本陣

第四次測量では、関ヶ原から北国脇往還を通って、春照宿、伊部宿、木之本宿を経て敦賀から加賀測量へと向っている。伊部宿についても伊能測量隊 Google マップが手掛りを与えてくれた。

伊能図大全 121号

享和三年五月二三日の測量日記には伊部宿について、「当宿、郡上宿共小谷宿という。郡上宿と駅次代る。当宿は上継。郡上宿は下継」と注記している。伊部宿は木之本方面に向う旅客を、郡上宿は関ヶ原方面の旅客を担当するという、二宿一駅という形態をとっており、合せて小谷宿という。測量日記にはさらに「止宿肥田加兵衛　本陣なり)、此夜曇天、雲間五六星測」とある。

現在の伊部の町並みは宿場の面影は失われているが、その代りに、代々本陣をつとめてきた肥田家の堂々たる門構えが往時を偲ばせてくれる。お留守のようでお話を伺うことができなかったのが残念である。

伊部本陣の説明板を読むと「伊能忠敬も、享和三年五月二三日に宿泊し饗応を受けている」とある。「饗応」と記されているのには根拠がある、

肥田家が伝えてきた文書の『海道帳』には諸大名などの休憩・宿泊の際の献立や食材が記録されている。その中に忠敬一行の夕食・朝食・弁当の献立があり、夕食は一汁四菜であったとのことである。第四次測量の忠敬の先触には、其の所の有り合せの品にて一汁一菜の外、馳走がましき儀決して致させまじく候と指示しているのであるから、一汁四菜となると「饗応」と説明板にあるのもやむをえまい。大名や他の幕臣と較べてどの程度の「饗応」であったのか興味が湧く。

なお湖北町食事文化研究会の『忘れぬうちに伝えたい湖北町の伝統食・地産食』には忠敬に振舞われた夕食の献立や再現した写真が掲載されているという。木之本や長浜の書店で入手しようとしたところ「良い本ですよ、ただ自費出版だったので部数に限りがあり、入手は無理です」との返事であった。再訪すべき場所がまた増えた。

伊部宿（上小谷宿）の本陣を務める肥田家は、江戸時代の初めに幕府直轄領代官を拝命した他、本陣役を明治 3 年（1870）まで務めた。明和 6 年（1769）と安永 7 年（1778）、類焼により座敷など主要部を焼失したが再建している。明治 42 年（1909）の姉川地震により、本陣部分は全壊。門や蔵のみ残ったが、壊れた住居部分の一部が再建されている。北陸諸藩の大名が宿泊した他、全国地図を作成したことで著名な伊能忠敬も、享和 3 年（1803）5 月 23 日に宿泊し饗応を受けている。

写真の説明板の拡大

伊能測量隊の食事を再現
伊部宿（滋賀県長浜市）

編集部

はじめに

この稿は本号「伊能探訪―若狭・北近江の旅―」を執筆された会員玉造功氏の情報提供を受け、編集部が肥田嘉昭・文子ご夫妻のご了解を得てまとめたものです。

肥田さんは湖北町（滋賀県）の伝統 食・地産食の調査・試作研究をしレシピ本を発刊しています。

本稿はご夫妻の御著書「忘れぬうちに伝えたい湖北町の伝統食・地産食」湖北町食事文化研究会編集・発行（代表：肥田文子氏）および「ふるさと伊部 小谷山の麓の旧城下町・宿場町」編集・伊部誌編集委員会、発行 小谷伊部自治会（代表：肥田嘉昭）を基にしています。

伊部宿

伊部は小谷城（おだにじょう）の城下町として栄えていました。滋賀県長浜市湖北町伊部（旧・近江国浅井郡）にあった戦国時代の山城で浅井長政の居城でした。織田信長により滅亡した小谷は長政とお市の方との悲劇の舞台として知られています。

江戸期には北国脇往還の宿場町として栄え本陣・問屋が整備されました。北国脇往還は北陸地方と東海や江戸を結ぶ経路にあたる主要道でした。北陸・若狭の諸藩が参勤交代で通ったコースは、北国街道の木之本宿から北国脇往還を経て、関ケ原から中山道にはいり美濃路を経て東海道熱田の宮宿に出るのを常としました。木之元から関ケ原までの脇往還のほぼ中央にあたる伊部宿本陣は江戸時代に街道を往来する大名や公家、門跡や幕府の役人など当時の高い身分にあった人々が宿泊や休憩に使用した施設がありました。

伊能大図 121 号　敦賀・小浜の部分（伊能図大全より）

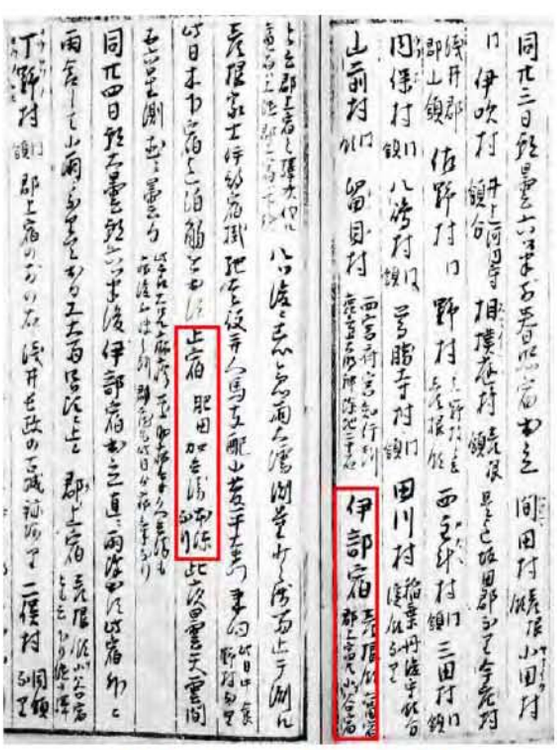
肥田ご夫妻がお住まいの伊部宿本陣跡

「海道帳」

伊部宿本陣には伊部宿や北国脇往還のことを詳しく記した61冊に上る「海道帳」が残されています。その中には本陣での献上品・食材・献立などの90年間にわたる記録があり、福井藩・加賀藩・大聖寺藩・富山藩などが参勤交代の際に休憩所として利用した記録などが含まれます。

献上品と差上物

大名などの小休みや宿泊の際に、本陣から大名にたいして特産品や名産品が献上され、それに対し大名からは宿泊料として金子が下賜されました。海道帳には「献上物」として記載されています。



伊能測量日記より伊部宿記載部分
止宿：肥田加兵衛、浅井長政の古城跡の記述

本陣における食事

大名の家臣による「自身賄い」と主人による「本陣賄い」とがありました。本陣賄いでは本陣主に調理一切を任せました。本陣が出す料理はその日の夕食と翌日の朝食と弁当です。

伊能測量隊の食事

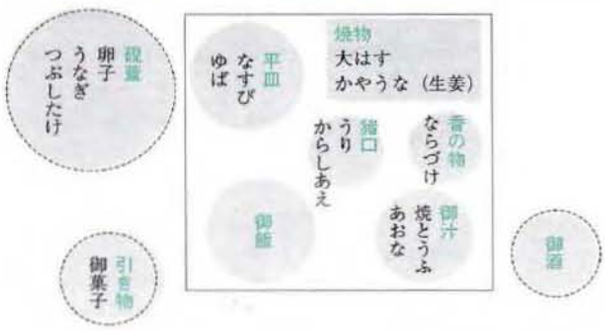
享和3年（1803）5月、日本の地図作成するため実地測量をおこなった伊能忠敬ら測量隊一行9人が宿泊したときの献立が残っており、それによると一汁四菜と酒、肴、菓子が出されました。

幕府天文方様（伊能忠敬）

夕食献立

焼き物：おおはす、かやうか（しょうが）
御汁：焼きとうふ（焼き豆腐）
青な：（青菜）
香の物：ならつけ（奈良漬）
平皿：なすび（なす）、ゆは（湯葉）、大しいたけ（大椎茸）
御飯
猪口：うり、からしあへ（辛し和え）
御酒
硯ふた：玉子、うなぎ（ウナギ）、つぶしたけ（粒椎茸）
引物：御菓子

夕食再現



朝食再現

朝食献立

平皿：京いも、玉子、しいたけ（椎茸）、かんひやう（干瓢）、ふり（うり）
御汁：干大こん（干し大根）、青な（青菜）
香の物：ならつけ（奈良漬）
御飯
焼物：ふな白やき（白焼）
猪口：にんしん（にんじん）、したし（おひたし）

弁当献立

弁当：にしめ（煮しめ）、しいたけ、かんぴょう、牛蒡（ごぼう）、いちふいも（いちょう芋）

食材と調理法

本陣が出した料理に使われた献立食材はハスやマス、モロコなどの琵琶湖産魚介類、サバ、トビウオ、ブリ、タラ、シイラ、アジ、カレイなどの海産塩干品、湯葉や豆腐などの大豆加工品、干し大根、千石豆、ちしゃ、江戸ささげ、京芋、いちょう芋、凍りこんにゃく、きのこ類、丁字麩や観世麩などの麩類などがあります。地元食材が多くつかわれています。特別な調理法としては馴れずしの手法があげられます。

おわりに

本誌64号（2012年3月発行）に石川県羽咋市における「伊能測量隊の食事を再現」の記事があります。比較されるのも興味あることです。

本稿執筆にあたり肥田ご夫妻に多大なご協力を頂きました。感謝の意を申し上げます。因みに伊能忠敬が泊まった際のご祖先のお名前は伊部本陣十代目　肥田加兵衛頼房とのことです。（S・M）

奥宮正樹「測量日記」の紹介

戸村 茂昭

本稿は、伊能測量協力者の子孫にあたる高知市在住の大久保朝子様が土佐史談に投稿され、２３１号及び２３２号に掲載された「奥宮正樹『測量日記』翻字＝伊能忠敬測量隊の案内をした土佐藩役人の記録」の転載です。本年は伊能忠敬没後２００年という記念すべき年にあたり、大久保様のご好意により当会会報への転載をお許しいただきました。なお、この日記については、大谷亮吉編著による「伊能忠敬」に一部が抜粋されて掲載されていますが、本誌では全文を掲載します。また、併せて、当測量日記の原文を所蔵している東北大学付属図書館の了解も得ましたので、原文も併せて掲載しました。

測量日記

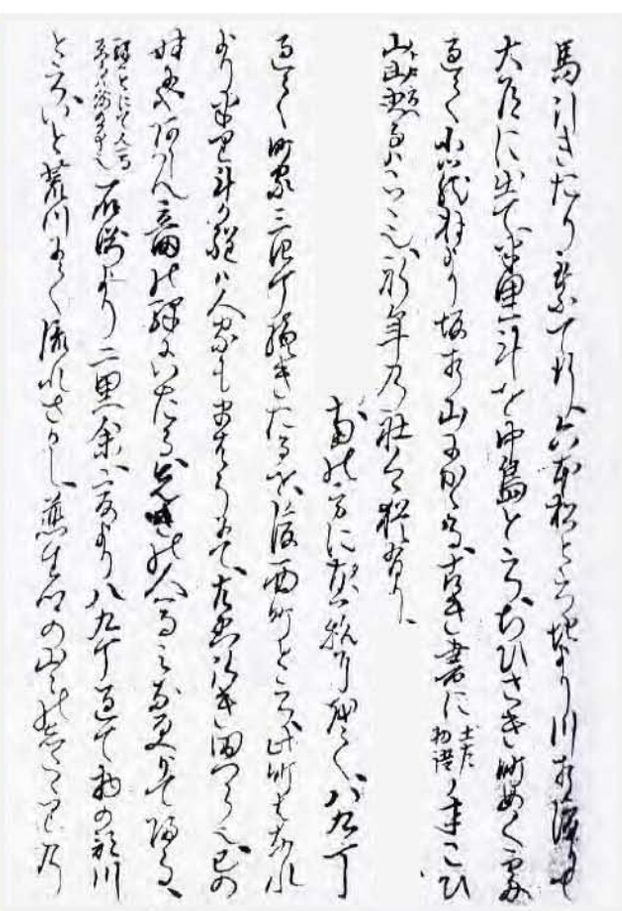
文化五年戊辰春台命有り大み国々海山つはらかに

＊頭注

「国々測量スヘキヨシノコク印。御老中備前守殿ノ書ナト有リ。伊能氏ハ本ハ下総国百性ノヨシ。自カニテエゾ地ノ測量等致シタリト云。彼国学ノ先生香取ノ名彦ナトノ近族ト云。」

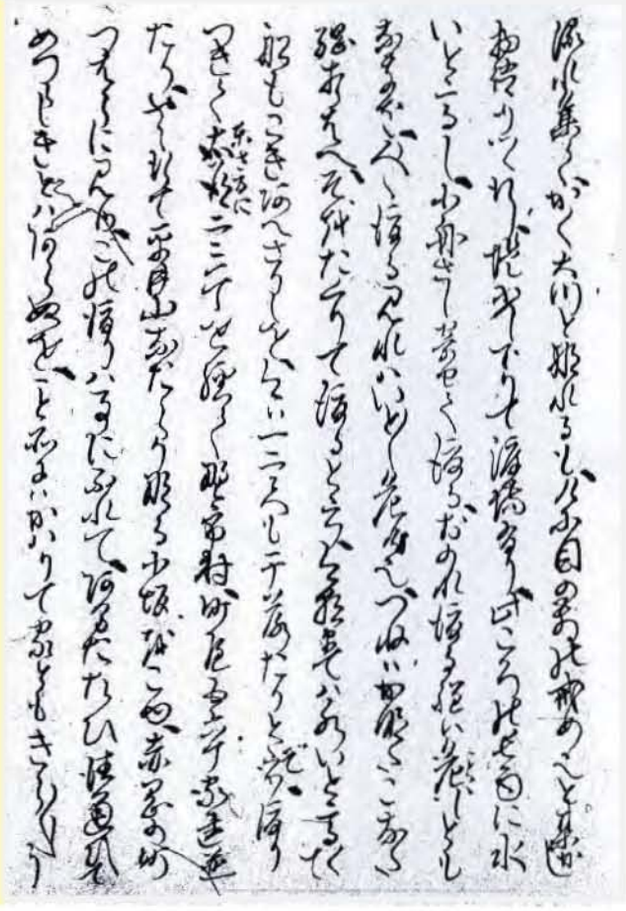
測量日記

文化五年戊辰の春、台命ありて、大み国々の海山、つはらかにそく量して、よ地のかた認て奉らす伊能勘解由と云人、あまたその方うとゐて、近く阿波国まて物しつと云に、其設とて人々あまた安喜郡甲浦までつかはさる。正樹等も道路の事修めよとて弘井俊村とともに、三月廿五日なん、出立。こは遠き旅路と云計りもなく、只このみ国内の往来なれば、其いそきとて殊にするわさもなけれど、かゝる公人に随ひつゝ事とも行ことは、まれなることにて、例よりは心いそかし。其ひの辰時門出す。石渕の駅より


馬引きたり。乗て行。六本松と云地より川打渡りて大道に出て、半里計を中島と云。ちひさき町めく処過て小籠村より坂折山にかゝる。古き書に（土佐物語）年

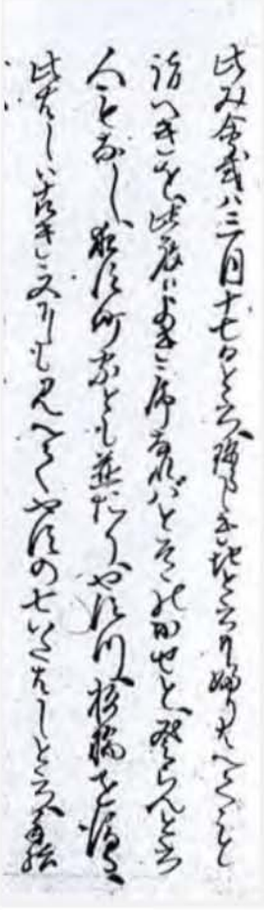
こひ山と云へるはこゝ也。祈年の社今猶有り。

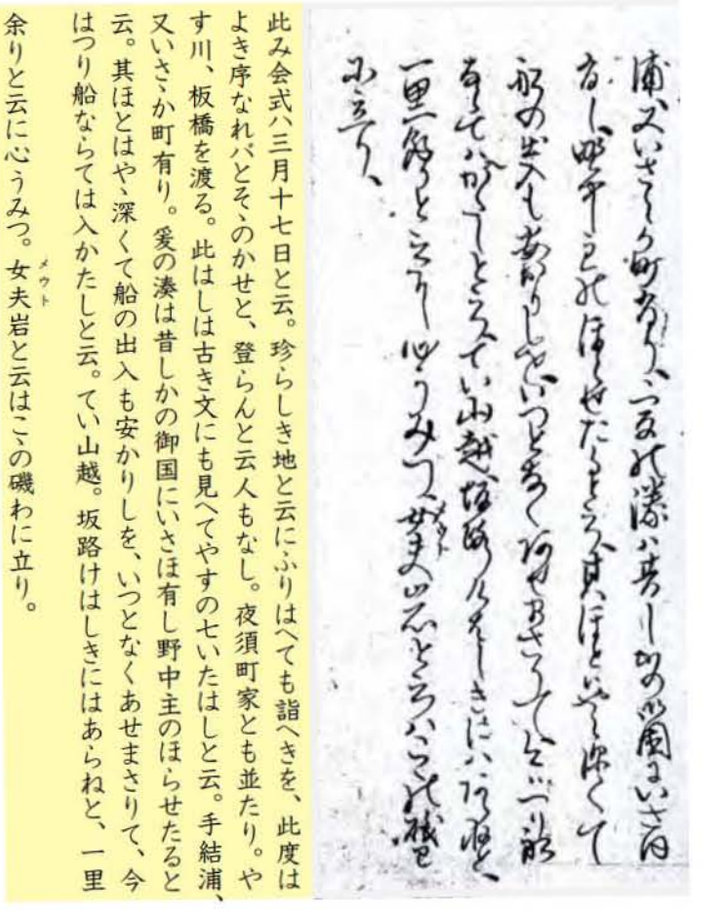
南の方に直様に越て、八九丁過て町家三四丁続きたるを、後面町と云。此町はなれより半里計か程は人家もまはらにて、左右引き田つら也。巳の時きにやあらん。立田の駅にいたる。先の人馬みな更りて帰る（駅ごとにて人馬更るは例の事也）石渕より二里余、爰より八九丁過て物の部川と云。いと荒川にて流れさかし。韮生郷の山々のしたりの



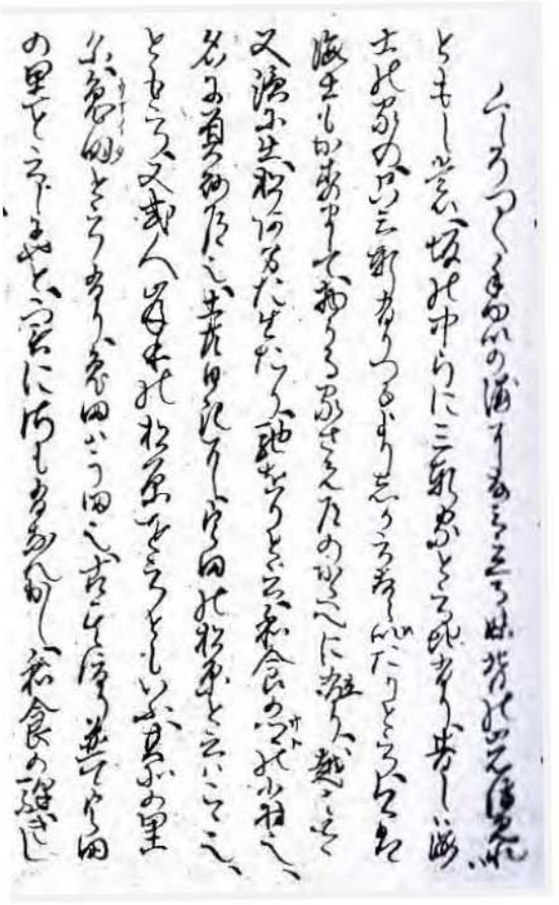
流れ集て、かく大川となれるも、けに目の前の戒め也と某かし物語りつゝ行。堤少し下りて渡場有り。此ころの長雨に水いと高し。小舟さし寄せて渡る。おのれ渡る程はことともなきを、人々渡る見れはいとゝ危け也。つねはかなたこなた網打はへ、そをたくりて渡ると云。今朝まては水いと高くて船もこきあへさりしを、今は一二尺も干落たりとぞ。渡りつきて東さまに二三丁を経て野市村、町屋五六十建並たり。やゝ行て平井山なたらかなる小坂をこゆ。赤岡の町つはらに見ゆ。この渡りは事にふれて、あまたたひ往通ひてめつらしきとはあらぬを、こと所にはかはりて家ともきらゝしう

作り渡したる、目さむる心地す。入口なる板はし渡り、桜屋何かしと云宿屋に入りて休う。先に高知より来たる人々まち侘て、午どきも過たり、とくゝとてかれ食（イヒ）なと物す。町家行はなれて、松原有り。岸本と云。こゝにもちひさき家とも町めきて並たり。未のとき計駅に至る。立田より二里。爰よりは馬にも乗らす。海部に出て行。わきの磯と云岩穂は、くじらなとの頭さし出たる様したり。左の方の山上を月見山と云。昔 土御門院この国に御幸ましゝとき、爰に月を見そなはせし古跡と云。夜須村いさゝか松生たる所を入。左の方に魚籃（キョラ）の観音の御影有り。



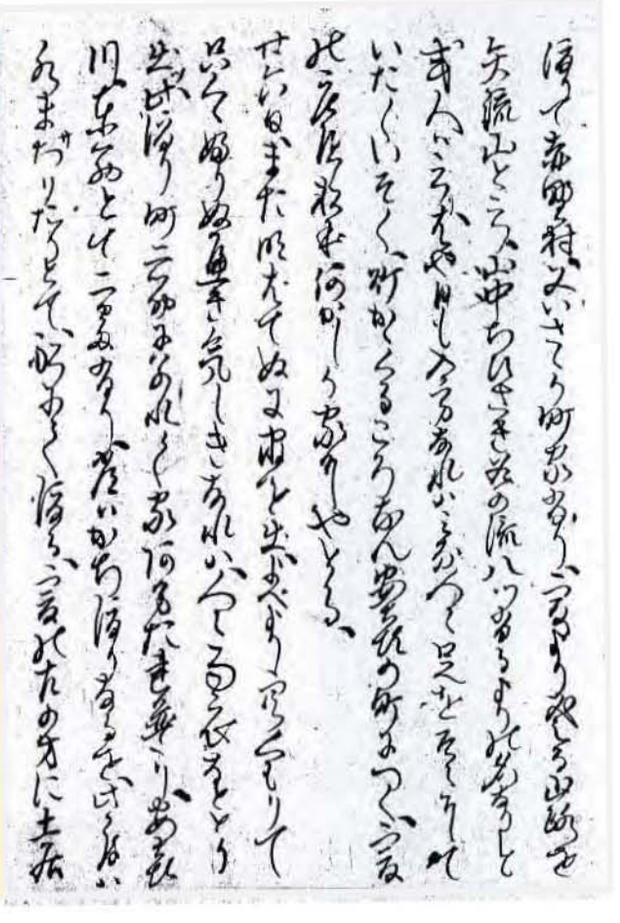


此み会式八三月十七日と云。珍らしき地と云にふりはへても詣へきを、此度はよき序なれバとそゝのかせと、登らんと云人もなし。夜須町家とも並たり。やす川、板橋を渡る。此はしは古き文にも見へてやすの七いたはしと云。手結浦、又いさゝか町有り。爰の湊は昔しかの御国にいさほ有し野中主のほらせたると云。其ほとはやゝ深くて船の出入も安かりしを、いつとなくあせまさりて、今はつり船ならては入かたしと云。てい山越。坂路けはしきにはあらねと、一里余りと云に心うみつ。女夫岩（メウト）と云はこゝの磯わに立り。



くしろつく　手ゆいの浦になみ立る
　　妹背の岩ほ見れはともしも。

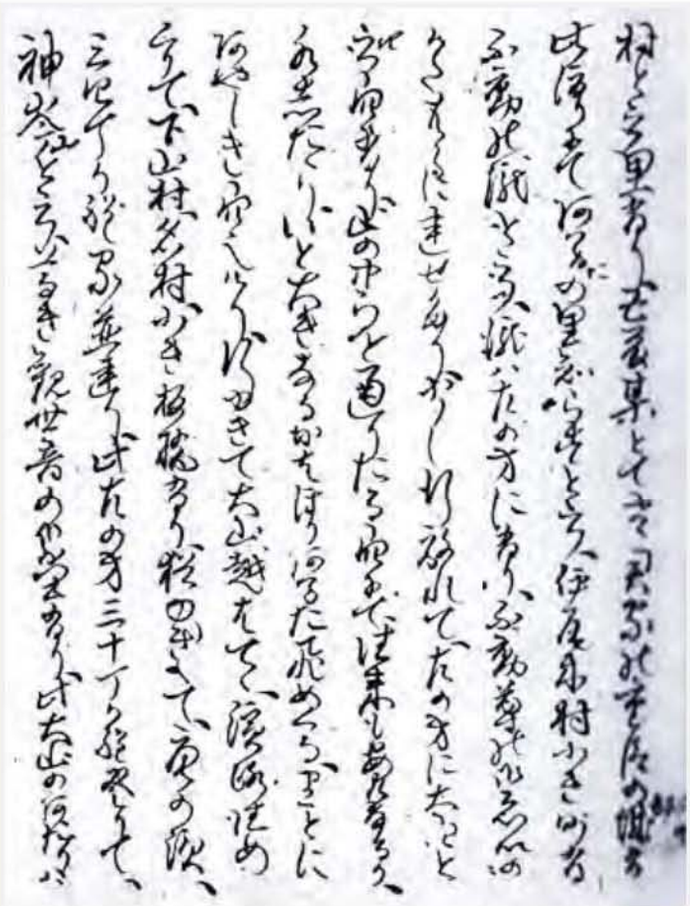
坂の中らに三軒家と云地有り。昔しは海士の家の、只三軒有りつるより、しか云ならひたりと云。今は海士もかすまして、物うる家さえ道のかたへに立り。越はて、又浜に出。松あまた生たり。馳をりと云。和食の郷の小村也。名に負砂道也。土左日記に、宇田の松原と云はこゝ也とも云。又、或人岸本の松原を云ともいふ。其の北の里に、兎田（ウサイク）と云あり。兎田ハう田也。古　其渡り並て宇田の里と云しにやと。実にさも有なんかし。和食の駅、きし本より二里。さて同し松原をゝ行て、左に折つゝ川



渡りて赤野村、又いさゝか町家有り。爰より登る山路を矢流山と云。山中ちひさき谷の流八つ有るよりの名なりと或人は云り。はや日も入方なれは、み

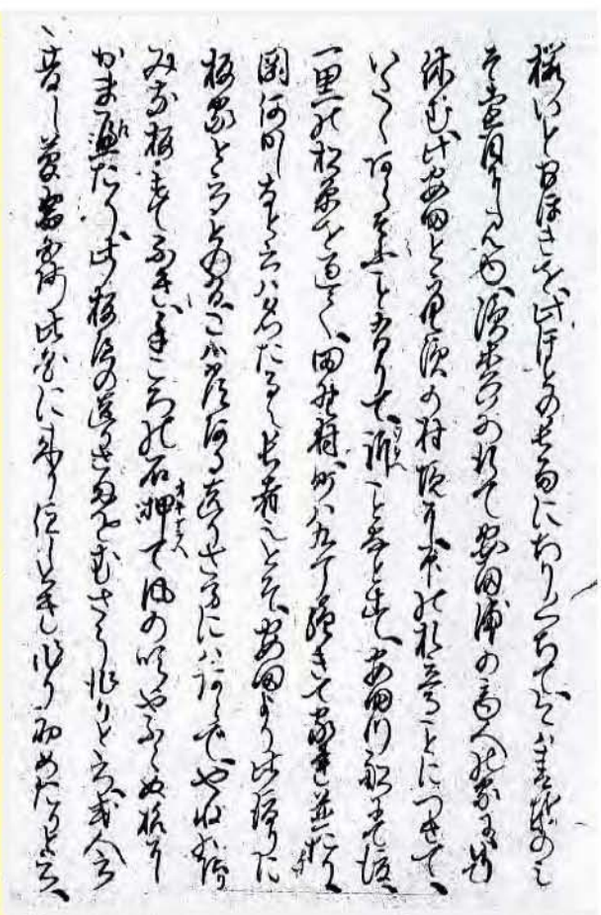
な人々足をそらにていたくいそく。灯かゝくるころなん安喜の町につく。爰の庄屋松本何かしか家にやとる。

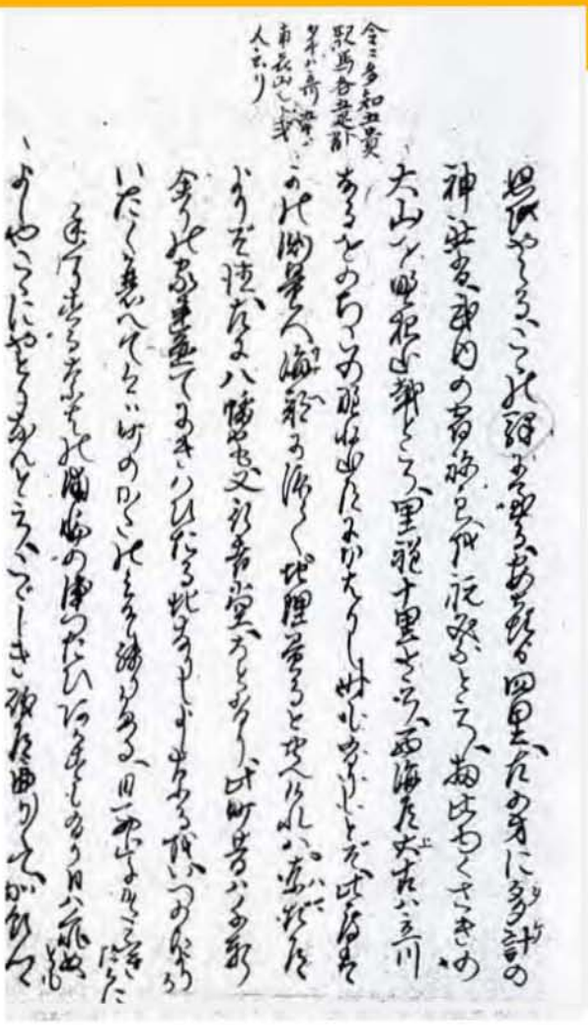
廿六日、また明はてぬに宿を出。よべより空くもりて只今ふりぬへき気しきなれは、人々雨衣なととり出つ。此渡り町二筋に別れて家あまた建並たり。安喜川、東西とて二処有り。常はかち渡りなるを、此度は水まさりたりとて、船にて渡る。爰の左の方に土居



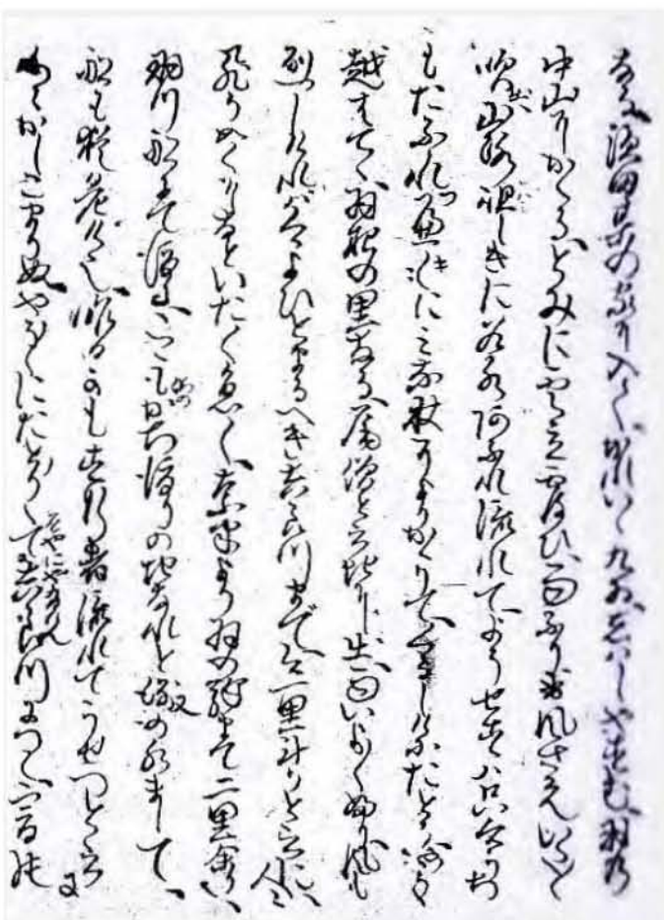
村と云里有り。五藤某とて吾君家の重臣の都城（ドキ）有。此渡りにてあまたの里如らすと云。伊尾木村小き町有。不動の滝は左の方に有り。不動尊の御ゑいかたはらに建せたり。少し行放れて、左の方に大穴と云穴有り。山の中らを通りたる穴にて、往来も安けなるか、水したり、いと大きなるかはほりあまた飛めくる。まことにあやしき穴也けり。行ゆきて大山越はて、浜路往めくりて、下山村、名村、小き板橋有り。猶ゆきて、唐の浜、三四丁か程家並建り。此左の方三十丁か程登りて、神岑山と云。尊き観世音の御堂有り。此大山のあたりハ、

桜いとおほきを、此ほとの長雨にちりくちて、今は青葉のみそ遠目に見ゆ。浜松別行て安田浦の商人の家にいりて休む。此安田と唐浜の村境に、印の札立ることにつきて、いたくあらそふこと有りて、訴（ウタヘ）ことなとす。安田川船にて渡。一里の松原を過て、田野村、町八九丁続きて家建並たり。岡何かしなと云は名だたる長者也とそ。安田より此渡りに板家と云もの有。こは常ある造りさまにはあらで、やねの限りみな板もてふき、手ころの石押て風の吹やふらぬ様にかまえたり。此板屋の造りさまをむさう作りと云。或人云、昔し夢窓国師此国に来り住しとき作り初めたりど云。





国師吸江に住せたれは、そこにも其作りさま有り。今は一二軒のこれり。左も有なんかし。此板屋も年々にやみて今はかくまれにのこりたり。何事も昔しの風俗のうつりゆきて、今様にのみなりもて行ぞ、あかず口惜しと例の古しのふ癖にて人々なけく。此町を過て逆しき大川有り。奈半利川と云。当國第一の荒川他。船にて渡る。奈半利村、土佐日記に奈はの泊りと書る処也かし。大船はつる計の湊昔しは有けん、近き年比此川下（シモ）びせん堀りと云地の大堤崩れたりしを、此度物せる俊村きつき修めしころ、いと深うほれて、千石つみの廻船こぎ入て泊りし其備前堀と云名さえ付たるも、昔しの水駅なと



思ひやらる。この駅に至る。安喜より四里。左の方に多計（タケ）の神杜有。武内の宿祢主な祝祭と云。扱此ゆくさきの大山を野根山越と云。里程十里。西海道上古は立川なるを、のちこの野ね山道にかはりしとぞ。

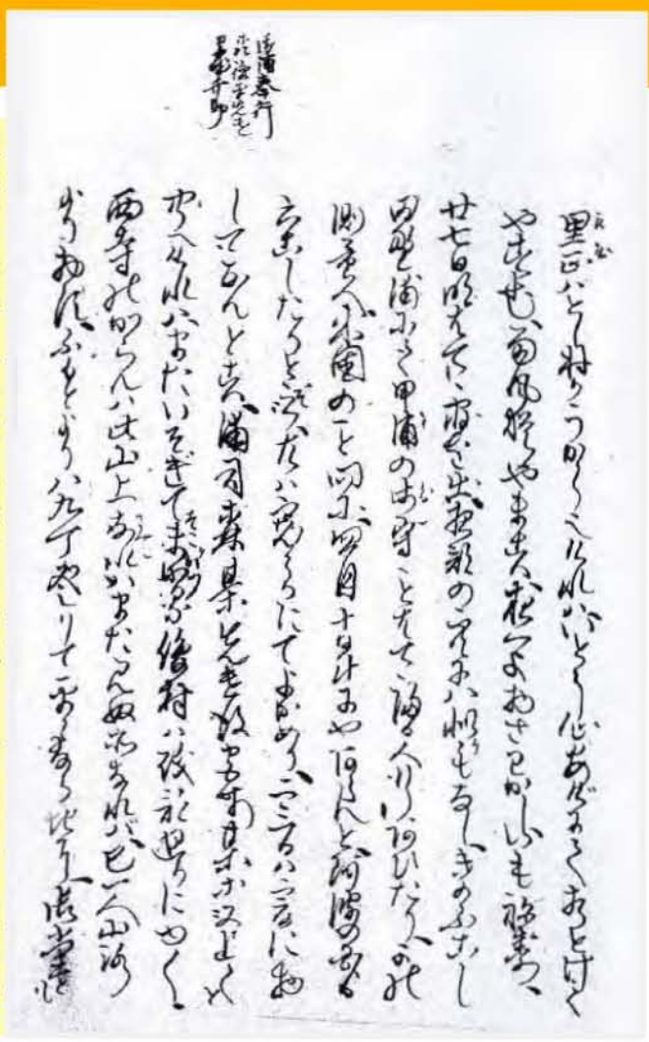
＊頭注「令二多知五貴駅各五疋ト有。タチハ立川、五キハ甫喜山也と或人云り。」

此度はかの測量人海部（ウナヘ）に添て、地理量ると聞へけれは、はま道よりぞ往。左に八幡宮、又行者堂なと有り。此町昔は千軒余りの家建並てにきはひたる地なりしよしなるを、いつの比よりかいたく衰へて、今は町のかたのみぞ残りたる。日西山にかたふきたるに

手くりする　なはの浦輪の　浦つたひ
　　あかすも有か　日はくれぬとも。

よしやこゝにやとりなんと云。こゝしき磯道曲りくて、加領郷

なる、浜田某の家に人て、かれい、くゐ、しはしやすむ。羽の中山にかゝる。とみに雲立覆ひ、雨ふり、風ざえいたく吹出、山路阻しきに谷水あふれ流れて、ようせすは只今うちもたふれつへきに、みな杖によりかゝりてくるしけにたとる。やうゝ越はてゝ、羽根の里なる尾僧と云地に出。雨いよゝふり、風も烈しければ今よふひとまるへき吉良川まで、今一里計りと云に、人々飛が如くになといたく急く。奈半より羽の駅まて二里余り也。羽川船にて渡る。こゝも例のかち渡りの地なれと例の水まして、船も猶危け也。昨日かも、ず行者流れてうせつと云に人々かしこまりぬ。やうゝにたとりゝてそやにや有けん、吉良川につく。爰の



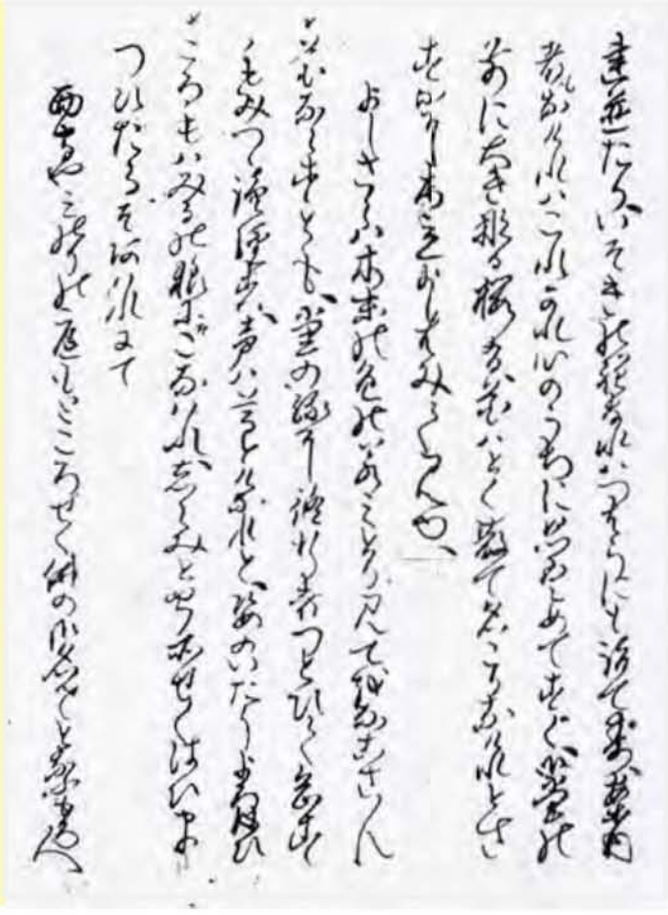
里正はとし村かうから也けれは、いとう心安げにて打とけてやすむ。雨風猶やます、夜一よ物さわかし、いもねず。

廿七日、明はて、宿を出。夜部の空には似けもなし。きのふこし田野浦にて、甲浦の崎守ことはてて、帰る人行あひたり。かの測量人来国のこと問に、四月十日計にやあらんと阿波の国より云こしたりとぞ。左は寛やかにてよかめり。

二三日は爰に物してなんとす。浦司森某先遣役官崎某等

＊**頭柱**「御浦奉行森俊平、先遣宮崎竹助」

追々と聞へけれは、またいそぎてそこをいつ。俊村は磯部廻りにゆく。西寺のからんは、此山上にてまた見ぬ所なれば、己一人山路より物す。ふもとより八九丁登りて平らなる地に御堂とも

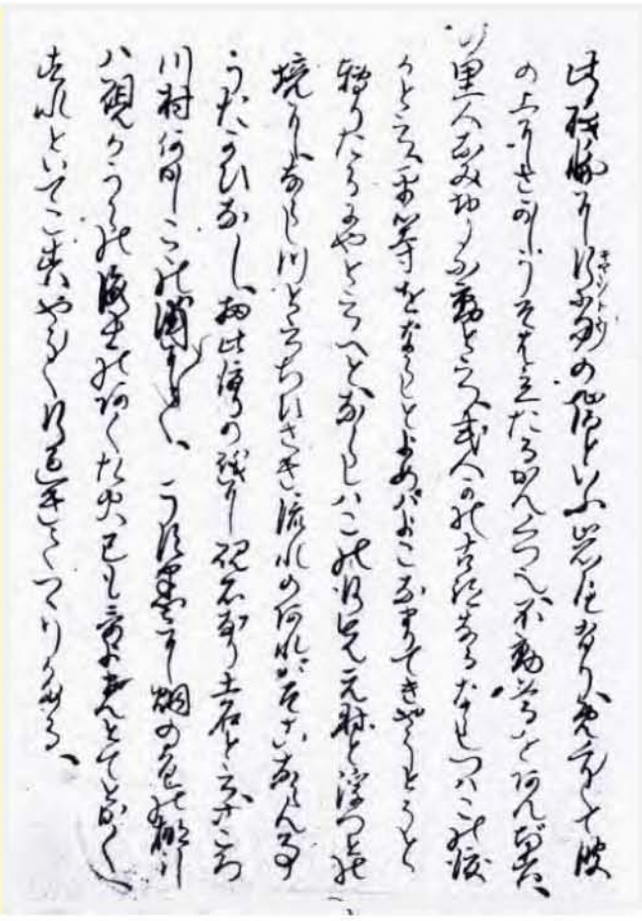


建並たり。いそきの程なれはつはらにも詣てず。案内者もなけれは、これかれ心のうちに思定めてすぐ。御堂の前に大きなる桜有。花はとく散て名こりなけれと、さすかに木立よしはみて見ゆ。

よしさらは　木末の色の　若みとり
見てをなごさん　花ならすとも。

堂の縁に修行者つとひて念すもみつゝ読経す。声は尊とけなれと、姿のいたうよろほひころもはみるの様にそこなはれ、しらみと虫所せくはひまつひたるそあはれにて

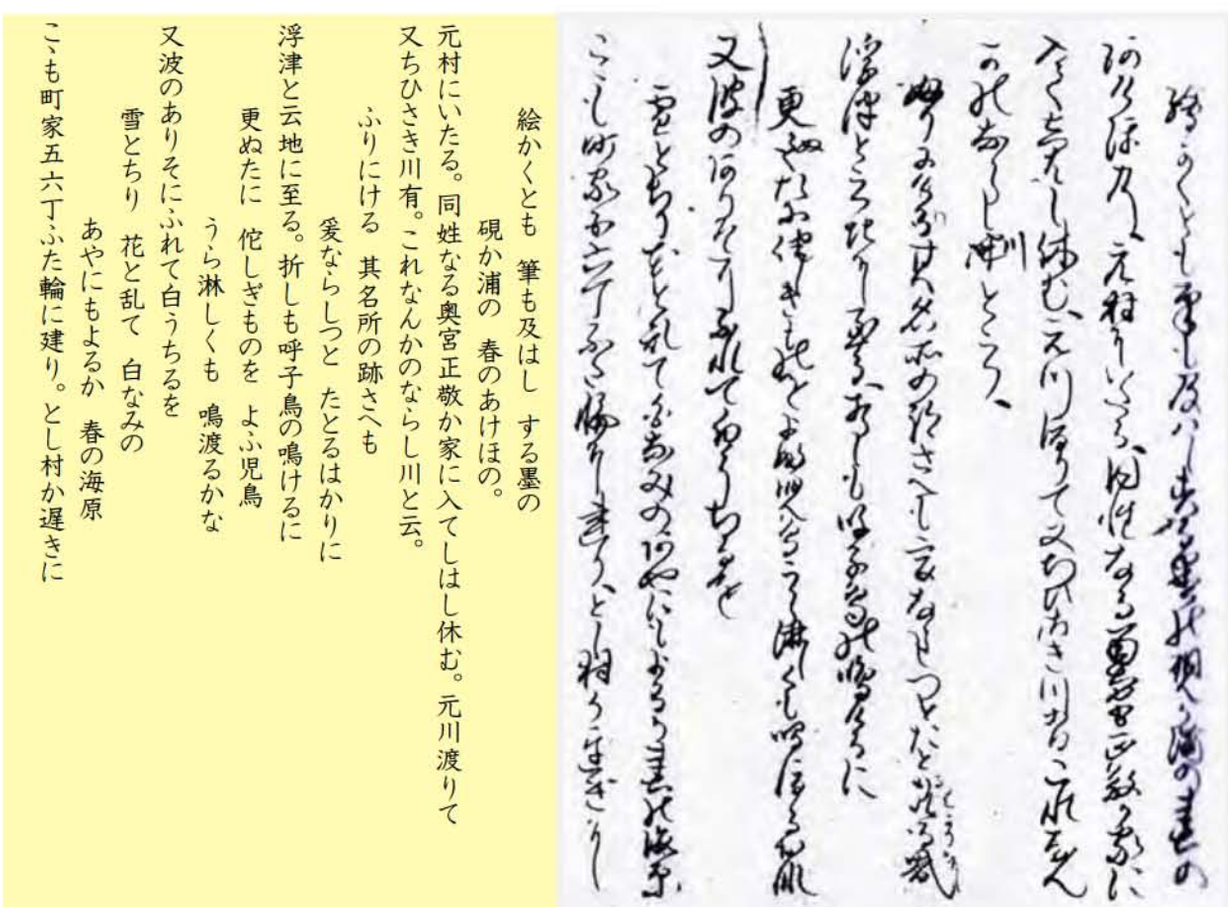
西寺や　みのりの庭も　ところせく
仏の御名を　となふもろ人



此磯輪に行（ケヤウトウ）当の端といふ岩屋有り。めくりゝて波の上にさかしうそは立たるかんくつ也。不動尊あんぢす。里人なみ切り不動と云。或人かの古跡なるならしつはこの渡かと云。平等をならしとよめばよこなまりてきやうとうと訛りたるにやと云へと、ならしはこの行先元村と浮つとの墳に、ならし川と云ちひさき流れのあればそこならん事うたがひなし。扱此渡りの磯に硯石有り土石と云。中ころ川村何かしこの浦にて、

うす墨に　烟の色の棚引は
　硯かうらの　海士のあくた火。

己も歌よまんとてとかくすれといてこす。やうゝ行過ぎてつくりたる。



絵かくとも　筆も及はし　する墨の
　硯か浦の　春のあけほの。

元村にいたる。同姓なる奥宮正敬か家に入てしはし休む。元川渡りて又ちひさき川有。これなんかのならし川と云。

ふりにける　其名所の跡さへも
　爰ならしつと　たとるはかりに

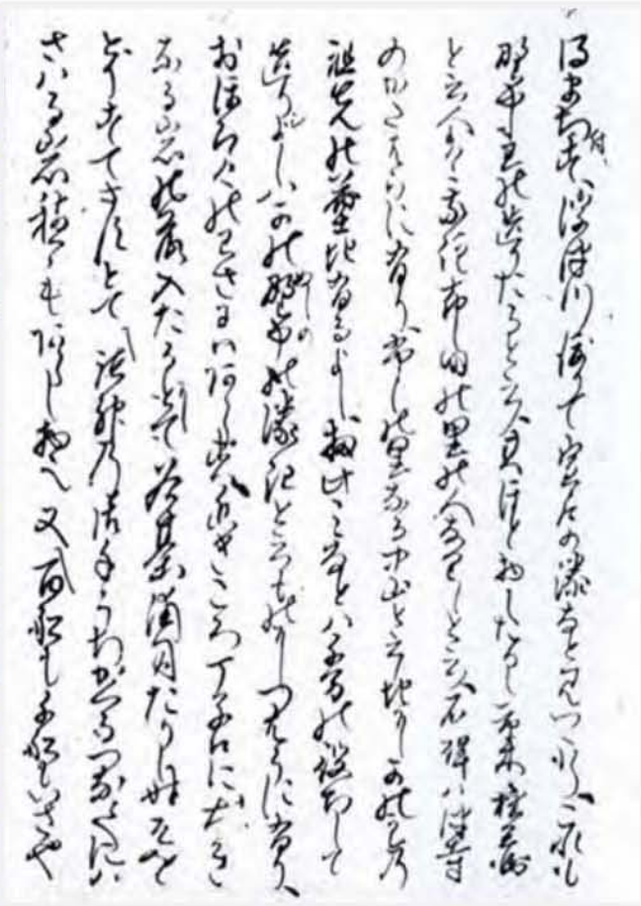
浮津と云地に至る。折しも呼子鳥の鳴けるに

更ぬたに　佗しぎものを　よふ児鳥
　うら淋しくも　鳴渡るかな

又波のありそにふれて白うちるを

雪とちり　花と乱て　白なみの
　あやにもよるか　春の海原

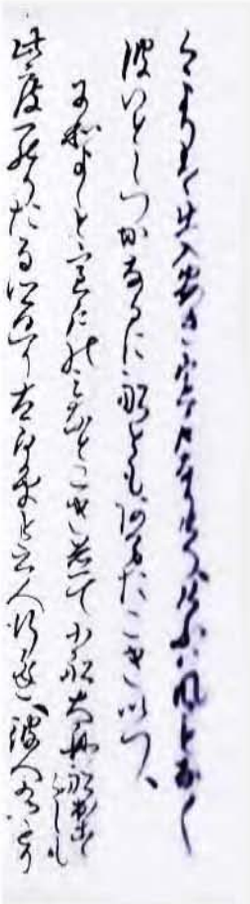
こゝも町家五六丁ふた輪に建り。とし村か遅きに

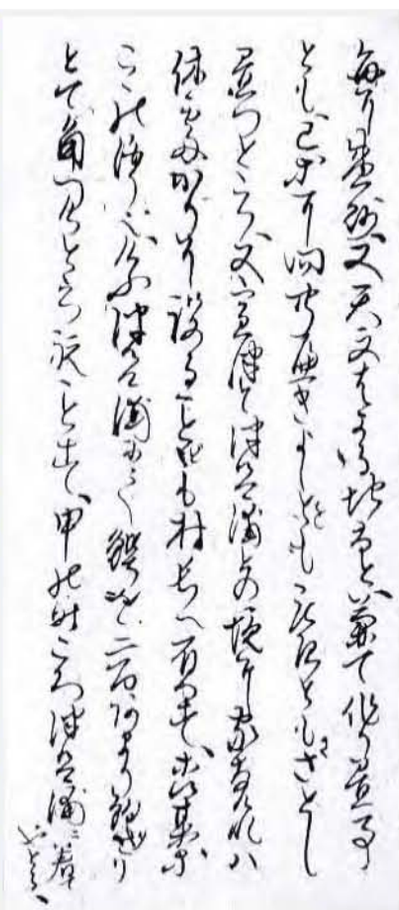


得まち付す、浮津川渡りで室戸の湊なと見つ、行。これも野中主の造りたると云。其ほと物したりし市木権兵衛と云人は我住布し田の里の人なりしと云。石碑は津寺のかたはらに有り。布しの里なる中山と云地にかの主の祖先の墓地有るよし。扱此みなとは千万の役ちして造りしよし、かのぬしの湊記と云ものにつはらに有り。おほろけのわさにはあらず。近きころ丁字口に大きなる岩の落人たるに谷某浦司たりし時そをとりすてさすとて

諸神の御手うちかくる　つなてには
さはる岩穂も　あらし物也。

又「百船も千船もいさや

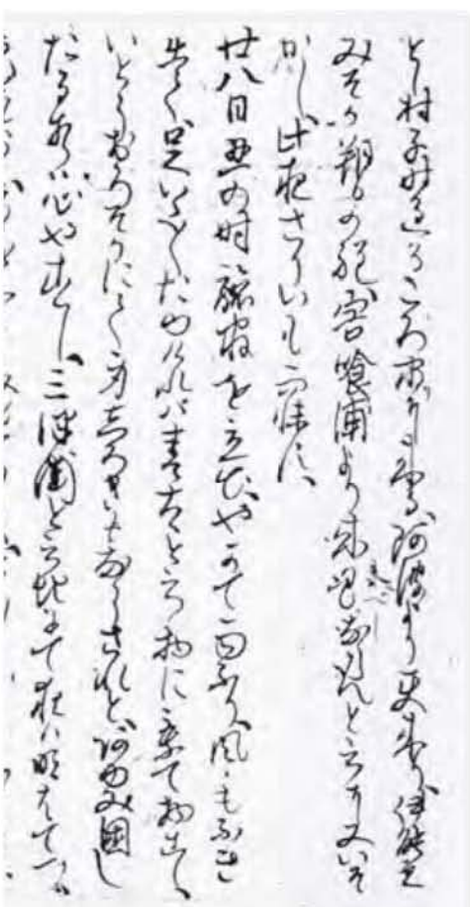


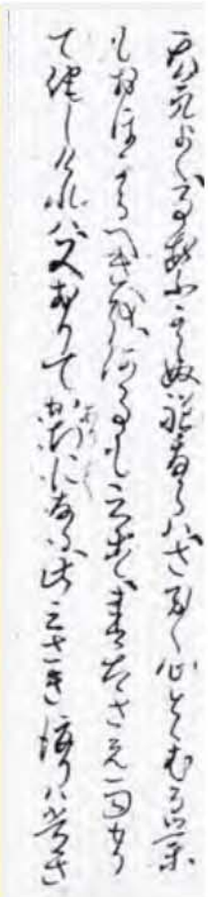


今よりは出人安き室戸なりけり。けふは風もなく波いとしつかなるに船ともあまたこきいつ。

にわよしと　室戸のみなと　こき並て
小船大舟　船出すらしも。

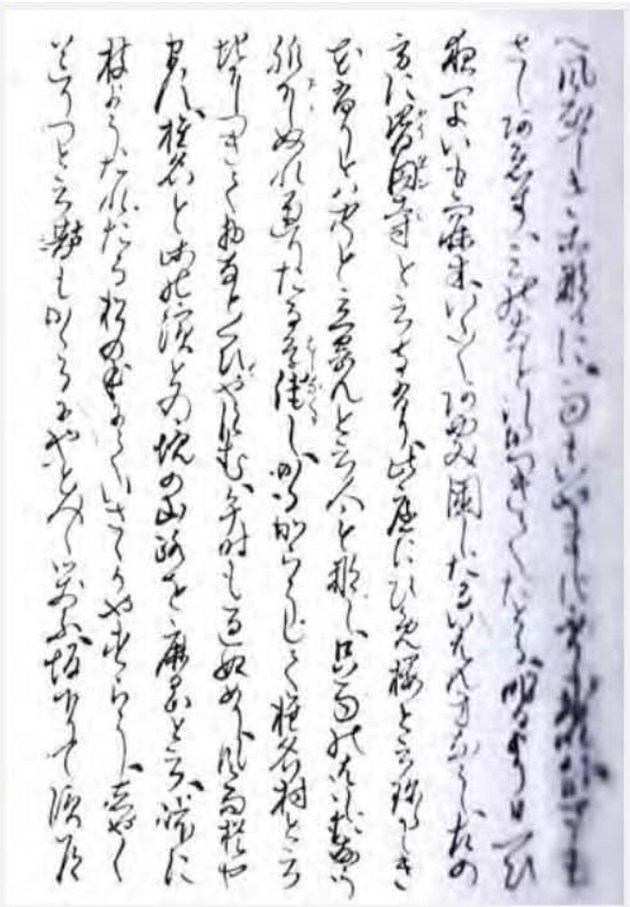
此度罷りたる郷廻り太郎平と云人行逢。彼人のやとり毎に盛砂、又天文はかる地なと兼て作り置事とも己等に問聞べきよしを庄屋ともにさとし置つと云。又室津と津呂浦との境に家なけれは休処かりに設ることども村長へ負す。森某等この泊り也。けふ津呂浦にて鰹二百あまり釣たりとて角つけと云祝ことす。申の時ころ津呂浦に着てやとる。



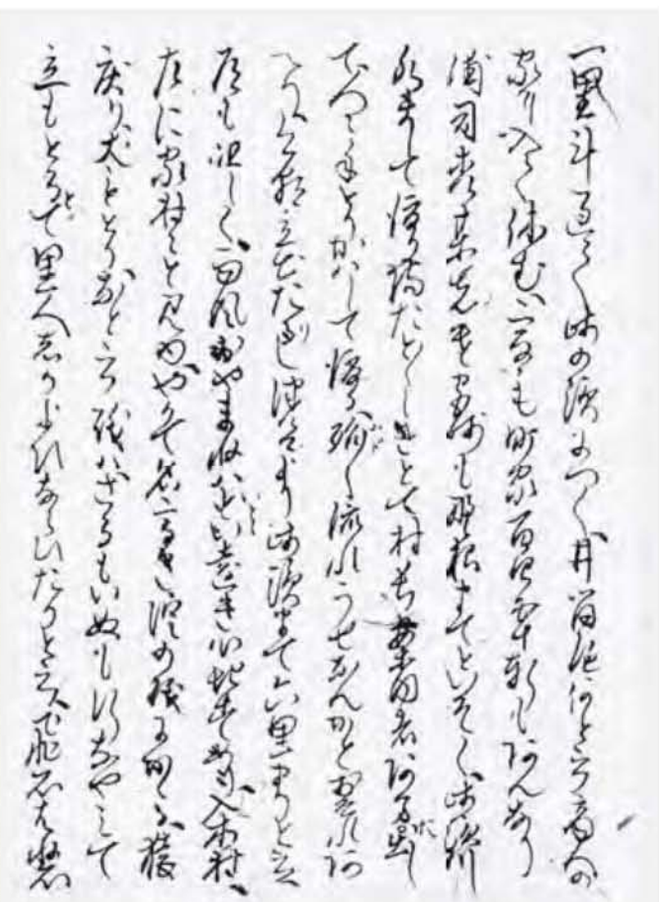


とし村、子時過るころ宿りに来る。阿彼より使来り、伊能主みそか朔日の程、宍喰浦より来るべしと云に又いそかし。此夜さりいも寝ず。

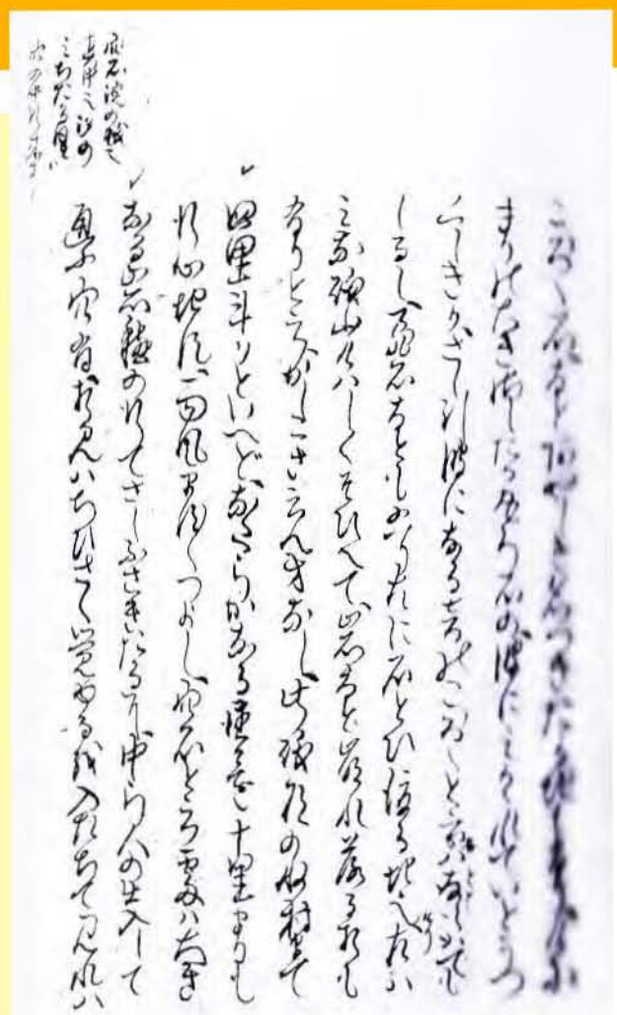
廿八日、丑の時宿を立出。やかて雨ふり、風もふき出て、足いたくたゆければ青太と云物に乗りて物す。いとうおろそかにて身しろきもならされと、あゆみ困したる折は心やすし。三津浦と云地にて夜は明はてつ。天気よく、事繁からぬ程ならは、さま〻心とむる業もおほかるへきを、何事も云ず、青太さえ雨もりて佗しけれは、又おりてかちになる。此みさき渡りは常さ



へ風烈しき所なるに、雨もいやましにふり来れは、かさもさしあゑず、みのなと引かつきてたとる。昨日より日一ひ夜一よいも寝す。いたくあゆみ困したるいはん方なし。左の方に皆円寺と云寺有り。此庭にひめ桜と云珍らしき花有りとは聞と、立寄んと云人もなし。只雨の肌かにぬれ通りたるそはしなく侘し。からうじて椎名村と云地につきて物なとくひてやすむ。午時も過ぎぬめり。風雨猶やます。椎名と崎の浜との境の山路を鹿岡と云。峠に枝ようたれたる松の本にていさかやすらう。しやく送りつと云。古もかるにやと人々笑ふ。坂下りて浜道



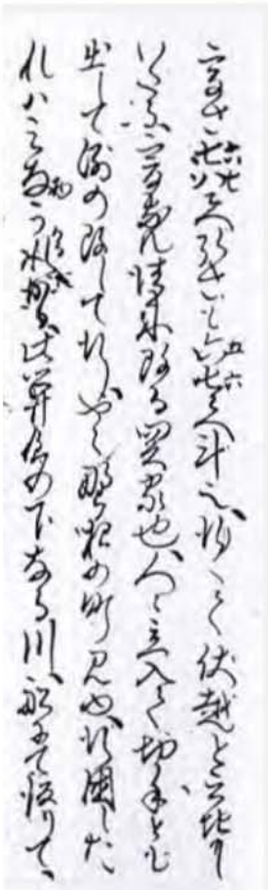
一里計過て崎の浜につく。井筒屋何と云商人の家に入て休む。爰も町家百四五十軒もあんなり。浦司森某先遣宮崎も野根までといそく。崎浜川水まして渡り場たとゝしとて、村長安内者あまた出して、人々手とりかはして渡る、殆ゝ流れうせなんかとおそれあへり。今朝立出たりし津呂より崎浜まて六里まりと云。道も岨しく、雨風やまねはいと遠き心地す。入木村、左に家村々と見ゆ。やかて名高き淀の磯にかゝる。猿戻り、犬もとりなと云磯は、さるもいぬも行なやみて立もとるとて、里人しかよひならひたりと云。飛石はね石

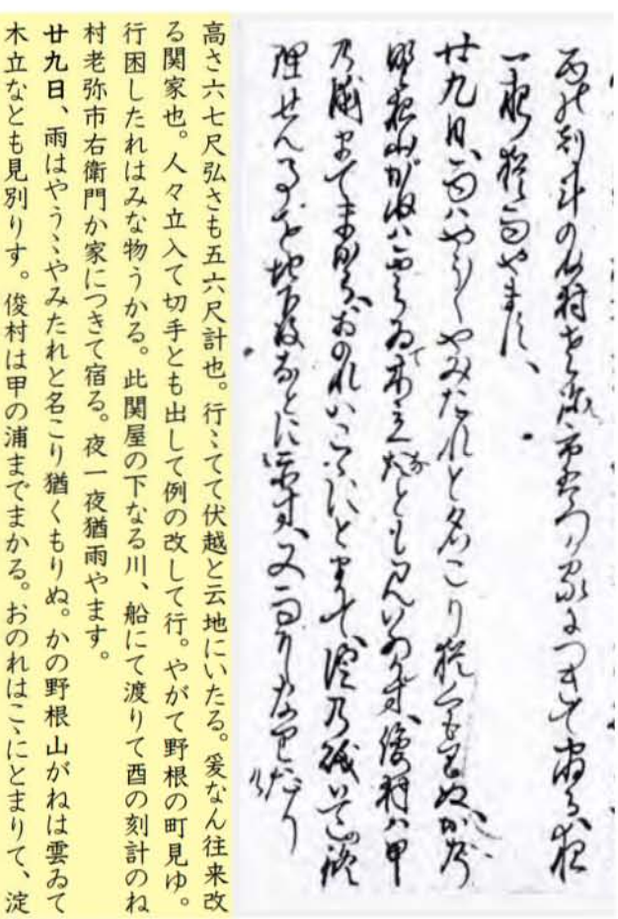


ころ〻石などあやしき名つきたる地も有り。けにまりの大きさしたる丸ろ石の、波にみかゝれていとうつくしきか、さし引波になる音のころ〻と云名はとはでもしるし。飛石なとも右り左に石とひ渡る地也けり。左はみな磯山けはしくそひへて、岩なと朋れ落る折も有りと云。かしこさ云ん方なし。此磯道のね村まて四里計りといへど、なたらかなる往還十里まりも行心地す。雨風ますゝつよし。穴石と云処は

頭注「穴石、淀の磯之真中也。汐のみちたるほとは穴の中行来す。」

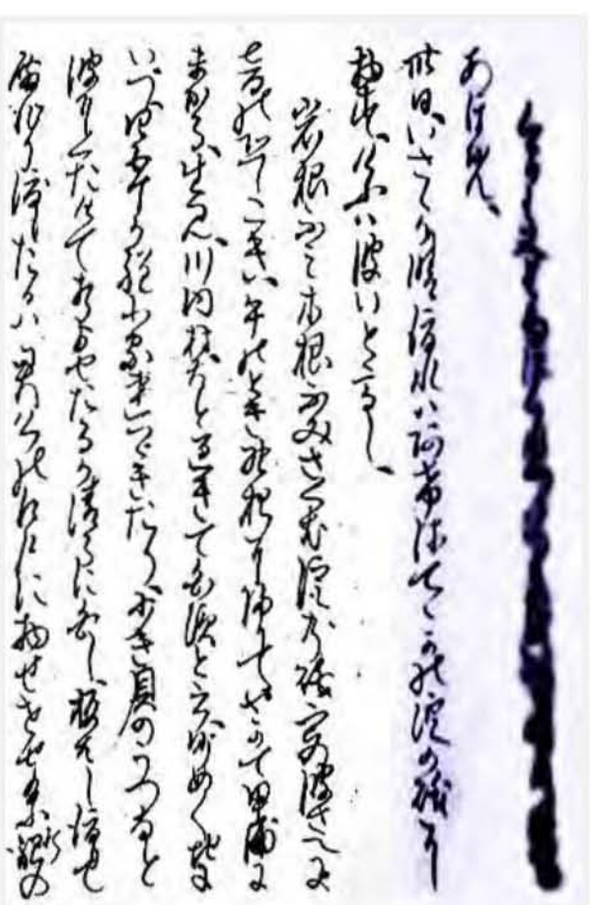
大きなる岩穂の行てさしふさきたるに、中ら人の出入して通ふ穴有。打見はちひさく覚ゆるを、入たちて見れハ、



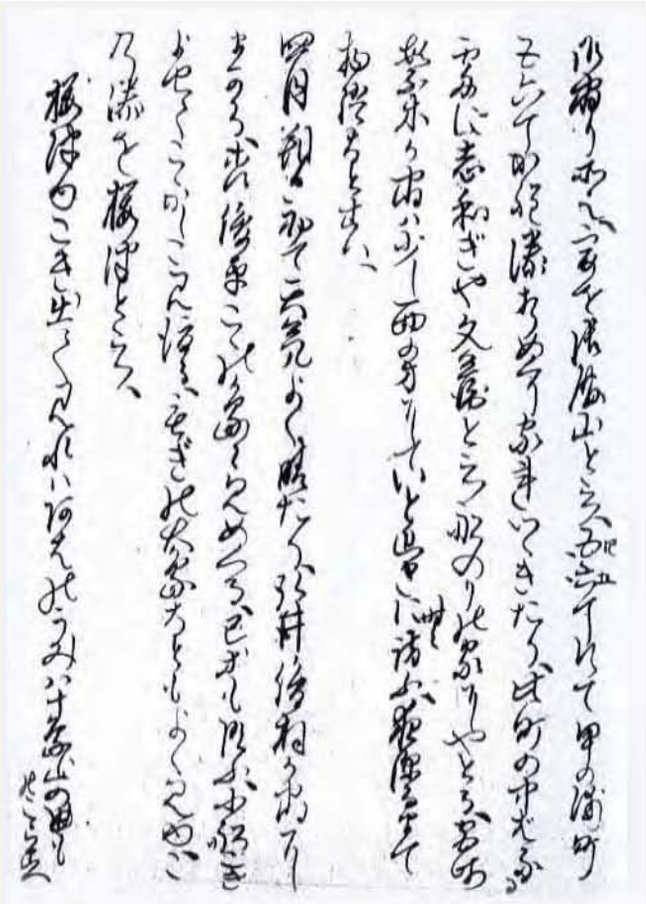


高さ六七尺弘さも五六尺計也。行〻て伏越と云地にいたる。爰なん往来改る関家也。人々立入て切手とも出して例の改して行。やがて野根の町見ゆ。行困したれはみな物うかる。此関屋の下なる川、船にて渡りて酉の刻計のね村老弥市右衛門か家につきて宿る。夜一夜猶雨やます。

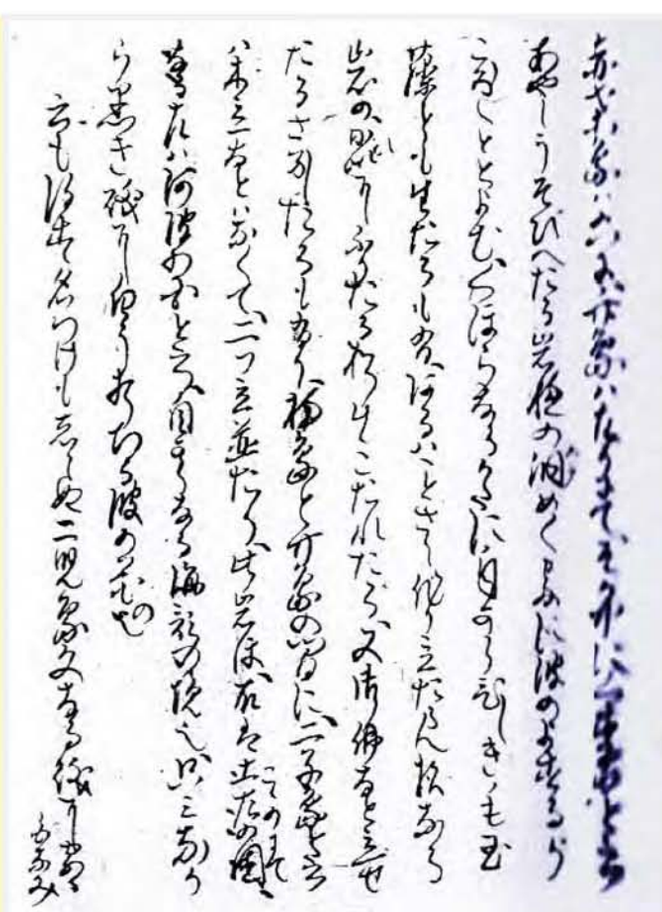
廿九日、雨はやう〻やみたれと名こり猶くもりぬ。かの野根山がねは雲ゐて木立なとも見別りす。俊村は甲の浦までまかる。おのれはこゝにとまりて、淀の磯道の修理せん事を地下役なとに示す。又雨になりけり。



今日も又　長雨にくれつ　いつはたの
いつか晴行　御空あほかん。
廿日、いさゝか晴渡れはあけはてゝかの淀の磯に物す。けふは波いと高し。
岩根ふみ　木根ふみさくむ　淀の磯
寄波さへに　音の恐しこき。
午のとき野根に帰りて、やかて甲浦にまかる。生見、川内村なと過きて白浜と云町めく地にいづ。四五丁か程小家建つづきたり。少き貝のうつなと波にくたけて打よせたるか清らに白し。板はし渡りて殿作り渡りたるは、君公の江戸に物せさせ給ふ折の



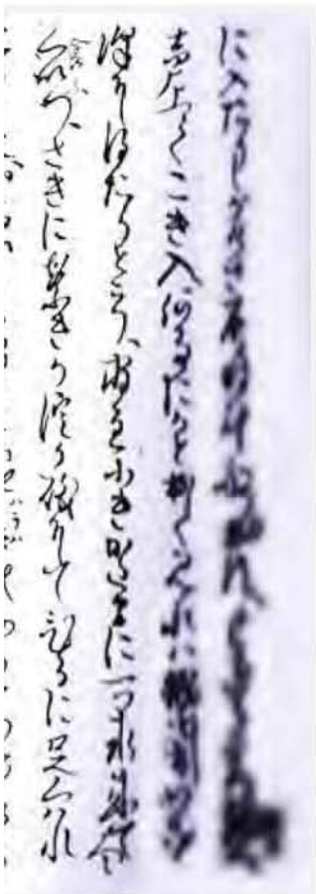
御宿り所也。爰を御殿山と云。四五丁行て甲の浦町五六丁か程湊打めくり家建つきたり。此町の中ばなる処に志和ぎや文兵衛と云船のりの家にやとる。宮崎繁木の宿は少し西の方にていと近きに時々訪ふ。夜深るまて物語なとす。四月朔白、初て天気よく晴たり。俊村か宿にまかる。森俊平この島々見めくる。己等も随ふ。小船こきよせてこゝかしこ見渡る。むぎの大島なともよく見ゆ。この港を桜津と云。
桜津ゆ　こき出て見れは　あはのうみ
八十島山の　曲ものこらす

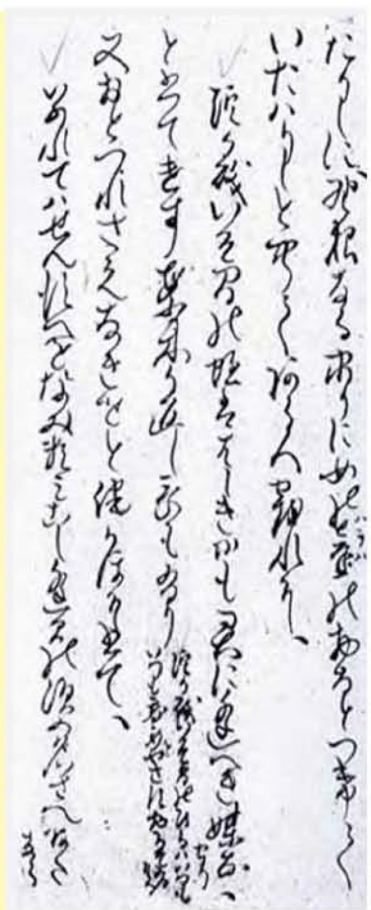


赤葉島は右に、竹島は左にて、そが中にくす島と云あやしうそびへたる岩穂の洞めく処に波のよするがころ〻ととよむ。くほらなるかたに自からひしきも玉藻とも生たるも有。あるはことさら作り立たらん様なる岩のかひにふりたる松生こたれたる、又御仏なと立せたるさましたるも有り。楠島と竹島の間に、二子島と云は木立なとはなくて、二つ立並たり。此岩ほ、右は土佐の国にて、左は阿波め国と云。自からなる海部の境也。只みなから黒き磯に白う打ちる波の花の
云も得す　名つけもしらぬ　二児島
文なる磯に　寄る白なみ

楠島の磯間に船さし寄せて、みなおり立て、木の根をよぢ、岩をふみつ、案内者につきて登る。平らなる地五六丈計なるに灯明堂有り。沖こく船の波風あらき夜、よらん方なくたゝよひまとうに、此灯明の光見付てよする便りとてなん。この堂は湊の口にいつこも置事とそ。古書などにかのしらぬひの筑紫なと云もこの灯明堂のらん傷ならんかし。さて曲々見廻りて申過るころ己かさまゝ宿に帰りつく。夜さり阿波国より文もて来り。かの測量人は九日十日計経て入来と云。

二日、空いと晴れ渡る。さいつ比より関船二艘この港





に入たりしが、けさ辰時計船出す。已過るころ海士声上てこき入。何事にかと出て見れは鰯沢に得たりと云。宿主小きかたまに一つ求来て人々食ふ。さきに繁きか淀か磯にてひるに足くはれたりしに、野根なる宿りに女の童の物なとつけていたはりしと聞て、ある人戯れに

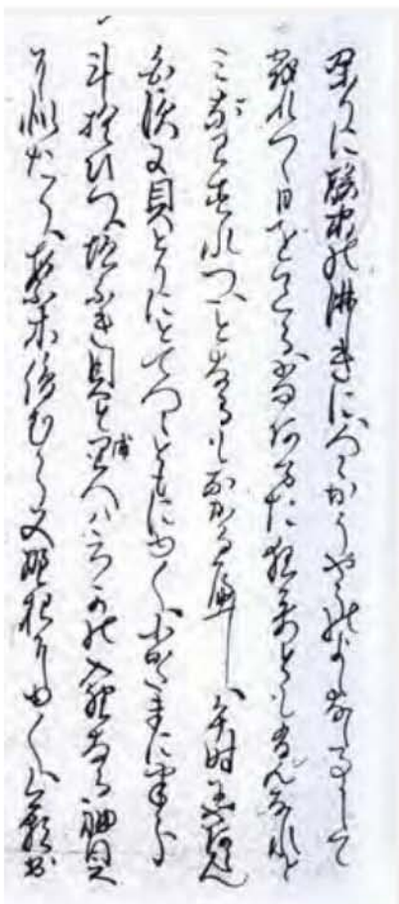
淀か磯　いそ間の蛭は　はしきかも
　君に逢へき　謀なせり

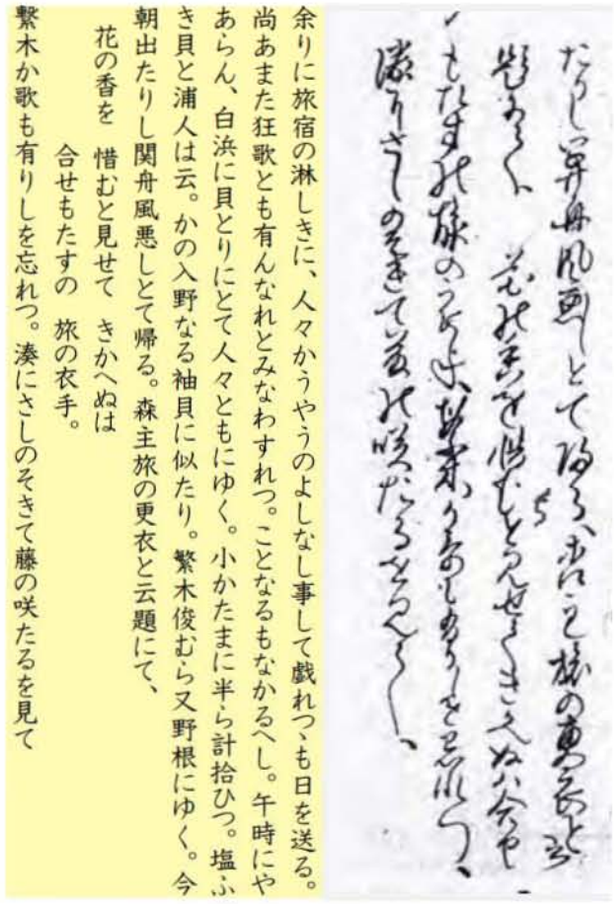
と書で遺す。繁木か返し歌も有り

淀か磯　いそ間のひるは　いつもいつも
　我身をやさす　物にそ有りける

又おとつれさえなきをと侘かほに書て、

別れては　せんすへをなみ　頼みこし
　逢間の浜の　名さへあたなる。

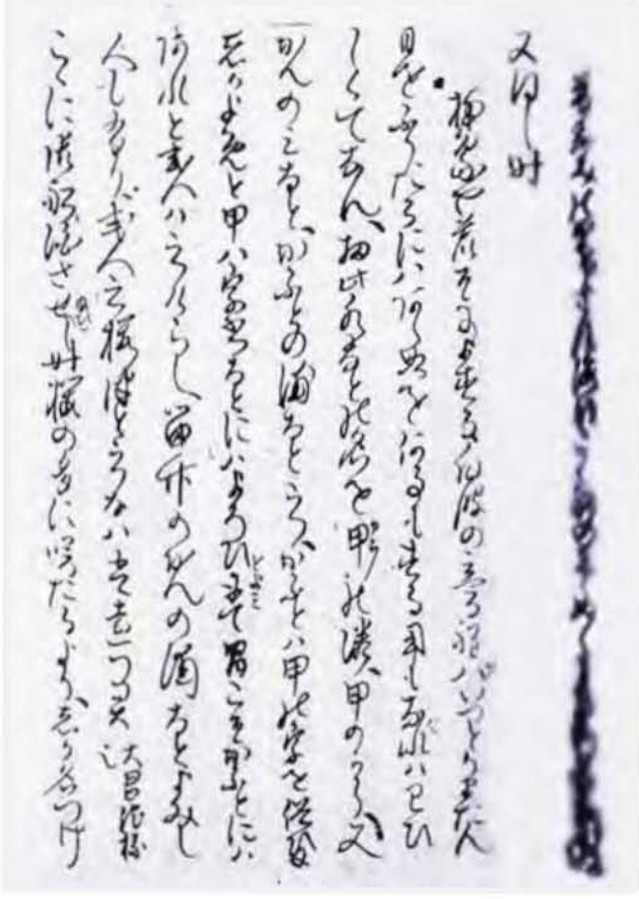




余りに旅宿の淋しきに、人々かうやうのよしなし事して戯れつゝも日を送る。尚あまた狂歌とも有んなれとみなわすれつ。ことなるもなかるへし。午時にやあらん、白浜に貝とりにとて人々ともにゆく。小かたまに半ら計拾ひつ。塩ふき貝と浦人は云。かの入野なる袖貝に似たり。繁木俊むら又野根にゆく。今朝出たりし関舟風悪しとて帰る。森主旅の更衣と云題にて、

花の香を　惜むと見せて　きかへぬは
　　合せもたすの　旅の衣手。

繁木か歌も有りしを忘れつ。湊にさしのそきて藤の咲たるを見て

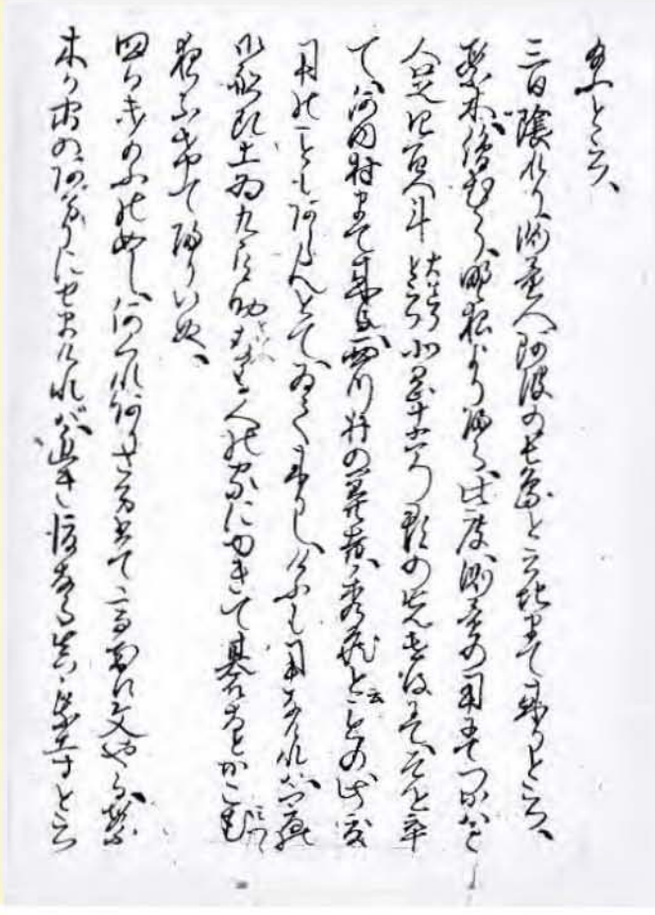


藤なみの　かけさす海部こく船の
　　しゝぬく真かち　花な乱りそ。

又同し時

楠島や　荒そによする　白波の
　　立かへる程を　いつとかまたん

日を経りたるにはあらぬを何事もする用もなげれはわひしくてなん。扨此水などの名を甲の湊、甲のうら、又かんのみなと、かふとの浦なと云。かふとは甲の宇を俗ひにしかよめと、甲は宇書なとにはよろひとよみて冑こそかふとにはあれと或人は云けらし。笛竹のかんの浦なとよみし人も有り。或人云、桜津と云なは吾遠つ君大乗院様也ここに御船泊させ給し時桜の多に咲たるより、しか名つけ



給ふと云。

三日、陰れり。測量人阿波の長島と云地まで来りと云。繁木俊むら、野根よ

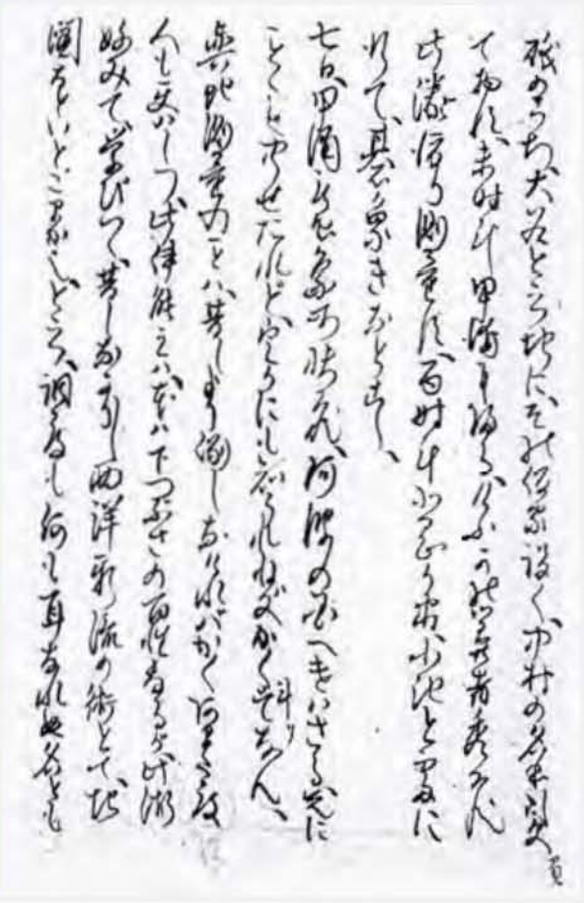
り帰る。此度測量の用にてつかはる、人足四百人計（大送りと云。）北岡十右衛門郡の先遣役にて、そを卒て河内村まで来也。西川村の算者、秀蔵と云もの、此度用のこともあらんとて、ゐて来りし。けふも用なければ、爰の御船頭土ゐ九郎助どいふ人の家にゆきて碁なとかこみつゝ夜ふけて帰りぬ。

四日、きのふの如し。何くれありさま書きて高知え文やる。繁木か宿のあまりにせまければ、近き渡なる真乗寺と云

寺にうつる。ひる間雨又ふりく。己宿の主、阿波の国につかはす。此度の事ども こまかに聞て帰れと示す。

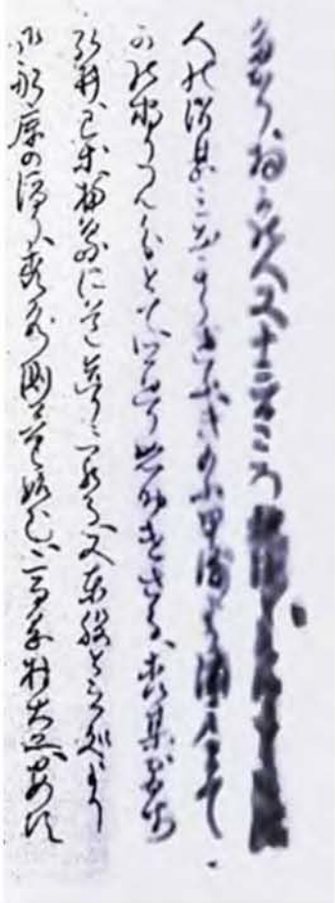
五日、関船又船発す。けふも何事もなし。夕方繁木か宿に行て、物語なとす。とし村下代宗蔵、久武相模、浦廻り用八、郷廻り宅八等也。爰の浦にて松魚始て三十計つる。主僧は真宗にてそうしんもせねば、此魚なんやきつくりて、あるじす。酒はこよりかいて、みな人々いたく酔てかへる。久武相かみは神母の社の神主也。神世の正言と云書かりて読。

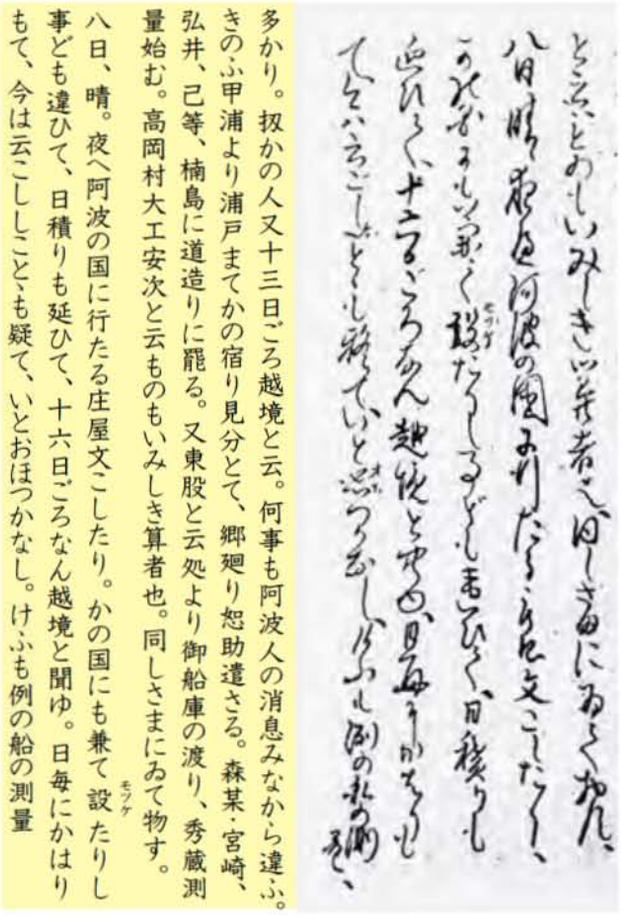
六日、空晴たり。けふは野根なる淀か磯の仮家見に物す。



磯のうち、大谷と云地に、その仮家設く。中村の名本引受負て物す。未時計甲浦に帰る。けふかの算者秀蔵此湊渡り測量す。酉時計北岡か宿、小池と云う処に行て、碁象きなとす。

七日、甲浦庄屋島崎快蔵、阿波の固へ遣はさる。先にことゝも聞せたれど、定かにも知られねは又かく計りてなん。輿地測量のことは、昔しより例しなければかくあまた度人も使はしつ。此伊能主は、本は下つぶさの百姓なるが、此術好みて学びつ、昔しなかりし西洋新流の術とて、地図などいとこまかも也と云。調度も何も耳なれぬ名とも





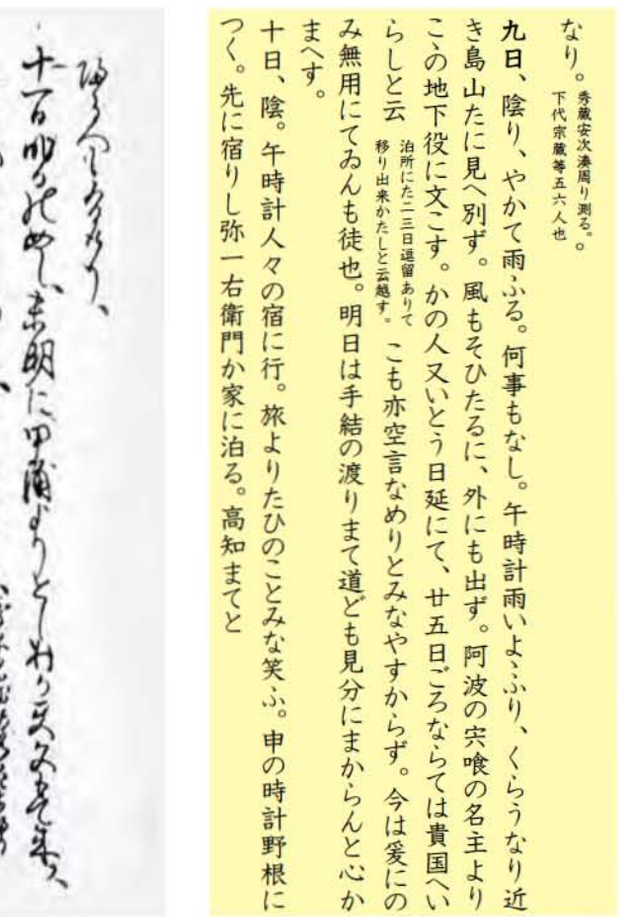
多かり。扨かの人又十三日ごろ越境と云。何事も阿波人の消息みなから違ふ。きのふ甲浦より浦戸までかの宿り見分とて、郷廻り恕助遣さる。森某・宮崎、弘井、己等、楠島に道造りに罷る。又東股と云処より御船庫の渡り、秀蔵測量始む。高岡村大工安次と云ものもいみしき算者也。同しさまにみて物す。

八日、晴。夜へ阿波の国に行たる庄屋文こしたり。かの国にも兼て設たりし事ども違ひて、日積りも延ひて、十六日ごろなん越境と聞ゆ。日毎にかはりもて、今は云こしし事とも疑て、いとおほつかなし。けふも例の船の測量

なり。秀蔵安次湊周り測る。下代宗蔵等五六人也

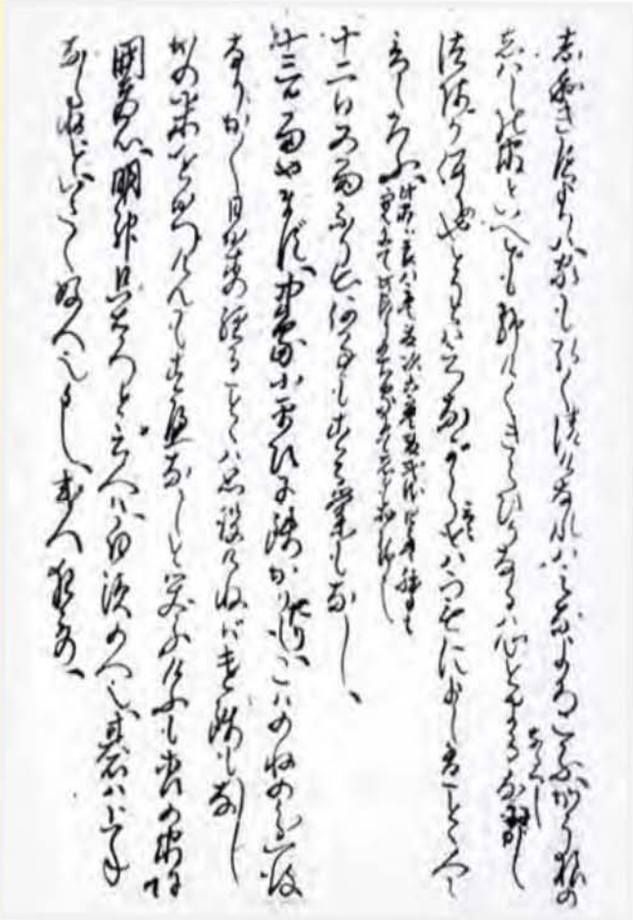
九日、陰り、やかて雨ふる。何事もなし。午時計雨いよふり、くらうなり近き島山たに見へ別ず。風もそひたるに、外にも出ず。阿波の宍喰の名主よりこの地下役に文こす。かの人又いとう日延にて、廿五日ごろならては貴国へいらしと云泊所にた二三日逗留ありて移り出来かたしと云越す。こも亦空言なめりとみなやすからず。今は爰にのみ無用にてゐんも徒也。明日は手結の渡りまて道ども見分にまからんと心かまへす。

十日、陰。午時計人々の宿に行。旅よりたひのことみな笑ふ。申の時計野根につく。先に宿りし弥一右衛門か家に泊る。高知までと



帰る人も有けり。

十一日、昨日の如し。未明に甲浦よりとし村か使文もて来り。又かの人早くなりつとて、とく帰れと云庄屋島崎快蔵夜前帰りしに越境はやくなりたりと云あはたしうて、辰時甲浦に帰る。郷廻り宅八はとみに用出来ていそき高知へ帰る。其たよりに家路に文遣

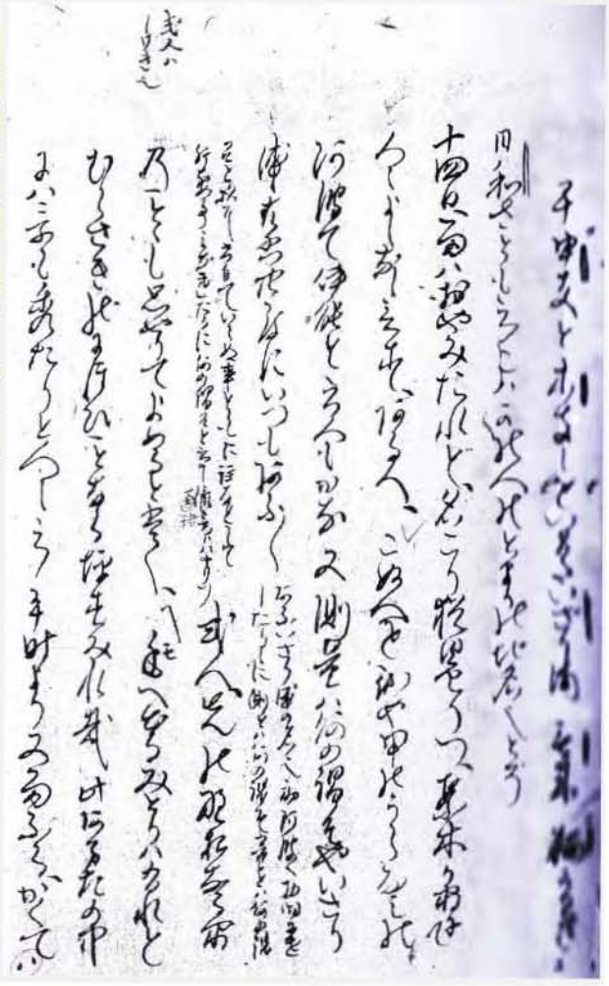


し、夏の衣などこせと云やる。彼人昨日日和佐と云地迄来りしと云。甲浦より六七里の地也。近き渡なれば、いたくさわきあへり。猶事とも何くれ多かりし。きのふ人足あまた帰せしが、又俄に呼にやりつ。早くより居たりし宿は、たよりあしきに、河内なる名主の家に、としむらともにうつる

志和き屋よりは、家も弘く清けなれはみなよろこふ。かう様のしはしの宿といへども静けくきらひかなるは心とまるなるへし。なにがし法師か仮りのやとりとは云ながら云云は実によし有こと、人々言しろふ　此宿は表八畳敷、次六畳敷、式台四畳、勝手も寛にて、此渡りの大家にてしかも物静也

十二日。又雨ふり出。何事もする業もなし。

十三日、雨やまず。中島小平次に銭かりたり。こはのねの分一役なり。かく日かす経ることは思設けねば、遣銭もなし。かの米をかつけんもすへなしと笑ふ。けふも森の宿にて囲碁。明神只右衛門と云人は、白浜の人也。碁は上手ならねど、いたく好人也かし。或人狂歌



早由支と　木支しをいまたいざり浦
　無来鞆うわさ　日和さとも云。

こはかの人のとまりの地名也とそ。

十四日、雨はやみたれど、名こり猶曇りつ。繁木か宿にて人々よしなし言す。ある人、

こぬ人を　待や甲のうらなみの
　阿波で伊能と云人もかな。

又、

測量は　何の謂そや　いさり浦　左右聞度に　いつもあふ、。

あふ、いさり浦の名也。扨阿波へ物聞に遣したりしに、測とは何の謂そ、量とは何の謂そと書付て、いらぬ事ともに注なとして肝要事みな違いたるに、「何に謂そ」と云事、通語とはなりつ

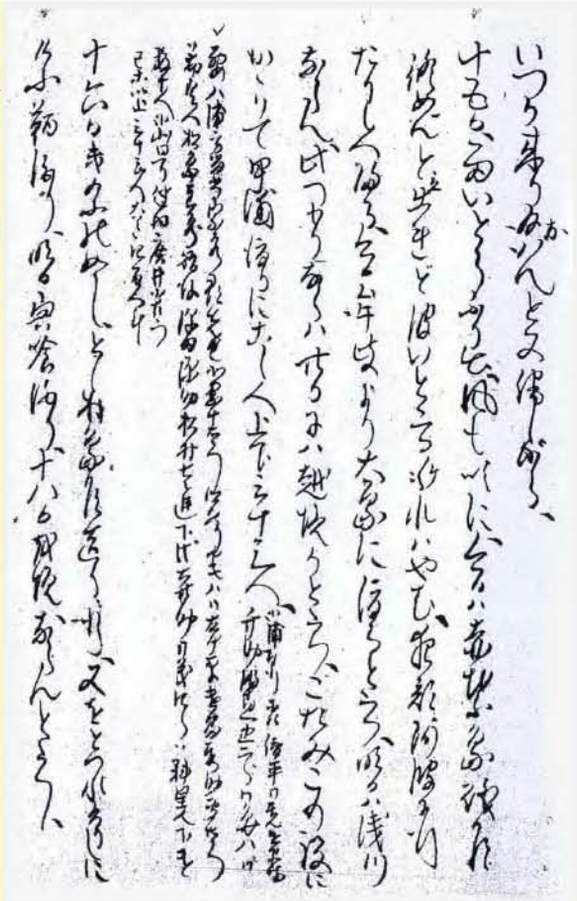
或人、先の野根なる宿のことも思やりて

＊**頭注**「或人はしけき也」

よめると書て、

もへ出る　みとりは有れと　むらさきの
　にほひことなる　坪すみれ哉。

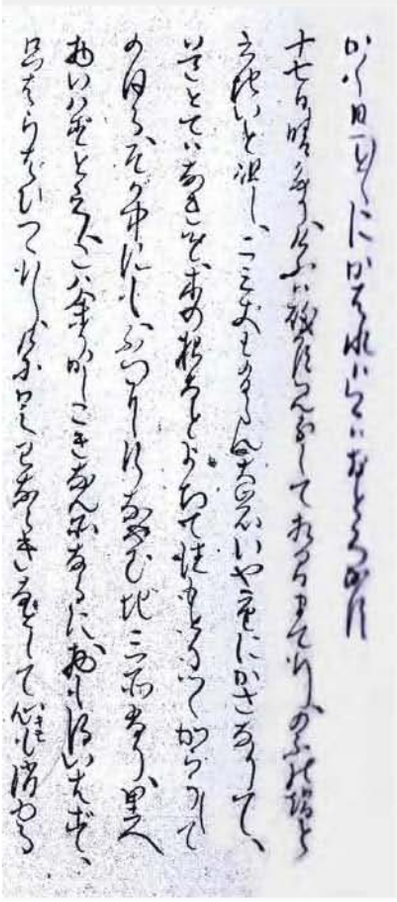
此あまたの中には歌も秀たりと人々云。午時より又雨ふる。かくては



いつか来りなんと又侘しかる。

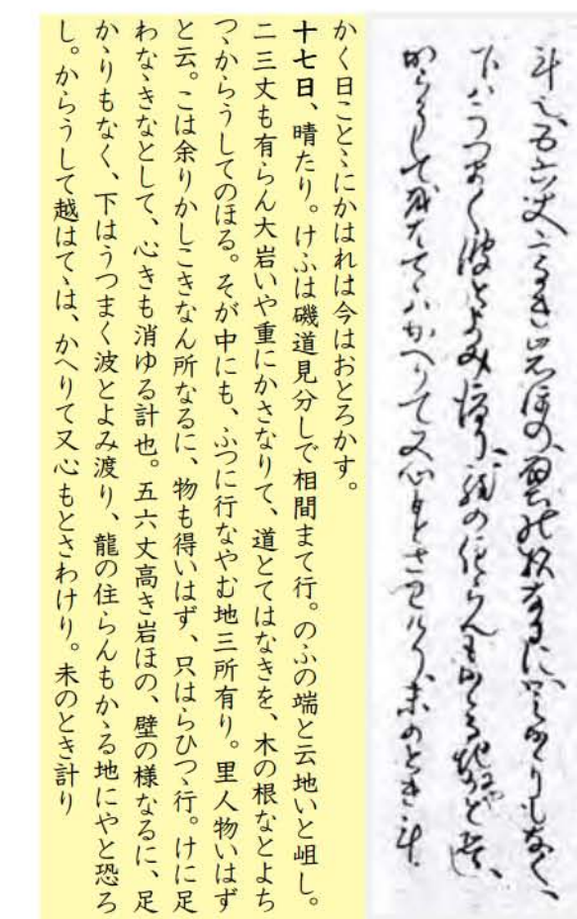
十五日、雨いとうふり出。風も吹に、今日は赤葉島磯道修めんと立出れど波いと高けれはやむ。夜部阿波に行たりし人帰る。今日牟岐より大島に渡ると云。明日は浅川ならん。此つもりならは廿日には越境かと云。こたみの役にかりて甲浦渡りにこし人上下三十三人 浦奉行森俊平、堂先運宮崎竹助、（中略）已等以上三十三人、大送り四百人斗

十六日、きのふの如し。とし村島道造りに行。又をとつれ有りしにけふ鞆泊り、明日宍喰泊り、十八日越境ならんと去。



かく日ごとにかはれは今はおとろかす。

十七日、晴たり。けふは磯道見分しで相間まて行。のふの端と云地いと岨し。二三丈も有らん大岩いや重にかさなりて、道とてはなきを、木の根なとよちつ、からうしてのほる。そが中にも、ふつに行なやむ地三所有り。里人物いはずと云。こは余りかしこきなん所なるに、物も得いはず、只はらひつ行。けに足わなきなとして、心きも消ゆる計也。五六丈高き岩ほの、壁の様なるに、足かりもなく、下はうつまく波とよみ渡り、龍の住らんもかゝる地にやと恐ろし。からうして越はてゝは、かへりて又心もとさわけり。未のとき計り



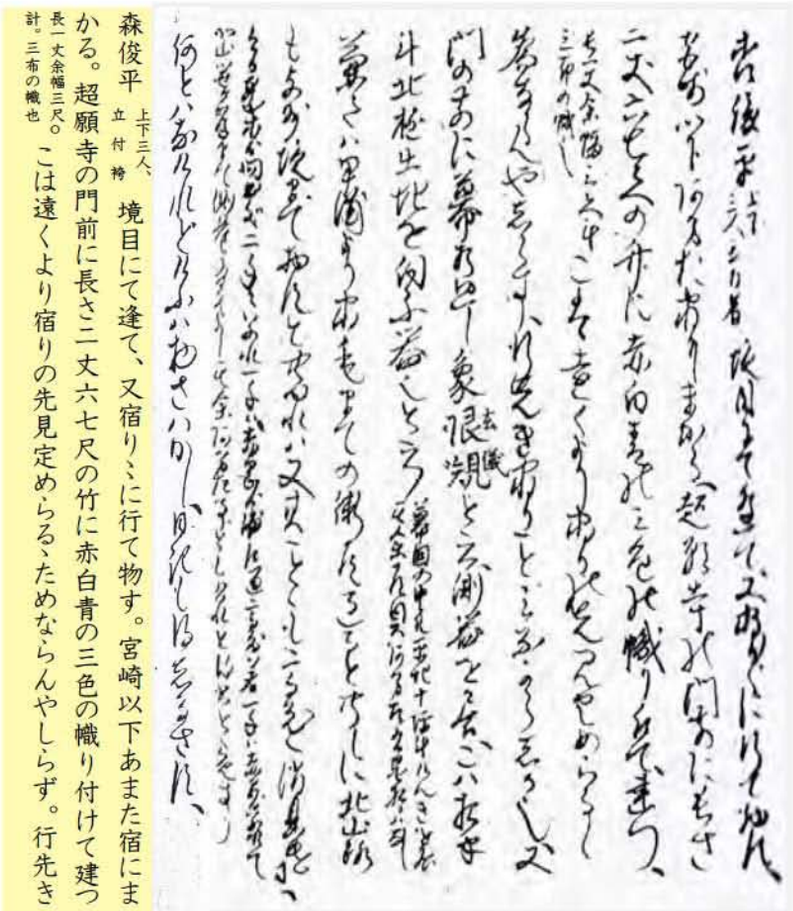
宿に帰る。又例の宿りゝ行行て夜いたくふけたり。

十八日、けふは始めて天よく晴たり。辰時出て生見の山鼻より野根の伏越まて見分。とし村は用有りて宿にのこる。

十九日、晴。けふはかの待うみたる測量人越境と云。みな人心かまへして出。巳時計己等阿波の境なるたむけまで行。とし村、正木、東又より境目まて道見分。北岡十右衛門、宮崎竹助等みなかの人に出会とて境目に出。此境の少し下さまに阿波より休所設く。甲浦庄屋老出会也。　午の時なんかの人越境有り。伊能勘解由、伊能周蔵、坂部貞兵衛、下河辺政五郎、青木勝二郎、柴山伝内、上田文助、家来七人外に竿取佐介、善八二人以上十六人。

阿波国より人々阿万た送りく。阿州家中関権二郎、其外庄屋、老、鉄砲衆十人計、彼是廿人計来る。境目よりみな帰る。庄屋三人御宿迄来る。関は門人と成りたる人也。肩衣袴着。

けふは測量なし。みな宿りにつく。伊能宿は超願寺、別宿は万福寺。夫々宿着に成る。



森俊平　上下三人、立付袴　境目にて逢て、又宿りゝに行て物す。宮崎以下あまた宿にまかる。超願寺の門前に長さ二丈六七尺の竹に赤白青の三色の幟り付けて建つ長一丈余幅三尺。計。三布の幟也　こは遠くより宿りの先見定めらるゝためならんやしらず。行先き宿りことみなからしかも也。又門の前に幕打廻し、象玄儀と云う測器を居。こは夜半計北極出地を伺う器也と云　幕囲いの中、凡そ平地十坪計けんき居。其余道具あまた有。晝夜にはなし　兼ては甲浦より宿毛までの街道過ると聞きしに、北山路も与州境まで物すと聞こゆれば、又其ことゝも高知へ消息遣す　今日繁木より聞出処、二手に別れ、一手は赤岡より浦戸通り高知着。一手は赤岡。より別れて、北山筈ヶ峯まで測量有るよし。其余あまた事とも有れと得書とめす。何とはなけれど、けふは物さわかし、日記も得しるさず

[当該日の伊能忠敬測量日記]

四月十九日　朝より晴天。午前暦局行書状を関権治郎に渡。九ツ後宍喰浦出立。本道を行。阿州、土州界迄　関権治郎、樋富菊郎、郡代手代四人、棹取手伝足軽十一人(性名前出)送別。又、土州郡方下役北岡十右衛門、浦方下役宮崎竹助、甲浦庄屋嶋崎快蔵、年寄吉松礼助出迎、直に案内。八ッ前甲ノ浦へ着。(国界前　阿州の番所の地を宍喰の古目という。日本図に有。土州の入口番所の地を甲ノ浦の東股という。又西股あり)止宿本陣　浄土宗南谷山超願寺。脇宿日蓮宗(一知)常堅山万福寺。

着後、郡代下役　北岡十右衛門、浦方下役　宮崎竹助、外普請方下役　広井小左衛門、浦方横目　岡本忠治郎、根来琢八、横田多良平、弘瀬亀八、外に休泊用達　沢田源助、松村土之進、同加わり樋口喜助、三木義四郎、勘定役松嶋忠蔵等出る。其後浦方奉行森俊平出る。郡奉行同格のよし。土佐国海辺測量険難の儀をいう。此夜曇る。雲間に測。

（続く）

原文と解読文との比較ができるよう並べて紹介しました。しかし、原文のスキャン画像の一部に密着が悪くピンぼけしている画像がありました。読み取りできるようデジタル処理しましたがこれが限界のようです。ぼけ部分は限定的ですので掲載させて頂きました。ご了解ください。

（編集部）

「但馬国養父市場村文書」について

稲葉　末明

本史料は、京都府京丹後市の橋本様（フルネーム不明）から豊岡市立歴史博物館にコピーのご提供があり、同博物館の加賀見省一様（前但馬国府・国分寺館館長）から本会にご紹介いただいたものです。

第八次測量にあたる「九州第二次測量」の帰路、伊能忠敬測量隊は播州姫路城下で越年し文化11年（1814）正月を迎えました。正月四日、姫路城下福中町を出発した測量隊は神東郡仁野村で大手分を行い、正月六日から同二十一日に本隊（伊能忠敬ほか）が丹波街道を、また分遣隊（永井甚左衛門ほか）が但馬街道の測量を行いました。本史料は、その折りに養父市場村（現兵庫県養父市）における測量に際して、あらかじめ地元関係者が集まり打合せをした際の記録です。

「書上帳」作成や測量隊の案内手配、天測場所の用意のほか、料理手配などの打合せ内容が記載されています。料理用意では「伊能勘解由様御年七拾才位ニ而・・・何ニ而茂和ニ成候物差上候而御機嫌よろしく候由承り候・・」との記載があり、伊能忠敬の嗜好にも配慮した準備を行っていたことが窺えます。

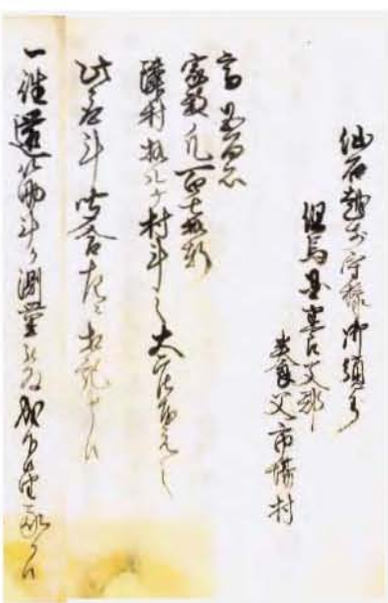
「御宿」として記載のある□依田屋治郎左衛門、○吹田屋市蔵、△鍋屋徳助は、測量日記の正月二十一日の条の「本陣吹田屋茂兵衛、別宿八木町伏見屋治郎左衛門、田結庄町鍋屋徳助」に対応します。また、それより前に記載のある測量隊員名の下にも□○△の表示があり、予め、隊員の宿泊先の割り付けをも行っていたと思われます。

本史料にはまた、天測の模様を描いた絵図が付されています。これは測量日記の正月十四日の条にある養父市場村での「此夜星測」の記事のことです。絵図には天測場所の見取図や観測する星のことが描かれていて、当時の測量の様子を窺うことができます。

本史料は打合せ（聞合）記録ですが、その地方独自の資材名や表現方法があるようで、その分、理解が十分でない可能性があります。会員の皆様にご理解とご指摘をお願いする次第です。なお、文中のルビと一部の判読困難文字を示す●表記は筆者が付したものです。

（以上）

直聞合心覚



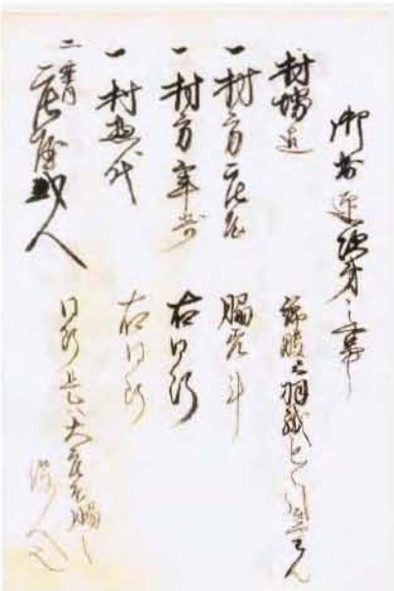
仙石越前守御領分
但馬国養父郡
養父市場村

高五百石
家数凡百七拾軒
隣村拾八ヶ村計之大庄屋元也
此取計聞合左ニ相記申候
一往還筋計り測量被為成下候由承り候
一往還筋隣村ノ境迄間数改置町杭立置（？）
可申候事
但し御役人様より被仰付候者是ハ町杭ニ者（ハ）
及不申候由承候
一六尺五寸ヲ壱間ト定六拾間壱丁ト相立
可申事ニ承り候
一村方田畑山林別ニ改置ニ及不申候由承り候
一村方書上帳面之儀者（は）別紙ニ写有之候
一絵図面之儀者（は）御城下之外村々ニ而（も）茂

入用無御座候よし承り候
一往還筋土橋此川上江凡何里何村より流
出川下丹後由良迄九十八里此處ニ而海江入候

一神社之事
見渡しニ無之候得者書出スニ及不申候

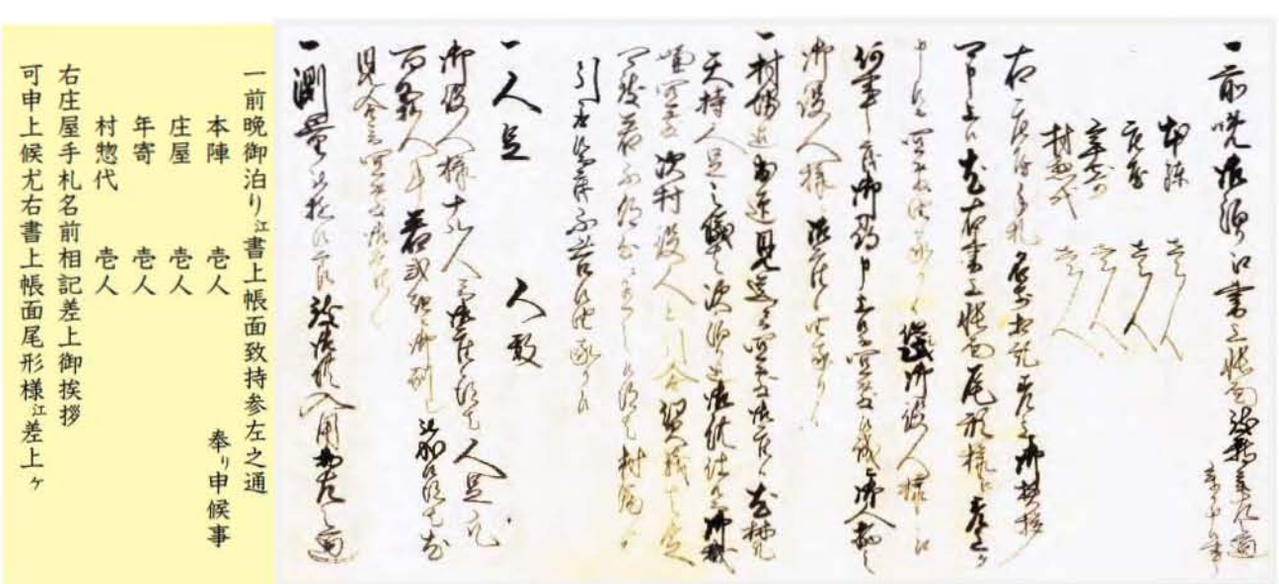
由承り候
一古城跡城主年歴相知不申候由不申上候
当村より凡何町
但し山間数改ニ不及候尤御出被成候而
御見改ハ無之由承り候
里数書上之事
園部御館下江　弐里
往還筋　亀山御館下江　六里
福知山御城下江　九里
一遠山見渡し之事
名山ニ而無之候得者書出スニ及不申候
若御尋有之候節者名も無之山下
郷山ニ而申上候由承り候
一御役人様御本陣御着被成候節
手札ニ名前相記ニ
御地預御代官様
並大庄屋
右御挨拶、御出可被遊候尤御泊り中
同様之事但し村方庄屋出候ニ者
不及申候由承り候



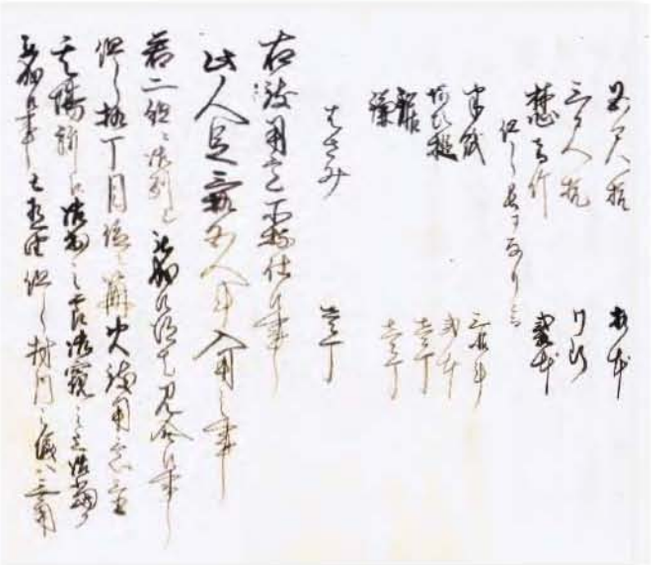
御出迎次第之事
村堺迄　綿服ニ而羽織も々引きや者ん
一村方庄屋　脇差計
一村方年寄　右同断
一村惣代　右同断
二案内
庄屋弐人　同断是ハ大庄屋脇之
役人也
三大庄屋　大小着用　袖位但し立付介

同紬　羽織位ひ
四御代官様　但し御供弐人
鑓持壱人
右何連も様ニ而茂手札二名前相記し差
出し可申候事承り候
一村境迄御本陣出迎麻上下帯刀
一御本陣御仕度御料理之事
御地頭様御幕御打被成候而よし（由）承り候
尤本陣之儀ハ三軒宜方何連茂幕
宜よく承り候
膾生成　汁加ぶら位ひ
御料理　平皿　鯛切身　猪口鳥越
焼もの鯛　香之もの見合
但し吸物二ハ及不申候由承り候
且伊能勘解由様御年七拾才位ニ而御

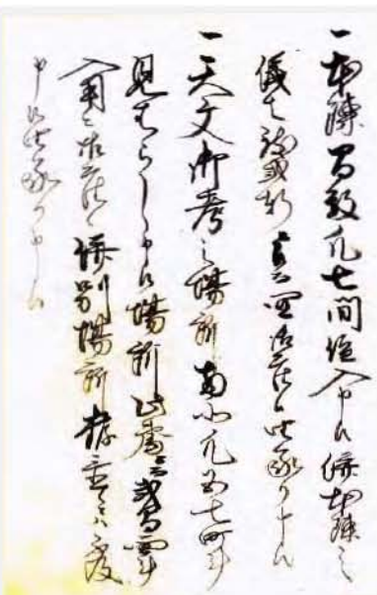
歯要敷御座候間何ニ而茂和ニ成候物差
上候而御機嫌よろしく候由承り候
豆腐楚者切とろ々汁
右御類差上候而宜承り候
尤御酒ハ御用ひ無之由承り併外御役人
申様ニ而出し申候而よろし九御座候事承り候
一人馬賃銭又は米銭木銭之儀者
御上より御書付出申候事承り候
尤御差図下書通よりハ御名前等ニ而茂
諸事東山家相改相記候差上申候而宜
よし承り候
一書上ヶ帳面之事
是ハ村々庄屋より前晩ニ差出し可申候
一御泊り御本陣入用物左之通
新敷手たらひ　新敷風呂敷
右見合ニ而宜敷由承り候
但し畳表替ニハ及不申候由承り申候
新敷足たらひ並足婦き
新敷ゆかた手ぬぐひ
一寺院之儀者書上ヶ計ニ而御見分ハ無御座由
承り申候



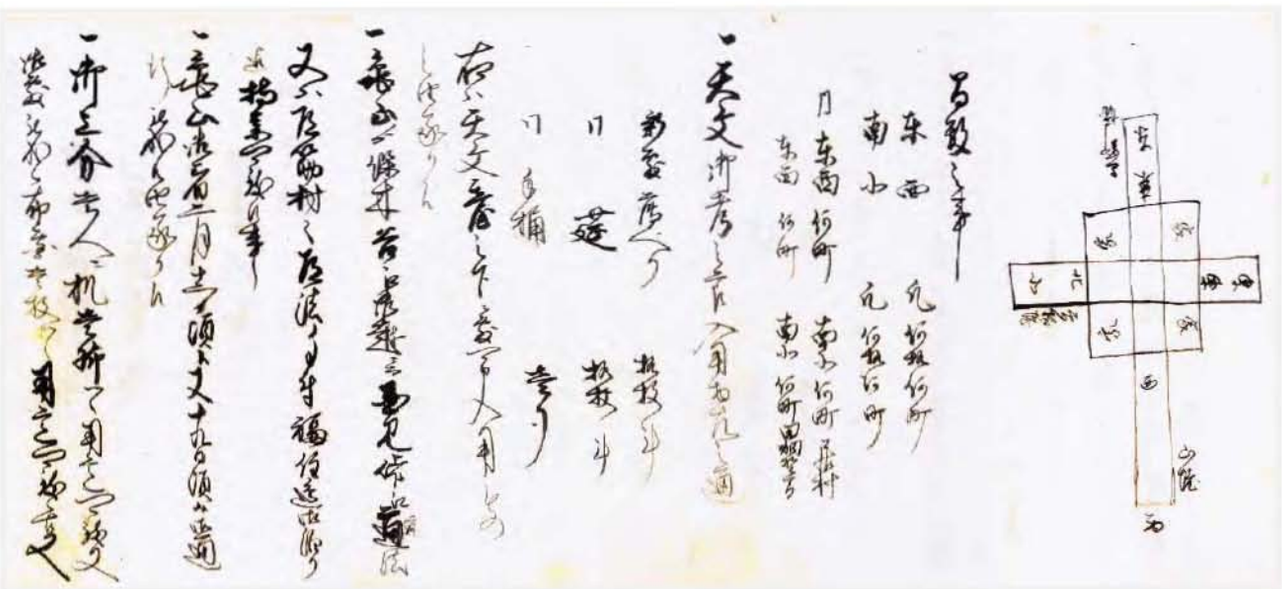
一前晩御泊り江書上帳面致持参左之通
本陣　壱人
庄屋　壱人
年寄　壱人
村惣代　壱人
奉り申候事
右庄屋手札名前相記差上御挨拶
可申上候尤右書上帳面尾形様江差上ヶ

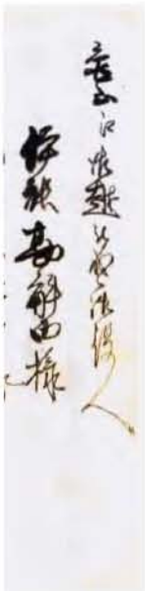


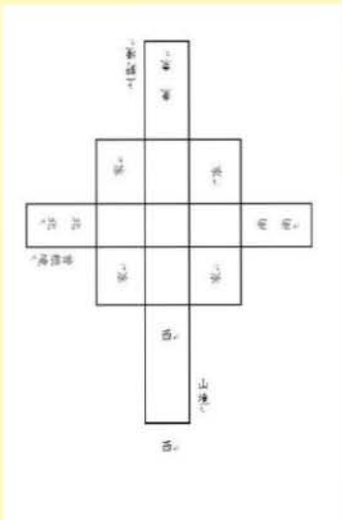
申候而宜敷由承り候但し此御役人様江
何事茂御尋申上候而宜敷候誠ニ御人柄之
御役人様ニ御座候由承り候
一村堺迄出迎見送ニ而宜敷御座候尤梵
天持人足之儀者次泊り迄御供仕候而御機
嫌宜敷次村役人と引合賃銭者定
可致着不得尤ニ有之候得者村境より
引取候而茂不告候由承り候
一人足　　人数
御役人様十八人ニ而御座候得者人足凡
百五拾人計若弐組ニ御別天被成得者尤
見合ニ而宜敷御座候
一測量被遊候節致御供入用物左之通



五尺杭　　拾本
三尺杭　　同断
●●竹　　弐拾本
但し長寸奈り二両
半紙　　三帳計り
阿ひ槌　　弐本
鋸　　壱丁
鎌　　壱丁
者さみ　　壱丁
右致用意所持仕候事
此人足三拾五人計入用之事
若二組ニ御別天被成候得者見合候事
但し拾丁目位ニ篝火致用意置
其場所江御出之節御窺之上御当り
被成候事も有由但し村内之儀ハ無用
一本陣間数凡七間位入申候併本陣之
儀者致弐軒ニ候而宜御座候由承り申候
一天文御考之場所南北凡五七町計
見者らし申候場所此處ニ而二間●計
入用ニ御座候併別場所拵置ニハ不及
申候由承り申候







間数之事
東　西　凡何拾何町
南　北　凡何拾何町
同　東西　何町　南北何町居村
東西　何町　南北何町田畑野間

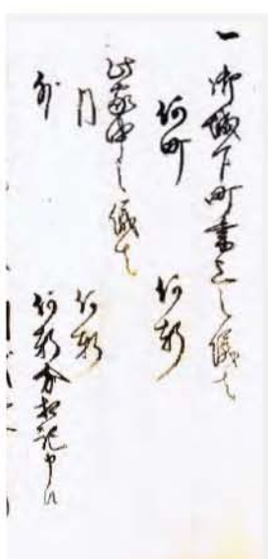
一天文御考之節入用物左之通
新敷薄べり　拾枚計
同　筵　拾枚計
同　手桶　壱勺
右ハ天文台之下ニ敷可申入用もの之由承り候

一亀山より保木谷江御越ニ而国見峠江道法又ハ道筋村々道法勺寸福住辺御泊り迄持参可致候事

一亀山御着二月十三日頃か俣十九日頃か御通行被成候由承り候

一御上分壱人ニ机壱脚づつ用意可致又御敷被成候布團壱枚づつ用意可致事

亀山江御越被成候御役人
伊能勘解由様
門谷清次郎様
尾形菊次郎様
保木敬蔵様



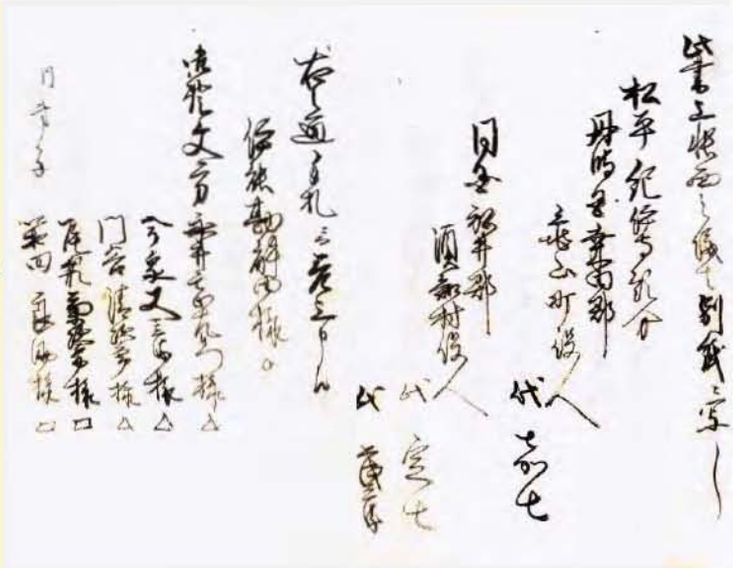
測量棹取　壱人
御家来　七人
上下人　拾弐人
此御荷持
須知江御越被成候御役人
永井甚左衛門　様
今泉又兵衛　様
伊能氏様御弟子壱人
棹取　壱人
外　御家来弐人
上下〆六人
此荷持

一絵図面拝借仕候間亀山御着之節御戻し可申上事

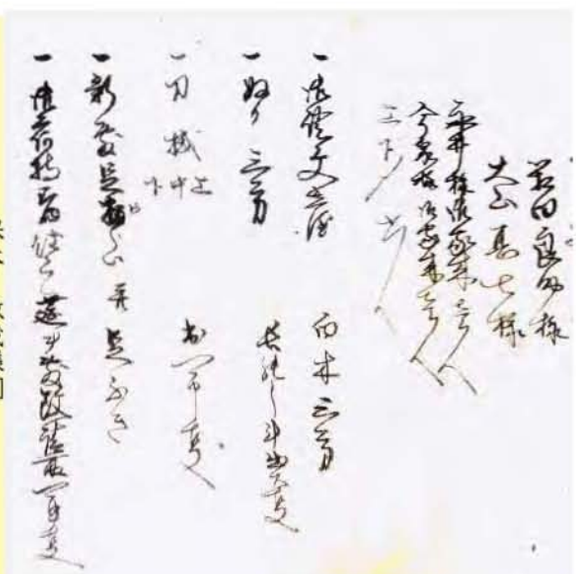
一人足弐人当月廿八九日頃通行被成候間此越御頼被成候

一書上帳面之儀者半紙ニ不限見合候承服候

一御城下御取計之儀者御町奉行様引馬ニ而上下御着用以手札御出迎被遊候由且又御本陣江御挨拶御窺之節も以手札御窺被成候事

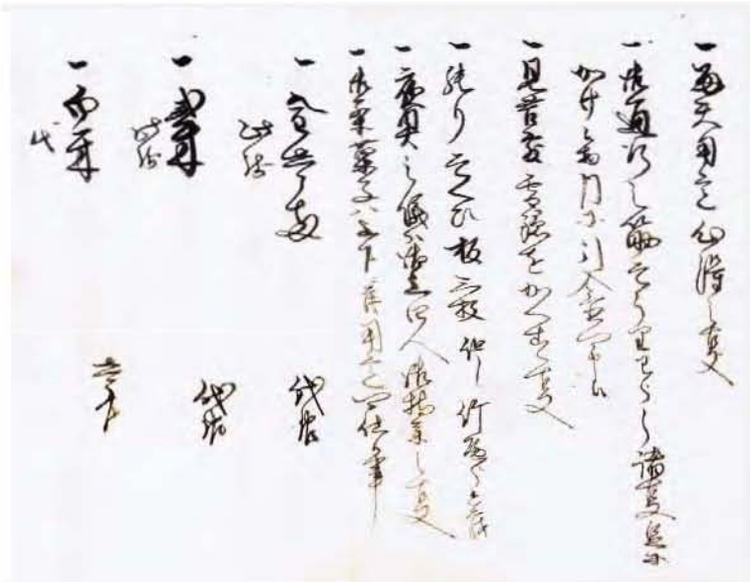


一御城下町書上之儀者
何町　何件
此家中之儀者
同　何軒
外　何軒分相記申候
此書上帳面之儀者別紙ニ写し
松平紀伊守領分
丹波国桑田郡
亀山町役人　代　嘉七
同国船井郡
須知村役人　代　定七
代　茂蔵
右之通手札二而差上申候
伊能勘解由様○
御證文方　永井甚左衛門様△
今泉又兵衛様△
門屋清次郎様△
尾形菊次郎様□
内弟子　箱田良助様□



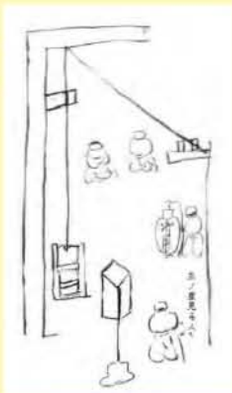
目附長持預り
保木　敬蔵様□
久保木佐右衛門様○
嘉藤　喜平次様○
高野　善蔵様○
若党
笠原　兵之助様○
保木　佐助様△
御棹取
大山　甚七様△
清兵衛様○
友吉様△
新八様△
清助様□
孫平様○
上下拾八人
□依田屋　治郎左衛門
御宿
○吹田屋　市蔵
△鍋屋　徳助
須知江御越被成候御役人様左之通
永井甚左衛門様
今泉又兵衛様

箱田良助様
大山甚七様
永井様御家来壱人
今泉様御家来壱人
上下〆六人
一御證文台　白木三方
一ぬり三方　長能し計出ス事
上
中　出可申事
下
一新敷足阿らい並足ふき
一御荷持着仕候て筵ヲ敷改請取可申事



一雨天用意心得之事
一御通行之筋そう里王らし諸事追爾かけ候物内爾引入置可申候
一見苦敷雪隠をかく春事
一能りそくひ板三枚但し竹遍ら●茂
一夜具之儀ハ御三四人御持参之事
一御茶菓子ハ上下ニ茂用意可仕候事
一金壱両　代●
此残
一弐朱　代●

此残
一百朱　壱●
代
右者御着之節書付上可申候事
一伊能勘解由様　御駕篭人足四人
是ハかん者ん共等為着候事
一馬無之村方ハ人足ニ而次替可申候事
一村方至而長キ所者御休所ハ壱間半
弐間位ひ之小屋かけ可置候事
一此所茶弁当用意可致候事
一御地頭様より之御使者御領分村々江差出し
可申候事
一雨天之節者御遠留之事
一御城下二三日も御留延之事
但し御地頭様
高●共
一御本陣幕
一迎人足●持参之事
一切王らし用意之事



先触安内之事

正月十四日出石出立　　拾弐人

廿四日　小谷泊り　　廿五日　久畑

廿六日　一ノ宮　　廿七日　天津

廿八日　福知山　　廿九日　竹田

卅日　園部

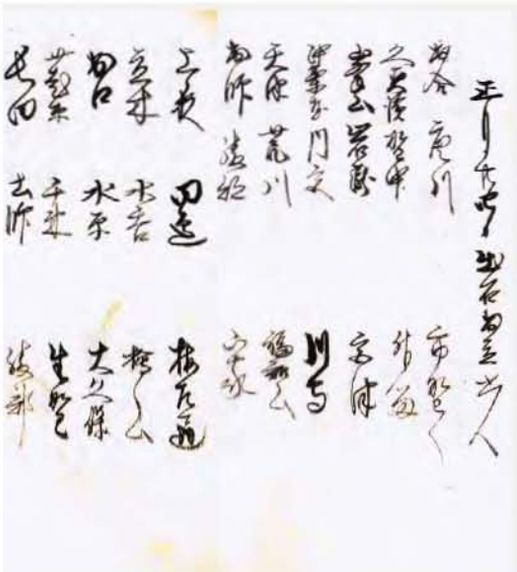
二月朔日　小多里　　二日　栢原

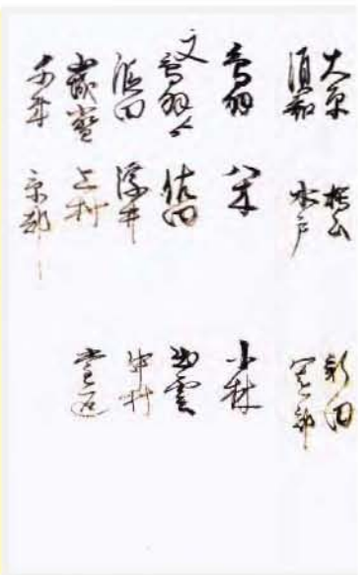
三日　追入　　四日　笹山

五日　古市　　六日　市原

七日　小野新田　　八日　笹山

九日　福住





正月廿四日　出石出立　　六人

出合　唐川　　市野々

久美浜　野中　　升（鱒カ）留

峯山　岩瀧　　宮津

仲茶屋　内宮　　川守

天津　荒川　　福知山

出（土カ）師　綾部　　山家

上杉　田辺　　梅左通

立木　水呑　　桧山

出口　水原　　大久保

菟原　千束　　生野

長田　土師　　綾部

大原　桧山　　新田

須知　水戸　　園部

鳥羽　八木　　小林

又鳥羽より　佐田　　出雲

塩田　浮井　　中村

山城小野　上村　　堂返

千束　京都

（完）

石川県支部ニュース

学習会＆ウオーキングイベント
伊能忠敬の見た風景を歩こう！

寺口　学

石川県能登町の小木公民館では、伊能忠敬が享和3年（1803）に能登にやって来たことを地元住民に知ってもらおうと、10㎞ほど離れた白丸公民館と共同で、学習会とウオーキングイベントを企画しました。

昨年6月8・9日に白丸公民館と小木公民館でおこなわれた事前学習会には、40人近くの地域住民が参加し、寺口から忠敬の生涯や全国測量に至る経緯、能登半島での測量の様子を紹介したほか、石川県内が描かれた様々な絵図や、忠敬と交流した越中の石黒信由についても紹介しました。

同月17日のウォーキングには35人が参加し、小木公民館前を午前9時過ぎに出発。関係者らは、自作の御用旗を掲げ、網笠をかぶり、特製の和風チョッキを羽織って、参加者を先導しました。

最初に忠敬が宿泊した小木湊・薩摩屋清兵衛宅跡（現在でもご子孫が在住）を訪れて、当時の測量隊は作業を半日で終えて宿へ入り、その日の測量結果をまとめたり、夜の天文測量に向けた機器の設置作業をおこなったりしていたことなどを紹介しました。

次に、忠敬らが主要な山岳の方位を測定した、日和山とよばれる岬に登り、当時の測量隊が眺めたであろう切り立った崖が連なる風景を目にしながら、忠敬らの熱意に思いをはせていました。（ただし、この日は、伊能隊が見た立山連峰等の山々は見えず。）その後、場所によっては舟による測量をおこなっていたとみられる九十九湾周辺、白い砂浜が広がる五色ヶ浜を通過。忠敬らがやってきた同時代にサツマイモの栽培に取り組んでいた浜谷七郎兵衛の顕彰碑など、地域の史跡もあわせて巡りました。午後2時ごろに最終目的地の、忠敬らが宿泊した白丸の高源寺へ到着。近くの白丸公民館で閉会式をおこない、解散となりました。

参加者のみなさんは、1人も脱落することなく約10㎞を完歩できたことをお互いに喜び合うとともに、70歳近い年齢で全国を歩いた忠敬の偉業に、改めて感心しているようでした。

小木公民館・白丸公民館共催事業

小木の宝探訪の巻　2017/06/17

伊能忠敬の足跡を歩く

「伊能忠敬の見た風景を歩こう！」

伊能忠敬でござる。故郷の見た200年前の風景を思い浮べながら歩いて下さい！！

伊能忠敬が能登町にやってきたのは、享和3年(1803年)のこと。
小木から白丸まで伊能忠敬の見た風景を歩いてみましょう。

日時　平成29年6月17日（土）　9時～15時30分
小木地区活性化センター　9時集合
講師　寺口 学さん(能登町教育委員会事務局学芸員)
参加費　600円(弁当代)
問合せ&申し込み　小木公民館 TEL 74-0194　白丸公民館 TEL 72-0279
締め切り　平成29年6月15日（木）
持ち物　飲み物(水分補給が必要。)・ザック等・嗜好品・タオル他
服装　歩きやすい靴と服装。帽子必携。

行程　約9.5km

小木活性化センター(小木公民館) → 新町さつまや跡 → 日和山 → 市之瀬 → 越坂 → のと海洋ふれあいセンター(昼食) → 新保 → 内浦長尾(浜谷七郎兵衛記念碑跡見学) → 白丸(高源寺) → 白丸公民館

※小木地内では、急坂を登る場所が2か所あります。それぞれ5分ほどの坂ですが、ゆっくり歩きましょう！

能登町小木公民館での事前学習会

『海の観察ガイド』（能登里海教育研究所発行）「赤崎海岸を歩いた伊能忠敬」と題して、現地を測量した様子を4ページにわたり紹介しました。

この冊子は能登町の小・中学生に副教材として配布され、利用されています。

九十九湾周辺

浜谷七郎兵衛顕彰

日和山からの眺め（立山連峰は見えず）

伊能測量隊が見た眺めはこれ！（2017.1.26 日和山にて浦田慎氏撮影）

金沢城下の宿泊地に 案内板を設置

河崎倫代
室山 孝

伊能忠敬没後二百年を前にして、石川県支部では測量隊宿泊地跡に2枚の案内板パネルを設置させていただきました。場所は金沢市尾張町2丁目11-24、塗料販売店「森忠商店」です。

パネルはいずれもA1サイズ（縦約80㎝、横約60㎝）のポスター大です。「伊能忠敬測量隊宿泊・天文測量地」では、金沢測量の様子を絵図と写真で解説し、外国人向けに短い英文の説明も添えました。

この通りが江戸時代の北国街道であり、現在も金沢駅から近江町市場、東山茶屋街といった人気観光地を結んでいて、多くの人々が往来しているからです。

もう1枚は「完全復元伊能図全国巡回フロア展in金沢工業大学」（平成22年10月開催）で販売された「伊能中図（石川県版）」を特殊加工したものです。

イヴ・ペイレ氏旧蔵の華麗・鮮明

パネル1：金沢市尾張町2丁目 森忠商店の左袖部に設置

パネル2：森忠商店の右袖部に設置

2017.12.19 毎日

伊能忠敬の足跡 紹介

金沢 宿泊跡地に案内板

江戸時代に全国を歩き国内初の実測地図を作った伊能忠敬（1745～1818年）の県内での足跡を紹介する案内板が今月、金沢市尾張町2の町家の軒先に登場した。伊能が測量調査中に宿泊した旅館跡地に建つ町家で、周辺には国内外の観光客の姿も多い。案内板を設置した「伊能忠敬研究会県支部」は「石川の歴史が身近に感じてほしい」と期待している。【久木田照子】

研究会県支部 古地図で測量追体験も

同研究会によると、伊能測量隊は1803年の4次調査で県内を訪れ、旧暦7月2日、尾張町の旅館「住吉屋」に宿泊した。住吉屋の移転後は塗料販売「森忠商店」が店を構え、現在も1933年築の町家で営業している。

伊能の没後200年となる来年を例に、同支部は県内での足跡を広く紹介したいと、案内板の設置を計画。森忠商店の快諾を得た。周辺には江戸時代を偲ばせる町家が多く、現役の茶屋街や近江町市場などが近いため、観光にも役立ててもらう狙いだ。

案内板は（A1サイズ（縦約80㎝、横約60㎝））。伊能の県内での足跡について、「加賀藩から『歓迎がましき』と録われ、目立たないように歩測などで測った」（住吉屋に軒先の案内板を眺める河崎倫代さんだと森麻喜子さん（中央）＝いずれも金沢尾張町2の森忠商店で）

森麻喜子さん（62）は「年をとってから地図を作る偉業を成し遂げた伊能さんを尊敬している。案内板が地域を盛り上げてくれたら」と話す。

毎日新聞 2017.12.19 付

な中図で、石川県全域の測量を見ることができます。

一般市民、教育関係者、観光ガイド等の皆さまに広く知っていただきたく、新聞社5社に連絡してお披露目しました。当日は森忠商店の森麻喜子様と室山孝会員と河崎の3人で対応し、4社の取材を受けました。

測量隊が宿泊した住吉屋は、藩に代わって関所の通行証を出す手判宿の一つで、明治初期に十間町に移転し、現在も「すみよしや旅館」として営業しています。その跡地に入った森忠商店は、天保14年創業の老舗塗料店です。漆・柿渋など、昔ながらの自然塗料や各種塗料、接着剤、化学製品も扱っています。建物は大正12年築の代表的な「金沢町屋」として、尾張町通りのシンボル的存在となっています。10数年前から入口横のショーウインドーに、手製の解説額「伊能忠敬測量の地」と「御用旗」を設置させていただくなど、協力をいただいてきました。ようやく、きちんとした案内板を設置することができて、支部会員一同ホッとしています。

この2枚のパネルが小学生から外国人まで多くの人々の目に留まり、伊能測量に関心を持つきっかけとなってくれたら、こんな嬉しいことはありません。

「御用測量熊本県資料集」を出版
ＤＶＤとＡ４判本の二本立て

熊本県　平田　稔

伊能忠敬没後二百年の前年中に―と、製作を進めてきた「御用測量熊本県資料集」が十二月中旬にでき上がった。熊本県内の旧家などに残る、あるいは公的機関が保存する御用測量関係の古文書を探し出して、その写真を撮影し、書かれた文字を読み解く（釈文）のが狙いで、スタートから約二年を要した。初めはＤＶＤ－Ｒだけの計画だったが、古文書の内容に関心を持つのは高齢者が大半を占めるとあって、最終的には活字本も出版した。

取り返しがつかなくなる前に

きっかけは「今、関係古文書を確認し、写真に撮っておかなければ、捨てられ、あるいは散逸して取り返しがつかなくなる」という渡辺一郎本会名誉代表の思いを耳にしたことだった。始めてすぐ、分不相応のことを始めたと気づいたが、釈文の助け人が近くにいたことで少し安心し、県内だけでなく伊能忠敬記念館まで写真撮影に出向いたりした。「〇〇家文書」というくくり方なら、今回世話になった旧家や財団はせいぜい七、八件だが、残された文書の内容は実に多岐にわたる。測量隊一行を迎える準備作業の打ち合わせに始まり、下調べと下準備、一行が着いてからの接待、作業手伝い、道具類の手配・運搬…、さらには後年まで忠敬翁と交友が続いた庄屋の「交換書簡」まで出てきた。

それらを内容と時期別に分類したら三十七点の古文書が浮かび出て、それを七部に分けることにした。筆者がそもそも日本全国測量にかかわる動機になった池部長十郎（肥後藩測量術師範）の紹介も捨てがたく、最後に加えさせてもらって最終的に八部構成に。そのタイトルは以下のようになった。

第一部　御用測量に関する幕府通達と測量隊の先触れ
第二部　薩摩へ出向いて事前調査
第三部　測量直前の地元覚書や集情報
第四部　測量作業の実際
第五部　地元の測量作業支援と応接
第六部　境界・帰属に付き御用隊に訴え
第七部　伊能忠敬と天草庄屋の往復書簡
第八部　肥後藩測量術師範の活躍と実績

古文書の在りか

仰々しく「資料集」と銘打つ以上は「なんだ、あの文書も知らないのか」と後ろ指を指されることだけは避けたい。そう思って、「市町村史・誌」など既刊資料から関係記事を捜し、その出典をメモし、時間を見つけては出かけた。既刊資料全部に当たる時間はないから、知り合いに「何か知らない？」と尋ね続けた。

藩庁文書に関しては熊本県には「永青文庫」（財団本部は東京）があるから、面倒な手続きさえ踏めば熊本大学附属図書館で閲覧・撮影するのは、そんなに難しくない（閲覧・撮影代金はかかる）。問題は民間で何が見つかるか。

今回の最大の幸運は、芦北（県南）と天草（当時は天領）の旧家に圧倒的な数の古文書が、きちんと整理されて保管されていたことである。どんな文書があるか、事前に調べて出向き、撮影に臨んだはずだったが、興奮しすぎたせいか、長い文書（特に「測量同行日記」類）で肝心な部分を飛ばし撮りしていて、県南には三回、天草には二回、撮影に出向くことになった。

忠敬の交換書簡二件は貴重？

うれしかったのは、伊能と池部長十郎（肥後藩測量術師範）及び伊能と天草・高浜村庄屋の二件の往復・交換書簡が見つかったことである。

池部とやりとりした書簡は、なんと芦北の旧家に保管されていた。「なぜこの家に？」を理解するまで時間がかかったが、要は①薩摩に下準備に向かった芦北の地侍は測量術師範・池部の門弟の倅であった②その倅を薩摩に調査に向かわせるに当たって、池部が伊能宛の書簡を持たせた③池部の書簡を受け取った伊能が後日、門弟宅に「池部に届けてくれ」と返書を送ってきた―という流れである。だから芦北の門弟の子孫宅に両者の書簡（写し？）が保管されていた。

一方、天草の庄屋が伊能に送った書簡は、伊能忠敬記念館で見つかった。国宝台帳一覧でそれらしい資料名を見つけ、同館の学芸員に確認してもらって熊本から出かけた。外の多くの関係書簡と一緒に巻物に仕立てられてあって、それを学芸員とそーっと開きながら、目指す文書（当然、国宝）を見つけ、汗だくで撮影した。

池部とは測量直前の打合せ文書、庄屋とは御用測量から数年後の手紙のやりとりで、交わされた時期・シーンは異なるが、全国的に見ても貴重な資料といえるのではないか。

初のDVD-R製作に冷や汗

資料目次から瞬時に目指す資料の写真や釈文に飛び、画面を自由に拡大・参照しながら見る―。これからの古文書資料集はこうでなくちゃ―と、初のDVD―Rづくりに意気込んだ。

しかし「PDF（校正なしの完全データ）以外は受け付けないので覚悟して」と地元印刷所の責任者に念を押されて、事柄の重大さが少しずつ分かり始めた。加えて営業マンがDVD出版を扱うのは初めて―という。結局、営業マンに説明しながらデータを戻し、初校も二校もなく、印刷所は完全データ（版下原稿）を預かって、それを電磁媒体に記憶させ、リンク作業を行うだけ、と理解したのは十一月になってからだった。

そのあと決断した活字本づくりはラクなもの。経費を抑えるために、こちらも校正なしの完全データ渡し（PDF）ではあったが、組体裁に合わせて写真データを張り直す作業だけでよかったから、DVD納品に合わせて本もできあがった。

全国各地に似たような資料が残されていると思います。伊能忠敬没後二百年記念式典を間近に、渡辺名誉代表の思いを受け継ぐ地域が増えることを期待します。

【会員優待】

会員には送料無料・着後代金振込方式で

◇価格◇

DVD　価格一五〇〇円＋税

本（A4判・150ページ）

価格二〇〇〇円＋税

◇注文方法◇

・メール又はファックスで編著者まで
E-mail
taminoru@abelia.ocn.ne.jp
FAX　0968-86-4213

・ホームページ（「たまきな出版」で検索）のナビサイト「御用測量」の注文フォームから

・アマゾン通販の「本」「DVD」から（予定）

新入会員自己紹介

滋賀県　足立　智彦

はじめまして。私は近江八景のひとつ“粟津晴嵐”に近い御殿浜というところで生まれ、同じく“石山秋月”で有名な石山寺の近くで育ちました。

伊能先生の御名は、小学生の頃から存じ上げておりましたが、このほど、もう少し深く知りたいと情報収集しているうちに貴会に巡り合いました。

５０代を迎えると同時に行政書士を開業いたしました。私は伊能先生の生き方に大いに励まされる思いがいたしております。

今後は、伊能先生の業績や生きざまについて更に深く研鑽を重ね、挑戦する中高年の方々に幅広くお伝えすることにより、私と同様、一人でも多くの方が勇気づけられれば幸いと存じます。

ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

お知らせ

さわら雛めぐり・さわら雛舟春祭り

小野川の雛舟

江戸の商都の面影を残す佐原の町並みをめぐり、商家自慢のお宝を見てまわる「佐原まちぐるみ博物館」を、佐原おかみさん会が運営しています。その企画展の一つ「佐原雛めぐり」が開催されています。

佐原まちぐるみ博物館に参加している店舗の半数以上で期間中、江戸・明治期の古びなや御所を模した建物に人形が収まる御殿飾りなど各家に伝わる大切な雛人形が店頭に飾られます。

また、伊能忠敬記念館や佐原町並み交流館などの周辺施設でも雛人形を飾るなど、まち全体で春の空間を演出しています。

店先の桃色のまねき布が展示場所の目印です。どんどん中に入ってご覧ください。月曜日や水曜日はお休みが多いです。

開催期間
平成30年2月10日（土）～
3月25日（日）まで

時間：各店舗によって異なる

会場：小野川沿い
（佐原まちぐるみ博物館、町並み交流館など）

伊能忠敬翁没後200年記念事業

平成30年（2018年）は郷土の偉人である伊能忠敬翁が亡くなってから200年目の節目の年です。これを機に、伊能忠敬翁の偉大な功績を後世に伝え、永く歴史にとどめるため、香取市では銅像の建立や記念事業を行います。

・銅像建立場所
JR佐原駅南ロータリー

・銅像製作者　木内禮智（れいち）氏
注釈：香取市佐原出身の彫刻家

・完成予定時期　平成30年5月頃

（香取市HPより抜粋構成しています）

二〇一八年度 年会費納入のお願い

同封の郵便振込用紙での納入にご協力ください。

2018年度の会費は5,000円です。

2017年度未納の方には振込用紙に10,000円と記入しています。

2018年度まで納入済みの方には振込用紙を同封しません。

ご自分の納入状況に疑問がある方は事務局までご連絡ください。

（振込先）

ゆうちょ銀行振替口座

口座番号：00150-6-0728610

加入者名：伊能忠敬研究会

住所変更など事務局への連絡は、通信欄をご活用ください。

その他、ホームページも開設しています。事務局への連絡、会員への情報提供等にご活用ください。

『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

＊刷り上がり一頁に入る文字数は約 2000 字（704 字×三段または 480 字×四段）です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

②原稿のかたち

・本文（テキスト） 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的な JPEG 形式または TIFF またはフォトショップの PSD 形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで 350ppi 程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

＊印刷サイズが 100mm×75mm で 350ppi のカラー写真の場合、1MB 前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによって5M モード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。わからない場合はＬ判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキャナで撮った電子ファイル（JPEG 形式または TIFF 形式）にしてください。

③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、ＣＤなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷上り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくは本誌六七号および六八号を参照）

送り先

・電子メール添付の場合 kaiho@inoh-ken.org

・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4－9－6日本地図センター2階
伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。

・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取っておいてください。

・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。

・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。

・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。

次号（第85号）は2018年6月発行　原稿〆切は4月30日の予定です。

伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。
①会報の発行　研究成果・会員活動情報など　原則として年三回発行
②例会・見学会の開催
③忠敬関連イベントの主催または共催
④その他付帯する事業

三、入会方法等　入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、**伊能忠敬研究会**事務局所在地
〒153-0042 東京都目黒区青葉台4－9－6 日本地図センター2F
電話・FAX 03-3466-9752
（留守の場合は録音テープに吹込んでください。）
事務局メール mail@inoh-ken.org
郵便振替口座 〇〇一五〇六-〇七二八六一〇
ホームページ http://www.inoh-ken.org/

伊能忠敬研究会関係ホームページ

○伊能忠敬ｅ資料館「ＩｎｏＰｅｄｉａ（イノペディア）」伊能忠敬と伊能図の大事典
http://www.inopedia.tokyo/

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料
http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/

○「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料
http://www.tt.rim.or.jp/~koko

編集後記 ◇昨年の11月以来の長風邪はいつもと様子が違った。熱はあっても37度台と高くないが咳が尋常でない。胸はゼイゼイ背中が痛い。夜も安眠できないほどだ。◇幸い？なのか、12月末の締め切り期限になっても原稿が集まらない。一息つけたのは良いのだが風邪の神は許してくれない。孫たちは嫁の実家とのことで静かな正月となった◇２月に入り、足かけ３か月に及んだ長風邪もやっと終息をみせた◇原稿も十分ではないが集まり始め、月半ばには一気に飛び込んできた。そうなると気になるのが発行日のことだ。◇今号は古文書のスキャン画像が多くあり画像処理ソフト（フォトショップ）の出番が目立った。◇厚物のスキャンは、綴じ代付近でスキャナとの密着が悪くなるので注意しないとボケ画像になりやすい。今回もディジタル処理をしても読めない部分が若干でた。写真の方がピント合わせがしやすい場合がある。併用や使い分けが必要のようだ。◇今号も何とかギリギリまとめることができた。毎度のことで恐縮だが皆様からの早目の投稿をお願いしたい。（Ｓ・Ｍ）

「伊能忠敬研究」第 84 号© 2018 年 2 月 28 日発行　編集　髙安克己　発行　鈴木純子
〒153-0042 東京都目黒区青葉台 4-9-6　日本地図センター２Ｆ　伊能忠敬研究会　TEL&FAX 03-3465-9752